

精選 内村鑑三

Selection Kanzo Uchimura

目次

本書には内村鑑三の文章が長短あわせて一五三題収められている。内村の若き頃の講演文から晩年の聖書研究文までが一書に収められており、一巻の書として分量が大部分くなっている。それゆえキーワードを設けて本書全体を十二の篇に分けた。キーワードは人生や人間実存に関する語であつて、内村自身のキーワードでもある。また、目次としてもう一種「遡行年代 目次」も付してある。内村の書いたものはその晩年に簡潔で修鍊されたものが多いと感ぜられたからである。

本書を初めて手にされた方は、目次を眺めて気になつたものを読んでみるのもよいし、あるいは巻頭より順に読んでみるのもよい。

なお本書は内村の原文を現代読者向けに更新したものであり、特に聖書からの引用句は全面的に改めている。ただし原文の原義、その文体、語勢を尊重し、可能な限りそれを保持再現するよう心がけた。編集の詳細については巻末の編集後記に記してある。

目次

教え育み

ボーイズ・ビー・アンビシャス

Boys be Ambitious 16

理想の友人 故ハリス夫人 24

罪と完全 27

理想と実際 道徳の実際 29

神学か農学か 32

後世への最大遺物 42

狂気と正気 90

直覚と実験 92

二種の質問 93

真理と自由 94

清秋雑感 第二種の偽善者 100

有効的伝道法 102

私は如何にして信者を作ったか 105

人格と信仰 113

信仰の必要 115

人なる先生 120

イエスの先生 122

孟子を読む 124

岩崎行親君と私 125

健全なる聖書研究 129

聖書の研究法について 131

CRITICISM AND ORTHODOXY

批評と正教 135

旧式か新式か 136

基督教研究の方法 139

働き

商売成功の秘訣 144

デンマーク国の話 146

桶職 159

真個の平民 161

信と行 163

WORK AND LIFE 164

BE SLOW 遅鈍なれ 166

MODERNISM AND AMERICANISM

現代主義とアメリカ主義 167

米国が日本に蒙らせし精神的害毒 168

もしルターが日本に生まれたならば 171

ノアの大洪水を思ふ 175

日露戦争より私が受けた利益 182

何でもない 191

祈禱 192

聖貧 193

ヨセフの話 196

家庭と結婚

水を化えて葡萄酒と成し給ふ 214

結婚式の辞 217

婚姻の意義 219

近代人の愛と基督信者の愛 223

ルツ記大意 229

主の使女マリヤ 232

塩と砂糖 237

塩と平和 238

義の宗教 244

ホームの起原 245

犠牲の生涯 246

ユダヤの祭事 247

ユダヤの祭事(再び) 259

詩想

二月中旬 266

余の好む花 267

余の愛する秋の花 271

秋日曳杖 276

THE HUMOURLESS PEOPLE 277

生きざま

伊藤一隆を葬るの辞 280

故横井時雄君のために辯ず 288

伝道の忍耐 294

佐々城豊寿姉を葬る 302

十字架の道〔第二十回〜第三十回〕 307

頌栄の辞 360

イザヤ書の研究 369

単独

単独の勢力 440

RELIGION PERSONAL

宗教は個人的である 443

BE UNPOPULAR 444

単独の讚美 445

夏の夜の黙想 キリストか世か 452

ALONE BUT NOT ALONE 453

パリサイのパン種 455

A SERVANT OF JESUS CHRIST

イエスキリストの僕パウロ 461

A GREAT CONFUCIANIST

大儒伊藤仁斎 462

後継者問題 463

人を見ざれ神を見よ 467

異端 470

INDEPENDENCE 472

事実

事実の信仰 474

実利主義の基督教 475

文学者の信仰 478

キリストの死 480

聖書における人 496

哲学と宗教 503

PHILOSOPHY AND CHRISTIANITY

504

ソドムとゴモラの覆滅 505

毒麦の比喩 525

クリスマスの教訓 533

信仰の本質的な差異

信仰の冒険 540

余の耐えられぬ事 543

我が信仰の祖先 547

真正の基督教 549

文学者の基督教 559

迷信と信仰の区別 563

CHRISTIANITY OF THE UNCON-
VERTED

神に帰るの経験なき者の基督教 564

FAITH AND THINKING 565

イエスは如何なる意味において

神の子であるか 567

人なるキリスト 570

TRUE RELIGION 576

DOES FAITH SAVE?

信仰は果して人を救うか 577

偽預言者とは何ぞや 579

画然たる区別 587

神本位の宗教 589

近代人の神 596

二種の信者 598

キリスト第一 599

WHAT IS TO BE A CHRISTIAN 600

CHRISTIANITY AND CHRIST 601

目的の進歩 604

高等批評について 605

忌避か通過か EKとAPOの区別 609

基督教と社会主義 614

ルターの遺した害毒 620

三種の宗教 629

律法、克己、戦いの精神

近世婦人の要求 632

正義と人 635

義の意義 637

武士道と基督教 638

PAUL A SAMURAI

武士の模範としての使徒パウロ 644

男性的基督教 忿怒の神聖 645

モーセの十誡 653

安心と勝利 723

信仰の生涯 725

断りて棄てよ 726

士師エフタの話 少女の犠牲 727

加賀の金沢 736

生くるはキリスト 738

GOHO, A CONFUCIAN MISSIONARY

儒教宣教師呉鳳 740

黙示録は如何なる書であるか 742

キリストの愛 753

今此処

今日という今日 758

天然と神 759

靈魂不滅について 760

再び万人救拯説について 765

今の救済 773

永生の解 774

THE MORNING COMETH 775

我が罪

罪とは何ぞや 780

罪の処分 785

人類の墮落 789

墮落の教義 810

苦痛か罪か 818

終に彼を棄てる 822

ABHORRENCE OF SELF

自己の嫌惡 823

我が拯救の希望 824

福音のダイナマイト

福音の活殺力 826

コンボルシヨンの実験 830

聖潔と聖別と聖化 835

罪と義 838

パウロ微りせば 841

パウロの欠点について 847

ローマ書の研究 859

第7 問題の提出一 860

第8 問題の提出二 869

第14 人類の罪一 878

第15 人類の罪二 885

第16 律法的能力 894

第17 神の義一 904

第18 神の義二 911

第19 神の義三 919

第20 神の義四 927

第21 永世不變の道 936

第23 アブラハムの信仰 942

第24 義とせらるる事の結果一 951

第25 義とせらるる事の結果二 958

第31 潔めらるる事四 965

第32 潔めらるる事五 972

第33 潔めらるる事六 979

第34 救いの完成一 986

第35 救いの完成二 991

第36 救いの完成三 997

第37 救いの完成四 1004

第38 救いの完成五 1010

第39 救いの完成六 1017

第40 救いの完成七 1023

第41 救いの完成八 1029

第42 救いの完成九 1036

第46 基督教道徳の根柢 1045

第56 小問題の解決 1053

第60 ローマ書大觀 1061

聖善の勝利 イエス対宗教家 1067

聖句索引 1095

編集後記 1096



坊ン櫻の園後氏部宮

1918年(大正七年)七月、宮部邸の庭中、
いわた先生が新鮮なる櫻桃を枝
上より手おから摘み採りて試食賞
味せらるゝは、寔に稀なる事實である。
自然に人生より勇ましい精神の発露
と觀せられる。

Photo: ICU Library's collection

ボーイズ・ビー・アンビシャス

Boys be Ambitious

内村 鑑三 講演

梅木 馨 筆記

筆者申す。九月二十七日（火）午後二時半より、内村鑑三先生は母校北海道大学中央講堂において「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の題下にて一時間半に渉る講演をなされ、堂を満たして余りある全校二千の聴衆に向かつて先生独特の親しみある熱辯ねつべんで類のない激励の言葉を与えられた。この大数の教授学生の会衆は、あたかも水を打ちたる如ごとくに静肅そのもので咳せき一つする者なく、先生は一同を深く靈感させられ、非常の反響を喚起せられた。

ただ今総長の佐藤先生から御丁寧な御紹介の辞を戴きましたが、先生のお言葉の中に大切な言葉が一つ抜けている。それは私は農、学、士、内、村、鑑、三であるとの事でありまして、私がここに立つのは懐かしい母校に帰つて諸先生並びに多くの後輩諸君と顔を合わせるものであつて、それ故に特別に有り難く思う次第であります。

私はここにこの題「ボーイズ・ビー・アンビシャス」を掲げましたが、これはウィリアム・S・クラーク先

生が五十年前にこの学校を去るに臨んで、島松しままつの原頭げんとうで馬上ひとむち一鞭ひとむちあてて、あとに従う学生に向かつて叫よばれた言葉であります。私はクラーク先生がこの言葉を如何いかなる意義によつて残されたか、ここで考えてみたいのであります。

この言が果はたしてクラーク先生の創始の言であつたかを調べた所、これは決してそうではないと思います。しかし、そうであるからと言つて先生のオリジナリティーを失わないのであります。キリストの聖言みことばも決してその全てがキリスト独創の言葉ではなく、その多くはこれを古来の預言者の言の中に見出だすことが出来るのであります。しかし、かく言うことは決してキリストから彼のオリジナリティーを奪うことにはならない。キリストの貴い所以ゆえんは古い言葉の精神を自家じか菜籠やくろう中の物となし、これに新しき生命を与えて発表した点に在るのであります。厳密なる意味においてのオリジナリティーということは古今あることではなく、「日の下には新しきものあらざるなり」(伝道の書1章9節)であります。

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の精神は当時のニューイングランドの文献を調べてみれば、既に各州に発表されてあつたことは疑いのない事実であります。クラーク先生がこの言葉を発せらるるに至つた経路を考えるに、先生の生国しやうじくなるニューイングランドにはこの精神が充ち満ちていて、その精神的環境がブライアント、ソロー、エマーソンの如き偉人ゑいじんを生み、また先生を生んだのであります。即ちニューイングランドのピューリタンの意気が先生を透とほしてこの言葉となつたのでありまして、この簡単な言葉の背後に全ニューイングランドが在ることを考える時に、これ実に意味深い言葉となるのであります。「札幌さっぽろが今日在ることを得たのはクラーク先生を通してニューイングランドの氣風が大いに貢献したからである」とこう思う時に、札幌は一層貴

いものになるのではありません。

さて、まづ「ボーイ」とは何を指すのであるか、この言葉の意味を研究してみたい。普通ボーイと言えば二十五歳以下の青少年を指すのでありますが、ここに言う「ボーイ」は決してこれに限らないと思います。「ボーイ」とは実に「アンビションを有する人」の謂で、前途の希望に邁進している者は歳は六十を超えてもお「ボーイ」であります。二十歳前後の人々のみを指して先生が「ボーイ」と言われたのではないと思います。私自身は未だアンビションを持っているから自分が「ボーイ」であることを確信しております。

人が「ボーイ」であるか、「マン」であるか、「オールドマン」であるかは、その人の心持ちによつて決まるものであります。私は今年六十七歳、宮部先生は六十八歳、佐藤総長は我々より遙かに上で七十二歳であると聞いておりますが、諸君から見れば老人の老人で、もう引退してもいい頃だと思つてしまうが、我々自身はまだこれからする仕事は沢山ある「ボーイ」だと思つております。ただし、かく言うは何も私が旧い友達を辯護して彼らをこの学校に長く置いてやつて下さいと諸君にお頼みする訳ではありません。(大笑)

次に「アンビシャス」又は「アンビション」について考えてみたい。日本語に訳せば、まあ「野心」でありましょう。「野心」と言うのと太閤秀吉やナポレオンのような軍略的又は政治的な野心を考えさせられますから、「大望」と言つた方がよいと思います。解りやすく申せば、将来自分が成し遂げてやろうとする仕事をしっかりと決める精神を言うのであります。

それについて今思い出すのは、エマーソンの言葉に“Hitch your wheels to the star”(汝の車を星につなげ)と言うのがあります。これは「望みを高く抱け」という意味でありまして、クラーク先生が「ボーイズ・

ビー・アンビシャス」と平易に言ったことをエマーソンは詩的に言い表わしたのであります。しかし両者とも全く同じ精神から出た言葉であります。高いアンビションを持つのは低いアンビションを持つより遙かに善き事であります。ある人が言つたように「失敗は罪ではない、目的の低いのが罪である」であります。高い目的を持つことが人生を最も有意義に用いる秘訣であります。

私は五十年前のちょうど九月に、札幌農学校に入るために小樽おたるに上陸し、陸路馬でここに来たのであります。今日私の息子がこの大学に御世話になるようになったのも実に奇ふじぎな縁で感謝に堪たえません。私は息子を札幌に送るに当たり、札幌を一北海道の都と考えるのではなく、北日本の都、更に世界の都とまで行かなくとも少なくともバイカル湖以東の東方アジアの都おくらしいには考えて欲しいと言つたことがあります。

また、先年熊本のリッデル女史が私に向かつて「内村さん、日本はこれでも文明国と言えますか」と言われたことがあります。彼女の語られた所によれば、英国では昨年全国に七人の癩病ろいびょう（ハンセン病）患者があるといつて問題になつてゐるのに、日本には未だ二十万人も癩病患者があり、隔離も治療も行き届かず、至る所で自ら苦しみ他人に不快な思いをさせてゐる有様である。英国では今年は僅わずか四人にまで減じたと言う。この日本の状態で以て文明国であると言ひ得ますかと。この言葉には私は如何いかんとも辯解べんかいの余地がなかつたのであります。諸君、済済せいせいたる多士たしを輩出しているこの北大医学部の中に誰かこのレプラを全治させるといふ先人未踏の境地を開拓するアンビションを持つ人はいないか。これ諸君の持ち得るアンビションの一例であります。難いかもしれない、生涯を献ささげて成功しないかも知れない。しかしながら「失敗は罪ではない」。後から来る人々の成功の道案内となることができれば、それは実に尊いことである。「汝なんぢの車を星につなげ」であります。

今年日本を訪れた人のなかに北極探検の成功者であるノルウェー人のアムンゼンという人がおりました。彼はまことに幸運児でありまして、既に南極探検にも成功しております。また彼に次いで英国人のスコットも南極を究め^{きわ}めました。しかし彼らに先立つて南極探検を企てたシャクルトン^{きわ}は、まことに気の毒な人でありました。南緯八十八度二十三分という南極近くにまで接近しながら、どうしてもその先へ入ることができず、二度試みて二度とも失敗したのであります。彼は終に目的に成功せず、その死に際して家族に遺言をして自分の骨は今後南極探検を企てる人々の通路に当たる箇所に葬^{ほうむ}ってくれと言いました。そしてその遺志によつて彼の遺骸はサウス・ジョージア島に葬^{ほうむ}られました。実に彼は自らは成功しなかつたけれども、後進の道しるべとなる事に甘んじたのであります。事実、彼の探検の経験は後の成功者にとつて貴重な参考となりました。諸君もこの精神でアンビションを持つことであります。

そして農学科の諸君もまたアンビションを有^もつことができます。日本には農耕地が欠乏してきたとの訴えを聞くとき、北海道や樺太^{からふた}にはまだまだ開拓の余地を見出だせるではないか。海を遙かに隔てた沿海州^{えんかいしゅう}には無限の良水田地を開く可能性があるのであります。「よしやつてみよう」と言う、これまた立派なアンビションであります。

さて、「それなら貴下^{あなた}はどうであるか」と諸君は言われるかも知れない。我々は自分の車をそれぞれ種々な星につないで、どうにかこうにか或る所まで、若い時に抱いたアンビションを成し遂げて来ておることを諸君にお話することができます。

まづ第一に佐藤^{さとう}総長であります。今日この札幌において広大な大学の組織が完備に近づいて来たのは、ひと

えに総長閣下の努力の賜^{たまもの}であります。ドクター佐藤は今日なお「アンビシャスボーイ」であつて、彼の車を繋^{つな}いだ星にますます近づかんとしておられる。

宮部先生^{みやべ}は、学生時代私と同窓同室の最も親しい友人であつて、嘗^{かつ}て一度も喧嘩^{けんか}したことのない君子であります。そして先生が世界の植物学者と伍して遜色のない立派な方であることは諸君が既に熟知のことであります。Dr Miyabe hitched his wheel to the botanical star であります。

南先生^{みなみ}は我が国農学会の権威者にして、その恩人なることは何人^{なんびと}も異論なき所でありまして、尊敬すべき多くの弟子を国の内外に持つておられます。

新渡戸稲造君^{にとべいなぞう}は学校時代より何か為^なすだろうと期待されたものでありますが、ジュネーブで国際連盟の理事長の仕事を務められ、各国の人々の中に伍しながら令名を博せられました。ドクター新渡戸もまた車を善き星につないだのであります。

そして南日本において教育に従事して立派な仕事をやった私の尊敬する友人**岩崎行親君**^{いわさきゆきちか}なども皆々最も善き星に各自の車をつないだのであります。

さて不肖^{ふしょう}私が私の生涯の車をつないだ星は実は二つありました。その一つは魚類^{ぎょるい}学であつて私は学校では水産に興味を持ち、卒業論文には Fishery as Science を書いたのであります。魚類^{ぎょるい}学に次いで私は漁労^{ぎやうらう}学を学びました。これを今日まで継続していたならば、あるいは当大学の水産学の講座を受け持つようになっていたかも知れません。ところが幸か不幸か、私はもう一つ他の星に私の車をつないでいたのでありまして、その星とはキリスト教を純日本人のものとなし、これを以て日本を救い、且つ世界における日本国の使命を果たさし

めんとするアンビションでありました。そしてこちらの方がとうとう本物になってしまい、今日になってみると、私もまた自分の若い時に抱いた理想をどうにかこうにか実現することができたと言諸君に申し上げることができるのであります。私の書いた『余は如何にしてキリスト信徒となりしか』という英文の小さな書物は、ドイツ、フィンランド、スウェーデン、デンマーク等の国語に訳され、今でも盛んに読まれているという次第であります。また昨年私が『The Japan Christian Intelligencer』を発行して、日本の基督教、殊に日本そのものを世界に向かつて紹介して我々の立場を広く識者の間に問うたところ、先頃亡くなられしドイツの老哲学者ルドルフ・オイケン博士などが早速深厚の同情を表して下さったのであります。

私共が永年唱え来つた事柄は今や世界の趨勢となりつつあるのであつて、多くの人々が私共に賛成し共鳴してキリスト教は本当に日本人のものになりつつあります。これは五十年前の日本においては想像することさえ無謀と思われた所でありまして、私も自分の車をつなぐべき星を大いに当てたと言うべきであります。更にこの十月からは東京明治神宮外苑の日本青年館において連続の聖書講演を毎日曜日に開くことになっております。なかなか隠居どころではなくて、ますます私の青年時代に抱いたアンビションに向かつて前進して行くのであります。

諸君よ、諸君もまた今の時代に諸君の車を星につなぐべきである。今この講堂の前に胸像となつて居られるクラーク先生が仮に私の姿としてこの壇上に立っているとして、私は先生に代わつてもう一度諸君に向かつて叫ぶ……ボーイズ、ビー、アンビシャス！

内村生言う。自分の為した演説は、これよりもう少し強い、元気ある演説であつたと思ふ。しかし筆者として梅木君が為してくれた以上の忠実なる筆記を何人も為すことはできないと信ずる。君の厚意に対して謝する言葉がない。実にこの演説は自分が為した最も会心の演説であつた。自分の母校の先輩、同輩、後輩に向かつて為したのであれば、家人に語るが如くに思われ、思う存分に自分の意見を陳ぶることができた。自分にこの好き機会を与えて下さった旧き同窓の友なる総長閣下佐藤昌介君に対し深厚の感謝を捧げたい。自分にとって自分の母校と称すべきものはただ一つ旧札幌農学校があるのみである。それが成長して今日の北大と成つたのであつて、五十年を経て我が旧家に歸つて来て、万感胸に迫り来りしは止むを得なかつた。

理想と実際

〔道徳の実際〕

道徳は理想であると同時に実際である。理想を實際に応用せしめんと欲して道徳があるのである。道徳は数理のような原理ではない、故に公式フォーミュラを以て表わさるべきものでない。道徳は時と場合によつて違う。小児の道徳がある、青年の道徳がある、壮年の道徳がある、老年の道徳がある。それと同じように黒人の道徳がある、黄人の道徳がある、白人の道徳がある。時と境遇に処して最も善く道徳の理想を表わしたもの、それが道徳である。同一の理想をすべての場合において同様に実現せんと欲して道徳は行われざるのみならず、社会はこれがために終に破壊される。聖き神の律法おきても、神の定め給たまひし天然の法則に従つてこれを行わざれば神の聖旨みこころをなさない。

「おのおの自分の妻を持つべし、またおのおの自分だけの夫を持つべし」というは理想である（コリント前書7章2節）。人は何人なんびともこの理想に従つて一夫一婦を実行すべく努むべきである。然れどもこの理想を行ひ難き時代があつた。すべての信ずる者の父なるアブラハムは、かかる時代に生まれてこの理想を実行し得なかつた。然れども、これがために姦淫罪でアブラハムを責める者はない。ダビデの場合も同じである。彼が他人の妻を奪つた事は赦すべからざる罪であつた。しかしながら一人以上の妻を持つ事は彼の場合においては罪でなかつた。

かくの如くにして道德は相対的である、絶対的でない。その終極は一つであるが、これに達する途は種々様々である。故に我が道德を以て他人を秤ることはできない。我が為すべき事は必ずしも他人が為すべき事でない。なぜならば我と彼とは境遇を異にし、遺伝を異にし、神の賜いし恩恵を異にするからである。我が彼について断言し得ることは「彼がもし私の境遇にあらば我が為すが如くに彼も為すべしである」と言うに止まる。神は私の境遇に従つて我を裁き給うが如くに、彼の境遇に従つて彼を裁き給ふ。曰く「実に律法なくして罪を犯した者は皆な律法なくして亡び、律法に在つて罪を犯した者は皆な律法によつて裁かれる」と（ローマ書2章12節）。神は公平である、我らも人を裁くに当たつて神に倣うて公平でなくてはならない。

神の律法を直ちにすべての人の上に行わんとして多くの害毒が生じた。いわゆる基督教国において最も厭うべき偽善が普く行わるるは全くこれがためである。未だ野蛮性を脱却せざる欧米人の上に基督教道德を實行せんと欲して偽善の跋扈は免れないのである。基督教国今日の憐れむべき社会的状態は、この誤謬りたる道德観の結果であると言わざるを得ない。欧米人は基督教道德を施すに今なお道德的に余りに幼稚である。彼らは今なお基督教に導かるべき程度に在るのである。彼らの境遇、彼らの情性は基督教を距ること今なお甚だ遠くある。然るに基督教会は彼らを改善するに先だつて基督教道德を以て直ちに彼らに臨んだのである。無慈悲この上なしである。欧米人は教会に無理を強いられたのである。故に前には大偽善者と化し、後には教会に叛き、無神論者となり、過激派と化したのである。欧州を今日の混乱状態に陥れた者は教会その者であると言われても辯護の辞に窮するのである。

道德は相対的である。故に人を導くに当たつて自分をその人の立場に置いて彼を導くべきである。公式によ

らず實際により、彼の能力の範圍内において神の律法を實現すべく彼を助くべきである。我らはパリサイの人の如くに高きに座して命令を下してはならない、自ら低きに下り、救わんとする人の立場に立ち、その手を取りその足を運んで彼を理想へと導くべきである。そしてこれは我らの救主イエスキリストの取り給いし途である。彼はサマリアの婦を導くに当たって彼女の不倫を責めて彼女に不可能を強い給わなかった。彼は彼女の能力に応じて彼女を生命の泉へと誘い給うた。イエスは最大の道德家であった、故に人に応じて道德を教えて誤らなかつた。道德はより、低きよりより、高きに導く道である。これを伝うるに父の威嚴と母の慈悲とを要する。我らは道德を父の嚴命とのみ解してはならない。

狂氣と正氣

自分は絶対的真理を握る者である。故にたとひ全世界が自分に反対するとも自分は動かない。自分は他の説を聞く必要がない。自分の意見、これ宇宙の真理である。世は自分の意見に従うべきである。自分は世の制裁は如何なる形においてもこれを受けない。この事を称して絶対的自由と言う。そして自分はこの自由を保有する者であつて、人が自分について如何に思うとも、自分は世界のオートクラット（独裁君主）であると。こう思うのが狂氣である。然して、かかる思想を懷いて精神病院に治療を受けつつある者は許多ある。

自分は真理の一部を示されて神に感謝する。自分は日に日に少しづつ真理を教えらる。自分が知る所は僅少であつて、知らざる所は無限である。自分は知識の嬰兒である、暗夜に在りて光欲しさに泣く赤子である。自分は神に導かれんと欲す、人に教えられんと欲す。人類全体の實驗は最も貴き教訓であれば、自分はこれに従つて歩まんと欲す。自分は自分の無智無學を告白する。神よ、自分の暗愚を憐れみ給へ、そして貴神の完全なる智慧へと導き給へと。かかる心の状態において在るのが正氣である。そしてソクラテスでも、ニュートンでも、テニソンでも、すべて人類の大教師として仰がる人は終りまでこの心の状態に在つた者である。

然るに神を離れて氣狂いたる多数の人達は、狂人の始終一貫して徹底的なるを嘆美し、彼を崇拜し、彼に倣つて生き、また死なんと欲す。彼らは自己を信ずるの厚きを以て最上の性格なりと信じ、自己を疑ひ、容易に確信に達せざるを以て誠実欠乏の徴候なりと思ふ。自分は狂人ならずと確信するが狂人たるの確証である。

自分、は、狂人、ならざるかを疑うが、精神的健康の誤りなき徴候である。人類の経験を蹂躪して憚らず、神の言に叛いて恐れず、真理は初めて自分を以て世に臨み、新時代は自分を以て始まると思う、こは狂氣の最も甚だしきものである。人はすべて真理に忠実ならざるべからず。然れども人たるを知つて、真理の占有を以て自ら任じてはならない。

二種の質問

イエスを蔑視^{さげすみ}しピラトは問うて言った、「真理とは何か」と。イエスに救われんと欲せし^{ほつ}ピリピの獄吏^{ごくり}は問うて言った、「我れ救われんために何を為すべきか」と。ピラトの質問は自己を離れて一般的なりき、獄吏の質問は自己に關して個人的なりき。救拯^{すくい}に到る質問は常に個人的にして実行的なり。滅亡^{ほろび}に到るの質問は常に一般的にして思辨^{しべん}的なり。真理とは何かと繹^{たずね}て真理は解^{わか}らず、「我れ救われんがために何を為すべきか」と求めて真理は明らかに上より示さる。今時の神学生又は求道者にして真理に達する者の少なきは、彼らの多くがピラトの質問を試むる者なるが故ならざるべからず。(ヨハネ伝18章38節。使徒行伝16章30節)

人格と信仰

今や少壮^{わか}思想家と神学者にして下の如^{ごと}くに言う者が少なくない。曰^いく「私は彼の人格を愛する。然れども彼の信仰は到底これを受け容^うれることはできない」と。然^{しか}して、かかる人は大抵はキリストの神性を否定し、贖罪^{しよくざい}などは「パウロの贖罪説^{しよくざいせつ}」と称してこれを一笑^{いつしやう}に付するを常とする。彼らは言うのである、「人格は人格である、信仰は信仰である。人はその信仰を以^{もつ}てその人格を度^{はか}ることはできない。多くの善き人にして馬鹿らしき信仰を懷^{いだ}いている者がある」と。

然れども余輩^{よはい}、彼らのいわゆる「旧式のクリスチャン」は、これら現代人士の立場を解^{はな}するに甚^{はなは}だ苦しむのである。余輩は人の人格と信仰とを別物^{べつぶつ}にして見ることできないのである。人の人格の大部分はその信仰の結果であつて、その信仰を離れてその人格はないのである。イエスは人ではなく神であると信ずるは単に神学説として面白半分に信じているのではない。これが信仰である以上は生命の根柢である。イエスの神性とこれを信ずる者の人格との間には最も根本的な関係があるのである。贖罪^{しよくざい}についても同じである。余輩はこれを贖罪説と唱えて道楽的に信じているのではない。贖罪は余輩の靈的生命の血である、また肉である。これを取り除けば余輩の信仰はその根柢より壊^くれるのである。余輩の罪はキリストの十字架上の死によつて既に取り除かれたと聞いて、余輩の心に人のすべて思う所に過ぐる神の平安が臨んだのである。もしその事が然^そうでないと言^いうならば、福音^{ふくいん}は福音でなくなり、余輩は素^{もと}の不信者になるのである。その他の信仰についてもまた同じで

ある。余輩^{よはい}は信仰を如何^どでも可^よい問題として取り扱わないのである。信仰が信仰である以上は、これ人格の基礎である。人は終^{つい}には彼が信^{しん}ずるが如^{ごと}くに成るのである。「樹^きはその果^みより知られる」(マタイ伝12章33節)とはこの事である。

孟子を読む

近頃に至り、嘗ては少年時代に暗唱していた孟子を取り出し、毎日少しづつこれを読んで大いに感じ、また益せらるる所がある。二千二百年前の東洋にこんな高い教えがあったかと思えば実に不思議に堪えない。巻頭第一に言う「王何ぞ必ずしも利を曰わん、亦仁義ある而已矣」と。この場合「亦」と言わずして「唯」と言つてもらいたかつたが、しかし利よりも仁義を貴んだ所はたしかに偉大である。更に進んで「苟くも義を後にして利を先にすることを為ば、奪わずんば暨かず」と言うが如きは事実そのままである。更にまた、仁道を施して然して王たらざる者は未だこれあらざるなり」と言えるが如き、「まづ王国と彼の義を求めよ、然らばこれらのものは皆な汝らに加えらるべし」(マタイ伝6章33節)とのキリストの言に及ばずといえども遠からざるを見る。殊に自分の一生を通して、患難に際して幾たびか自分を慰めてくれた言は、告子章句下にある左の言である。

天将に大任をこの人に降さんとするや、必ず先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その皮膚を餓し、その身を空乏にし、行い為す所を拂乱す。心を動かし性を忍びて、その能わざる所を曾益する所以なり。

自分の生みの父が幾たびか孟子のこの言を引いて自分を慰めてくれた。今これを読んで父の言を聞くが如くに感ずる。昔の支那や日本に貴き教えのあつた事を感じする。

健全なる聖書研究

(地方より訪れ来りし或る教役者に語りし所)

感情はこれを人より得べきではない、直にこれを神より得べきである。人よりはただ乾燥無味の事実を聞けば足る。

故に感情的な説教や演説は成るべく避けるべきである。また書物を選ぶに当たつても感情を伝うる書は成るべく避けるべきである。いわゆる信心的書物デヴotionalブックスは甚だ危険なる書である。読書は成るべくだけ乾燥無味なるを良とする。単純なる真理を伝える書、乾燥せる光明を伝うる書、これが読むに最も健全にして最も利益多き書である。

感情は酒精アルコールの如きものである、酔つて直ちに消ゆるものである。故に善き感情をのみこれ求むる者は美酒の一杯に一時の快感を求めんとする飲酒家に異ならない。二者共に心身の興奮刺激を要求して止まざる者であつて、体の弱き者にあらざれば心の鈍き者である。酒を飲むことが悪いのは酒その物が悪いからではない、その結果が悪いからである。即ちその興奮性すなわが悪いからである。それと同じく、人の感情にのみ訴える説教演説の類いは人を害すること決して酒に劣らない。然り、一方は体を毒するものであつて他方は心を害するものであるから、感情的説教演説の類いは酒に勝る毒物であると言わざるを得ない。

今や幸いにして聖書批評学なるものが始まり、聖書研究より感情が全く取り去られた事に感謝する。今の聖

書研究なるものは昔時のそれとは全く違う。これは主として文字の研究、原文原意の研究である。これはダーウインやヘッケルの天然研究と少しも異ならない、極く冷たき乾いたる研究である。しかしながら、かかる研究によつて神の真理は会得さるるのである。そうして一たび神の真理を会得した以上は、清き感情（むしろ感想）は滾々として我らの心の内より湧き出づるのである。即ち一瓶の酒の如くにあらざして、岩間より流れ出づる岩清水の如く、渴きを癒し、快を供して止まないものである。一つの真理は百の感情に優る。三角形内の角度を加算すれば二直角になるとの真理を教えられる方が、幾多の絵画を示されるよりも遙かに利益多くある。その如くマタイ伝の一章を精密に且つ合理的に教えられる方が、千百の説教を聞かされるよりも遙かに利益多くある。酒は飲まずともよい、しかし米と肉とは食うべきである。同様に感情的な説教や演説は聞かずともよい、しかしながら聖書は静肅に且つ精密に学ぶべきである。いわゆるリバイバル的の聖書研究法は成るべく避けるべきである。そうしてこれに代うるに静かなる敬虔深き科学的な研究を以てすべきである。

CRITICISM AND ORTHODOXY

I think this is true that Criticism is right in method and wrong in conclusions, and that Orthodoxy is wrong in method and right in conclusions. (By orthodoxy, I mean evangelical faith; not the orthodoxy of Rome or of the Church of England, which I hate from the bottom of my heart.) The ideal is evangelical faith through criticism; and I think this is possible. That intellect will eventually confirm the vision of heart is a well-established fact. What is faith but the supreme womanliness in man, and intellect, but the slow, plodding manliness in him! Man is bound to establish woman; else there is no lasting peace. That Western way of Criticism scoffing at Orthodoxy, and of Orthodoxy carping at Criticism is entirely absurd, and is not to be imitated in the East.

批評と正教

私はこの事が真理であると思う、即ち^{すなわ}批評^{ひひょう}は方法において正しくして結論において誤り、^{せいぎよう}正教は方法において誤り結論において正しくあると。(正教と言って私は福音^{ふくいん}的信仰を意味するのである。ローマカトリック教会又は英国国教会の称するいわゆる正教即ちオーソドクシーを指して言うのではない。これ私が私の心の奥底から嫌う所のものである)。私の理想とする所は批評の方法によって達したる正教である。^{しか}然してこれ不可能事ではないと思ふ。知識は遂に心の幻想を確立するに至るべしとは既定の真理である。信仰何物ぞ、人の内なる最美の女らしきものに他ならず。知識何物ぞ、彼の内に働く^{ちち}遅^ち遅として歩を進むる男らしきものである。男性は遂に女性を確立するに至る。^{しか}然らざれば永久の平和はない。かの西洋諸国において、批評は正教を^{あざけ}嘲り、正教は批評を^{そし}譏るは全く不道理である。東洋はこの事において西洋に^{なら}倣うてはならない。

基督教研究の方法

(ある婦人の質問に答えて)

神の大なる事と人の小なる事を知るのは余り難くありません。これは少しく科学と哲学とを究むれば判ることとあります。最も難いことは神の聖いことと人の穢いことを覚ることとであります。これはどれほど哲学の蘊奥を究めても知ることの出来るものではありません。そうしてこの事を明らかに告知するのが基督教であります。天然教は神の偉大なること、その造化の巧みなることを教えます。しかしながら神の黙示なる基督教のみが神の絶対的に聖くして、人間の罪惡に沈淪する者なることを伝えます。我らは神の大なるを知りたればとて、それで基督教の聖い神を識つたとは言えません。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍のやハ、ウエ」(イザヤ書 6 章 3 節)、これが基督教の神であります。その前に立つて我らの誰もが口を噤み、頭に灰を被り、麻衣を着けて、我が汚穢を恥づるより他はありません。そうして自己にこの汚辱を感じるまでは基督教の神が判つたものではありません。世には一神教の合理的なるを唱え、宇宙の構造の巧妙なるを説いて基督教を理解したと想う人があります。しかしながら、これは誤想の最も甚だしいものであります。

基督教は良心問題であります。哲学問題ではありません。従つてその教義は総て良心の実験に照らして解釈さるべきものでありまして、論理によつて解るものではありません。まづ聖き神の正義を以て己の良心を打たれずして、如何に思考を凝らすとも基督教の一方面だも解することはできません。神の存在を始めとして、キ

リストの受肉、その死、その復活、その昇天に至るまで、基督教の教義は総て皆な良心問題としてのみ解かれるものであります。復活は肉体に関することであるから生物学によつて解釈すべきものであると思うのが、そもそも誤謬に入るの発端であります。

教会問題である、神学問題である、社会改良問題であると言いて悪魔は人を神の福音から除けんとし、種々なる良心以外の問題を提供して、彼の思念を他に奪い去らんと致します。しかしながら神が我らに提供し給う第一の問題は「人よ、汝は神の裁きから逃れられると考えているのか」(ローマ書2章3節)、これであります。真実に基督教に入つた者で、この問題以外から入つた者はありません。使徒パウロを始めとして、聖アウグスティヌス、ルター、ロック、グラッドストーンに至まで、如何ほど偉大な思想家といえども、彼らが基督教に入るに当たつては、この悔改めの門を通つたのでありまして、純思想を以て、悔改めの苦痛と汚辱とを感ぜずして、この佳境に入り来つたものではありません。

基督教とは何んな教えであるか、とは多くの人が知らんと欲する所であります。そうして私共は一言以てその如何なる教えであるかを示すことができます。基督教はあなたが、あなた御自身が、罪人の首であるとする宗教であります。まづ神の存在の論理を究むる前に、まづ社会の墮落とその救済法を講ずる前に、あなた御自身が世界第一の罪人であるとの事実と理由とをお究めなさい。然らば他の問題はあまり深く究めずして解るに至りましょう。信仰問題の研究は自己を基として始めなければなりません、自己の罪惡を認識して始めなければなりません。然るにこれを為さずして、詩人ワーズワースを氣取つて「天然を通して天然の神に達せん」とし、あるいは哲学者の誰彼を學んで「天人合体」を圖らんとしても、基督教は到底解るものではありません。

せん。

こう申したら、あなたは多分おっしゃるでしょう、「基督教は至つて詰まらない宗教である。これは公事を後にして私事を先にし、知識に訴えずして感情にのみよる宗教である」と。そうであります、誰にとつても己の良心を打たれることは甚だ辛いことであります。人は誰しも他人の良心を打たんと欲します。また心の苦痛を感じずして、頭脳あたまの修練のみによつて神と真理とに達せんと欲します。しかしながら、かかる方法を以てしては人類の最大幸福なる心の平和に達することはできません。従つてかかる方法を以てしては世を改良するに足る信仰を己に懐くいだこともできず、また宇宙を一思想の中に籠めるような大哲理に到達することもできません。宇宙の中心点は意志でありますから、これに達するには意志の改造なる良心の悔改めを以て始めなければなりません。砕けたる心、これが基督教研究のための端緒たんしよであり、またその根本であります。



1924年(大正十三年)八月十八日(明)先生の日記より

少く山に遊んで、或る石友に誘われて、山奥に赴き、
利根川に赴き、湯治地を指し出された。利根川に赴き、
利根川の河岸を過ぎて、汽車の走る所は、急峻であつた。
湯田より目的地までの乗合自動車は、決して快いものでは
なかつた。
湯治地は明治廿一年、余が新潟なる時、北越学館に
教頭として招かれて赴任する途中、一泊した所である。
今は昔の如くない、山奥にあり、湯田の町に接する
所である。山は深く、谷は深く、遠路を歩いて来る
甲斐のある所である。

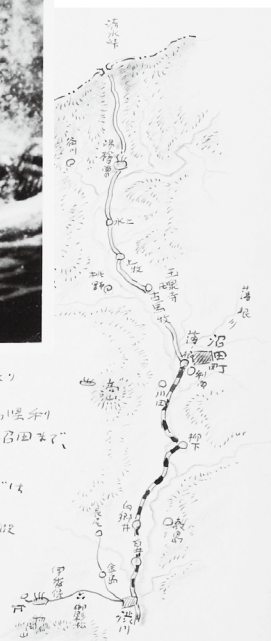


Photo: ICU Library's collection

商売成功の秘訣

商売成功の秘訣ひけつとして別にありません、すべての高貴なる事業の成功の秘訣と少しも異なりません。即ち成功を急がない事であり、成功を求めない事であり、成功しようとして焦心あせらない事であり、成功はこれを天てんに任まかし、己おのれは日々為すべき事を正直に為すこととあります。即ち古の聖賢せいけんの申した、

すべて汝なんぢの手に堪たうる事は力を尽くしてこれを為すべし

(伝道の書9章10節)との言を守り、誠実にこれを実行することとあります。即ち成功を度外どがい視して商売に従事する事であり、そうすれば成功するものならば真正まことに成功します、失敗するものならば立派に失敗します。成功必ずしも名譽めいよではありません、失敗必ずしも恥辱はぢではありません。卑いやしき手段を以て為したる成功は恥辱であります。潔きよき手段を以て取つたる失敗は名譽であります。

世には金を溜めんと欲する人が数多あまたあります。しかし、これ望んで出来ない事でもあります。金を溜めんと欲して金は溜まるものではありません。金がもし溜まりますならば自然に溜まるものであります。溜める金と溜まる金の間に多くの差違ちがひがあります。僅わずかかに「め」と「ま」の差違でありますが、しかしその間に天地の差があります。溜める金は無理に溜める金であります。世間に対しては義理を欠き、雇い人に対しては慈悲を欠き、我が身の自由修養をまで欠いて溜めた金であります。それは溜めたのではなくして盗んだのであります。金を溜めたとは申すものの、実は災害を我と我が家とに積んだのであります。

これに反して、溜まった金は自然に溜まった金であります。為すべき事を為して溜まった金であります。これは正直なる労働の報酬として天が降したものであります。故に感謝して受くべきもの、また受けて何の危険もないものであります。そうして天は必ず正直なる労働に酬います。私共は金を溜めんと焦心るべきではありません。働いて天が恵みを降し給うその時を待つべきであります。

今の人の大抵は商売は戦争の一種であるように思い、機に乗じ計略を運らし、狡猾く、機敏く出でなければ成功は望めないように思うております。しかしこれ大なる間違ひであります。商売は正業であります、戦争ではありません。戦争は他を殲して成功するものであります。しかし商売はすべて他の正業と同じく他を益して己も益するものであります。害を他人に加えざれば己は成功するあたわざるような、そんな事業には決して従事すべきではありません。「己れ達せんと欲すれば人をも達す」と申します。商売を戦争と見ることほど謬った思考はないと思います。いわゆる「商戦」と称しまして、他を突き倒し、その失敗に乗じて己れ利益を収めんとします。実に人は鬼であります。そうして多くの商売人は鬼であります。かかる人々に永久の成功と幸福との来りようはずはありません。

商売成功の秘訣は志士仁人の心を以てこの業に従事する事であります。米国の大統領リンカーンの申しましたように、

何人に対しても敵意を挟むことなく万人に対して善意を懐いて

この業に従事することであります。それで成功が来ないものならば成功を求めません。しかしそれで成功の来ないはずはないと信じます。謹んでここに、この事に関する私共の意見を披瀝いたします。

真個の平民

私は今なお平民の友である。然れども私の言う平民はもちろん俗人ではない、又は民衆と称される者ではない、貧民ではない、労働階級ではない。私が辯護し自身その一人たんとする平民は人らしき人である。人として価値ある者である。地位とか爵位とか所有とか言うものを全然離れて人たるの価値を有する者である。私の言う平民は靈魂の人である、内に足りて外に求めざる者である、真個の価値を赤裸々の靈魂に有して、これを飾るに位階勲章の金箔を以てするの要なき者である。

故に偉人という偉人はすべて平民である。平民の首はもちろんナザレのイエスである。彼より先にアテナイのソクラテスは大平民であつた。そしてイエスの弟子としてダンテとルターとカルヴァンと、クロムウェルとミルトンと、ワシントンとリンカーンとグラッドストーンはすべて大平民であつた。彼らは偉人たるに貴族の列に入るの必要はなかつた。彼らにとつては学府が授与する学位さえも不似合であつた。単のミスター・グラッドストーン又はミスター・リンカーンであつた。神に造られし儘の彼らであつた。故に貴くあつた、人類の模範であつた、神の貴族であつた。大勲位公爵と称するが如き人間の偽物ではなかつた。

かくして平民は決して多数ではない、少数である。民衆は決して平民ではない。真個の平民の少なきは貴族の少なきよりも少ない。然して民衆が平民でないと同時に、稀には貴族の内にも真個の平民が居る。然してまた貴族を恨みこれに反抗するいわゆる平民も、その大多数は生れながらの貴族である。名誉に憧憬れ利慾に牽

かるる者は名は平民たるも実は貴族である。この事たる、我が国の歴史において薩長の平民輩が一朝自ら貴族
 となりしや、最も悪しき貴族階級を作りし事実ちように徴ちようしてみても明らかである。人たるの名譽いづちよう以外に何らの名譽を
 も求めざる者、靈魂の深き所に神に接するの特権以外に何らの特権にも与らんと欲せざる者、その者が真個の
 平民である。然しかして私はかかる人らの友たらんと欲し、また自らもその一人とならんと欲する者である。

信しんと行ぎょう

信を求めて信と共に行を与えられ、行を求めて信をも得ず、また行をも得ない。宗教の黄金時代は信が高唱されて行に無頓着なる時代である。その時に信は燃えて行は挙がる。これに反して行が絶叫されて信が軽視される時に信の起こらざるは勿論、行もまた挙がらない。信は本である、行は末である。信の真偽を試すものは行である、然れども行が重く見られて信が軽く見らるる時に、信は失せて同時にまた行も消ゆるのである。

信、信、信である。もちろん自己を信ずる事ではない、奮励して熱信に燃ゆる事ではない、静かに信すべき者を信ずる事である。ここにすべて人の思う所に過ぐる平安がある、同時にまた流れて尽きざる能力の泉がある。実に信が最大の行である、「これこそが神の仕事(行)である、即ち神の遣わしし者を信ずる事」とある通り(ヨハネ伝6章29節)。絶対的信頼、自己の信仰にすら信らざる信仰、何処までも信る信仰、この信仰があつて宇宙が動くのである。そはその時に我は神と共に働き、知らず識らずの間に神の動かす所となるからである。

WORK AND LIFE

Work is working: it is a process, not a result. A finished work is not a work; it is a stone. “My Father is working until now, and I am working” (John 5:17) and “Because I live, you will live also” (John 14:19) practically mean the same thing. Life is working; and the moment it ceases to work, it is no longer life. Work is endless expression of life. True life is itself eternal. It needs not assume another life in order to be eternal. Life is eternal expression and realization of itself.

Work of course is not simple movement. It is not keeping one's self always busy. Life is effectual realization of itself. If it is a movement, it is a movement upward; if it is a change, it is a change for the better; if it is an extension, it is an assimilation of the outside world to itself. It is quiet; always doing, never having a work to show, but always having a work to do. So necessarily, true work is always humble. It knows that it is imperfect; perfection never coming, but always yearning after perfection, and seeking perfection in this constant unattainable yearning after perfection.

Do you then call work an intolerable drudgery? Not so. Work is life itself, the height of bliss, the joy of joy, a veritable heaven. Myself always greater than my works; my life never exhausted by my works; always expressing myself in my works, and always having still more works to do! Thus I cease to be a worshipper of works.

“My Father is working until now, and I am working.” He is working always, and his children cannot do otherwise. Creation is a process; it is not a completed work. God is the creator in the sense that He is always creating; and he who believes in Him is made a partaker of His creation-life; that is to say, he is made a creator himself.

I in Him, He in me; the Creator Himself working in and through a creature,—that, I understand, is the Christian life. The greatest condescension on His part; the greatest glory on my part: experiencing

creation-life, and watching creation-process, within me. Always working, always creating; life a constant flux, advancing, expanding, “forgetting the things behind, and reaching forward to the things ahead,” (Php. 3:13) eternal advance, ceaseless marching-on-and-on.

They say that they rest from works in heaven. Yes, they rest from ineffectual works; but not from work itself. The true work begins when we enter heaven. We are coworkers with God already in this life; and in the life to come, we enter into closer fellowship with Him in His creation-works. We hope for continuous perfect working in the life to come, which is the height of bliss, like that of Michelangelo standing with a chisel before his marble, or of Leonardo da Vinci sitting with a brush before his canvas. True bliss is found only in action; life is action; and where there is no action, there is no life and no bliss. Heaven cannot be otherwise than constant, fruitful, satisfactory and satisfying actions. And we are destined for such a life, and such an action. Oh, bliss it is to have been born, and also to have suffered and still to suffer.

BE SLOW

Be slow. Take ample time in doing things. Be satisfied with small things. Only do them well. “He that believes shall not make haste.” (Isa. 28:16). God hath done for us in His Son what we ought to do for Him. It only remains for us to fill up here and there “that which is lacking of the afflictions of Christ.” (Col. 1:24). The Christian is God Almighty’s gentleman (or lady); and he is not a gentleman who is always in hurry. Salvation has been accomplished for us; the prize has been won; and blessed eternity lies before us. God is working with us, and we with God. Joy, joy! We need not be like modern Americans, and “living too fast, commit a speed suicide.”

遅鈍なれ

遅鈍^{ちどん}なるべし。事を為^なすに充分に時を取るべし。小事^{もつ}を以て満足すべし。ただ善く為^なさんことを努むべし。「信ずる者は急がざるべし」と聖書は言う（イザヤ書 28 章 16 節）。神はその聖子^{みこ}を以て我らが為すべき事を我らに代わ^なって為し給^{たま}うた。今や残るは我らが此所^こ彼所^こにおいてキリストの患難^{なやみ}の欠けたる所を補う事のみである（コロサイ書 1 章 24 節参考）。基督者^{クリスチャン}は全能なる神の紳士^{しんし}（あるいは淑女^{しゅくじょ}）なりと言う。そして常に急ぎつつある者は紳士にあらず。救拯^{すくい}は既に我らのために完成された。目的物は既に獲^えられた。永生は我らの前に横たわる。神は我らと共に働き、我らは神と共に働きつつある。快哉^{かいさい}、快哉。我らは近代米国人の如くに余りに急速に生活して速度自殺^{△△△△}を行う必要はない。

惰^{おこた}らず行かば千里^{せんり}の外も見ん

牛の歩みのよし遅くとも

（徳川 家康）

日露戦争より私が受けた利益

(角筈の丘上において独り櫟林に向かいて述べしものなり)

私は今は非戦主義者であります。嘗てはオリバー・クロムウェルを私の理想に最も近き人として仰ぎし私は今は戦争の罪惡と害毒とを唱えて止まざる者であります。私は戦争はキリスト降世二千年後の今日の文明国の間に有るべからざるものと信ずる者であります。

それ故に私は日露戦争には最始から反対しました。私は第一に宗教、倫理、道德の上から反対しました。第二に両国の利益の上から反対しました。第三に日本国の国是の上から反対しました。そうして徹頭徹尾反対を表したこの戦争に対して私は何の熱心をも注ぐことができませんでした。私はもちろん日本国民の一人として私の守るべき普通の義務は守ったつもりであります。しかしながら私はほとんど独り泣き通してこの戦争時期を過しました。私はこの戦争は決して良き事をこの国に持ち来すものではないと信じました。私はその結果たるや日清戦争のそれと多く異なる所なきを信じて疑いませんでした。私は甚だ驕慢なる申し分かもしれませんが、日本国民がこの戦争に熱狂するのを見て、我が最愛の友が放蕩遊惰に身を持ち崩しつつあるのを目撃しているような感が致しました。

この戦争に対しておかざる態度を取りました私は、これより何の利益をも望む権利を持ちません。私には内閣諸公のように授爵階位の希望がないのみならず、普通の祝勝会に参加してその快樂を領つ権利もありません。

私は日露戦争の結果はその大となく小となくこれを全く私の身より辞退すべきであります。蔣かぬ種は生えません、賛成を表せざりし日露戦争より私は何の実をも刈り取ることはできません。

しかしながら奇なることには、私もこの戦争より或る利益を得ました、然り多くの利益を得ました。これはもちろん日本の政府又は社会から得た利益ではありません。これはまた私が得んと欲して得た利益ではありません。これは私に自然に臨んだ利益であります、非戦主義者として私が受けても恥づかしくない利益であります。「神を愛する者たちには、すべてが共に働いて善へと向かうのである、予定に従つて召された者たちには」(ローマ書8章28節)とは申すものの、非戦主義者に戦争の利益が及ぶとは最も奇態なることであります。一、私は第一にこの戦争において活ける人類の歴史を目標しました。そうして人類の歴史とはその根元に遡りますれば国民の上に顕われたる神の裁判であります。神は有ると言つたり無いと言つたりしますのは、これを私人の経歴について見るからであります。これを国民の運命について見て神の存在は疑うべからざる事実であります。ある人が嘗て「歴史は神の摂理を大書した書である」と言いましたが、実にその通りであります。摂理は人事という人事にはその大なるものにも小なるものにも存します。しかしながら走りながらも明白に読むことのできるような大文字を以て記されたる神の摂理論は国民の歴史であります。そうして日露戦争は殊更に明白にこの理論を私に示してくれました。

神の摂理論と言えは如何にも難しいようではありますが、しかしその原理は至つて単純なるものであります。世界歴史の法則とも称すべきものは僅かにこれでありす。即ち「破滅の前には傲慢が、倒れの前には高ぶる心か」と(箴言16章18節)。これは智者ソロモンの言であると記されています。しかし史学の始祖ヘロドトス

の言によればこれであります。即ち、

神の意はすべて高く聳ゆるものを斬り倒すにあり。神は神以外の者の己を高くすることを許さず。

これ彼がその『大世界史』の劈頭に掲げし標語でありまして、彼の著した歴史はすべてこの単純なる原理を証明せんためであつたこととであります。高ぶる者は倒れ、謙遜る者は起る。これが歴史の法則であります。東洋史と言ひ、西洋史と言ひ、歴史と言う歴史はすべてこの簡單なる原則によつて支配されるものであると思ひます。

日露戦争とてもその源に遡れば何でもありません、この原則の表頭であります。南山、得利寺、旅順、遼陽、沙河、奉天、対馬海峡における露国の敗北は高ぶりたる者が低くせられんためでありました。史家ヘロドトスの言を以て言ひますれば、東洋に独り高く聳えんとした露国を斬り倒さんがためでありました。ロシア人は高ぶりました、彼は道理と節制の境を越えて他国の領地を侵さんとなりました。故に彼は神に罰せられました。彼は倒されました。「雨が襲い降り、奔流来たり、風が吹いてその家を打つや、家は倒れ、その倒壊はひどかつた」でありました（マタイ伝7章27節）。

この事は全世界の人が認めた事実であります、殊に日本人が認めた事実であります。そうして私もまたこれを認めて正義のために悦びました。しかしながら神は公平の神であります。彼は高ぶる者は何れの国民たるに係わらずしてこれを罰し給ひます。彼は高ぶりたるロシア人を引き下げ給ひました。彼はまた日本人の罪をも罰すべきは罰し給ひました。「ヤハウェは罰すべき者をば罰せずにはおかず」（出エジプト記34章7節）。日本人なればとて高ぶる時には罰せられます。彼なればとて道理と節制の境を越えて榮華の空中樓閣を築きし時に

は、その楼閣は忽ちにして地にまで取り崩されました。賠償金七十億を夢み、バイカル湖以東全部を想像せし時に、ポーツマス条約の一撃は下りて、連戦連勝によつて天の高きにまで引き上げられし日本国は地の低きにまで引き下げられました。しかも頼るに頼つた米国の地において、世界環視の下において我らはこの屈辱を受けました。しかし止むを得ません。歴史の原則が働いたのであります、神の摂理が行われたのであります、公平なる神が公平に裁き給うたのであります。日本人なればとて天則の束縛より離れることはできません。日本人は遂に高くなりました、故に倒れました。

かくて日露戦争はその供すべき大教訓を人類に伝えました。そして神の正義が行われまして戦争はその終りを告げました。そうして私はその成行きを日々の新聞紙に読んで、活けるヘロドトスよりその歴史談を聞くの心地が致しました。「神は欺くべからず」。外交において巧みなる露国は軍事において敗れました。軍事において巧みなる日本は外交において敗れました。「我にもまた智慧あり」と神は宣べ給いました（イザヤ書31章2節）。彼は何らかの方法を以てその聖意を遂げ給います。彼は実に「罰すべき者をば罰せずには」おき給いません。

この活ける歴史を目撃するのは私にとつて精神上の大なる利益でありました。もちろん私の普通の情に訴えまして、私の国が勝つのは見るは喜ばしくありまして、負けるのを見るは悲しくありました。しかしながら正義は私情を以て律すべきではありません。正義の遂行は全人類（我が国をも含む）のために利益であります。故に私は私のヨリ高き情、即ち信仰に訴えまして、米國ポーツマスにおける日本国の失敗を聞いて反つて神に感謝しました。

二、日露戦争によって私は一層深く戦争の非を悟りました。戦勝国に在りて連戦連勝を目撃した私は再び元の可戦論者に化せられませんでした。否な、戦勝の害毒の戦敗のそれに劣らぬことを目前に示されまして、私はますます固い非戦論者となりました。捷報至るごとに国民が鼓舞雀躍しつつある間に、彼らの内心に如何なる変化が起こりつつあるかを思いまして、私は自ら進んでその狂喜の群に加わることではできませんでした。日露戦争は我が国民の中に残留せし僅かばかりの誠実の念を根こそぎ取りさらいました。既に非常に不真面目なりし民は更に一層不真面目になりました。その新聞紙など、一つとして真実を伝うる者なく、味方の非事と言えども悉くこれを蔽い、敵国の非事と言えば針小を棒大にして語るを歡び、真理そのものを貴ぶ念は全く失せ、虚にせよ実にせよ、ただひとえに同胞の敵愾心を盛んにして戦場において敵に勝たしめんとのみ努めました。戦争最中の新聞紙は真理を外にして勝利をのみこれ求むる者でありました。私は信じて疑いません、戦争二十箇月の間、日本国に一個の新聞紙のありませんでしたことを。即ち事実を報道し、我々をして公平な判断を下さしむるに足る一個の新聞紙もありませんでしたことを。戦争は我々を不道理なる、不真面目極まる民となしました。そうしてもし民の道徳に何か価値があるとしまするならば――私は無上の価値があると信じます――かくして道徳的に蒙りし国民の損害は戦争によって獲た僅かばかりの土地や権利を以て到底償ふことのできるものではないと思います。

そして真理を貴ぶ念が失せたのみではありません、人命を貴ぶ念までが失せました。常には人命の尊重を唱えて止まざる民は、戦争によって人の生命を牛馬の生命と較べてみて左程に貴いものではないように思うに至りました。敵の死傷者二十万と聞けば喜びのあまり我が死傷者五万との報に接しても一滴の涙も注がざるに至

りました。我が死傷者五万とよ！五万の家庭は或いはその夫を、或いはその父を、或いはその子弟を失ったのであります。五万の家庭から同時に悲鳴の聲は揚がりつつあるのであります。然るにこれを悲しむ者としては一人もなく、祝杯は全国至る所において挙げられ、感謝の祈禱は各教会において献げられたのであります。人命尊重も何も有ったものではありません、同胞愛も何も有ったものではありません。同胞の屍は山を築き、その血は流れて河をなしまして、それは深く国民の問う所ではありませんでした。「戦いに勝てり」、「敵を敗れり」、この事を聞いて同胞の苦痛はすべて忘れ去られました。戦争は人を不道理になすのみならず、人を不人情にします。戦争によつて人は敵を惡むのみならず、同胞をも省みざるに至ります。人情を無視し、社会をその根底において破壊するものにして戦争の如きはありません。戦争は実に人を禽獸化するものであります。戦争は戦争を止めるためであると言います。「武」の字は戈を止めるの意味であると言います。しかしながら戦争は實際戦争を止めません。否な戦争は戦争を作ります。日清戦争は日露戦争を生みました。日露戦争はまた何んな戦争を生むか分かりません。戦争によつて兵備は少しも減ぜられません。否な、戦争終わる毎に軍備はますます拡張されます。戦争は戦争のために戦われるのでありまして、平和のための戦争などは嘗て一回も有ったことはありません。日清戦争はその名は東洋平和のためでありました。然るにこの戦争は更に大なる日露戦争を生みました。日露戦争もまたその名は東洋平和のためでありました。しかしこれまた更に大なる東洋平和のための戦争を生むであろうと思います。戦争は飽き足らざる野獸であります、人間の血を飲めば飲むほど、更に多く飲まんと欲する者であります。そうして国家はかかる野獸を養うて歳に月にその生血を飲まねつつあるのであります。愚の極とは実にこの事ではありませんか。日露戦争は決して戦争の利益を示しません。

その獲し所はとても費せし所を償うに足りません。日露戦争の獲し所は他の戦争の獲し所と同じく空名譽であります。これは智者が努めて獲んと欲する所のものではありません。二十億の富を消費し、二十五万の生命を賭けて、獲し所は僅かに国威宣揚であります。そうしてこれでも戦争は好いものであると言うのでありますか、これでも非戦論は非であると言うのでありますか。非戦論を証明するものは戦争そのものであるとは私共が戦争最中に度々言ったことであります。日清戦争が非である説明は下関条約と三国干渉とであります。日露戦争が非である説明はポーツマス条約であります。ポーツマス条約！ポーツマス条約！願わくはこの屈辱が再び臥薪嘗胆の愚を演ぜしむることなく、反つて戦争廃止を援ける有力なる声とならんことを。

三、日露戦争によつて私は多くの友人を失いました。しかしそれと同時にまた多くの新たな友人を得ました。この戦争は私にとって友人の真偽を分かつたための好個の試金石でありました。詩人クーパーは言いました、

「心に何の苦痛を感じることなくして虫一匹を踏み殺す者は私の友人名簿の中に留めず」と。まして戦争を狂喜する者をやです。良心の詰責を感じることなくして同胞の屠殺に賛成する者は、その名を我が友人名簿の中に留め置くべきではありません。彼は生類の敵なるのみならず、人類の敵であります。彼の娼婦論又は禁酒論の如きは抱腹絶倒と称すべきであります。酒を飲んでは悪い、しかし人を殺しても宜しい。姦淫を犯しては悪い、しかし血を流しても宜しい。孤児は憐れむべしである、しかし幾万の孤児を作っても宜しいと。世に多くの矛盾はありますが、しかし慈善家の主戦論の如きはありません。もし戦争が可いと言いますならば慈善は全くこれを廃止するがよからうと思ひます。酒は人を殺すものなりとの理由で禁酒論を唱える人が、人を殺すことを目的とする戦争に大賛成を表するとは何のことやら私には少しも分かりません。私は今より後、かか

る人とは慈善や救済について一切共に語るまいと決心しました。

殊にこと基督信者の大多数が戦争の謳歌者おうかであつたことを見まして、私は一層深く今の基督教界なるものの我が活動区域でないことを覚さとりました。平和の君を救主と仰ぐと称する今の基督信者は平和の熱愛者ではありません。今や平和の主張者は基督教会の内には少なくして、反つてその外に多くあります。哲学者スペンサー、文豪フレデリック・ハリソン、同じくモンキュア・コンウエーのような人が劇烈なる戦争廃止論者でありまして、大監督とか小監督とか称しまして基督教会の牛耳ぎやうじを握る者は大抵は熱心なる主戦論者であります。これは実に奇態なる現象であります。今より百三十四年ほど前に米国にトマス・ペインという人がありました。この人は当時の基督教会に反対し『道理の世』なる書を著あつしたため今に至るも誰も彼の本名を呼ぶ者なく、ただ「無神論者の巨魁きょかいトム・ペイン」としてのみ彼の名は基督教会内に知られています。しかしながら、この人が米国における最初の非戦論者であつたことが今に至つて分かりました。彼は無神論者ではありませんでした、彼は無教会信者であつたのであります。即ち彼は彼の在世当時の基督教会なるものが人道の維持者でないことを知りまして、これに反対したのであります。「トム・ペイン」は教会の柔和なる服従者ではありませんでした。しかし彼は人道の勇敢なる戦士でありました。基督教会が腐敗していたために神は近世の最大慈善事業たる戦争廃止運動を教会より奪つて、これを教会以外の人に賜うたものではあるまいかと思ひます。今日の基督教会の恥辱ちじよくにしてこの名誉剥奪の如ごときはあるまいと思ひます。

かくして日露戦争は多くの新しき友人を私に紹介しました。私は平和の名によつて多くの未知の人と親交を結ぶに至りました。平和の神は平和主義を以て私をして多くの人と平和を結ばしめ給ひました。私には今や全

世界に二種の人があるのみであります、即ち戦争を好む人と戦争を嫌う人とであります。前者はたとい彼が基督信者であろうがあるまいが、慈善家であろうがあるまいが、私の友ではありません。これに対して後者はたとい彼が不可思議論者であろうがあるいは甚だしきに至つて無神論者であろうが、私の尊敬する友人であります。戦争の如き世界の大問題は実にかかる性質を備うるものではあるまいかと思ひます。即ちこれによつて人類を両別し、平和の子供と戦争の子供と、白き羊と黒き狼とを判別する性質を備うるものではあるまいかと思ひます。そうして日露戦争は私に取りましては友人の精錬所でありました。これによつて純金と金滓とは明白に両分されました。これ私に取りましては実には大なる利益であります。

* * * * *

この他にもまだ私がこの戦争より受けた利益は大分あります。しかし以上の三つがその最も大なるものであります。しかしながら、これらの利益がありたればとて戦争はもちろん決して善い事であるとは言えません。あたかも人が罪を犯して罪の罪たるを知りたればとて罪は善い事であるとは言えないのと同じであります。しかしながら「神を愛する者たちには、すべてが共に働いて善へと向かう」(ローマ書8章28節)とありますれば、近世の最大惨事とも称すべき日露戦争もまた多くの人に多くの利益を与えたであろうと信じます。しかしその利益の余りに高価なるが故に、私はかかる恩沢に浴するの機会が再び私に供せられざらんことを祈ります。

祈 禱

祈禱きとうとは此この事彼の事かを神かみに祈願ねがうことではない。そは「汝なんぢらの父は、祈求ねがう前から汝らの必要とするものを知り給たまう」とあればなり（マタイ伝6章8節）。祈禱とは自己を祈禱の態度に置くことである、神を我が心中の第一位に置き、自己は単に恩恵の受器じゆきとなりてその祝福を仰ぐことである。祈禱は人たる者がその造主つくりぬしなる神に対して取るべき当然の態度である。この態度に在りて彼の肉体は健全ならざるを得ず、彼の思想は明瞭ならざるを得ず、彼の行為は勇敢ならざるを得ず、彼の靈魂は高明こうめいならざるを得ず。この祈禱の態度に在りて万物は彼のために働いて善をなさざるを得ず。祈禱は信者が神に対して採る服従ふくじゆうの態度である、待命たいめいの態度である、受容じゆようの態度である。彼は一言を発するを要せず、また一事を求むるを要せず、ただ態度を改むれば足る。最高の祈禱は無言無求むごんむきうの沈黙ならざるを得ず。



1928年(昭和三年)七月廿五日(金)

先生は第六回札幌伝道(第十二回
回札幌伝道)として青森より共に上里(弘
(三ツ堂と上里)に赴き、新藤家次郎氏(弘
市)に会い、途上函館にて教友数名の
歓迎を受け、札幌山手温泉に半日を費し、二十
七日前八日(金)札幌に到着、多数教友の
歓迎を受けた。孫女正子の結婚は、秋の頃と
直ちに、秋之の新婚は、安善に、寛典は其後撮りぬ。
(今日、九月十九日、札幌山手温泉に到着した。)

Photo: ICU Library's collection

結婚式の辞

我らのうち誰も己^{おの}が為に生ぎず、また誰も己^{おの}が為に死なず。生くるなら主^{しゅ}のために生ぎ、死ぬるなら主^{しゅ}のために死ぬ。それゆえ、生くるにせよ死ぬるにせよ我らは主^{しゅ}のものである(ローマ書14章7・8節)。

これは実に厳肅なる言であります。あるいは結婚式の言としては余りに厳肅に過ぎると言う人もあるかも知れませんが。しかしながらそうではないと信じます。人の一生において最も厳肅なるべき結婚式は、この言に表われたる精神を以て行わるべきであると信じます。

今や結婚は至つて軽い事のように思われます。結婚は若い男女が幸福の生涯に入るの首途^{かど}であるように思われます。私共が彼らの幸福を願うは言うまでもありません。しかしながら真の幸福は如何にして得られるか、それが問題であります。そして幸福は幸福を目的として得られないのであります。幸福は義務を目的として得られるのであります。今の人は幸福第一に考えますが故に、その得る幸福は至つて浅くあります。

結婚は人生の最大事として幸福のみを目的として行わるべきではありません。幸福以外の、そして幸福以上の或るものを目的として行わるべきであります。この点において日本の武士道の教ゆる所が基督教の教ゆる所と合致します。武士の家に在^ありては結婚は第一に君^{きみ}の為でありました、第二に家の為でありました、そして第

三に当人の為でありました。まことに個人の権利を無視するように聞こえますが、しかしこれが為に比較的に潔い固い夫婦の縁が結ばれたのであります。そしてその根本の精神において、基督教は武士道と異なりません。基督教に在りては人生の万事はこれを神の為にを行います。神第一であります。そして神という言葉の内にすべての義務が籠もっております。国に対する義務、社会人類に対する義務、親戚友人に対する義務、すべてがその内に籠もっております。故に言うのであります、「我ら信者の内に己の為に生くる者は一人もない、生くるはすべて神の為である」と。そして結婚もまたこの精神を以て行います。男女二人が幸福を得る為ではありません。神の為に、国の為に、人類の為に、関係者一同の為にを行います。そこに結婚の重大なる意義があるのであります。

礼儀の欠けたる所に深い交際がないように、義務の欠けたる所に深い愛情はありません。昔の武士は君の為に結婚して堅い潔い家庭を作ったのであります。基督信者もまた神に在りて神の為に結婚して堅い潔い家庭を作るのであります。

塩と砂糖

教会が今日の如く^{ごと}に衰えた理由は数多^{あまた}あるが、その内で最も目に立つものは義のない愛を説いたことである。即ち正義の塩^{しな}を供えず^{そな}して愛の砂糖^{あた}を給えたからである。イエスはその弟子に向かい「汝らは地の塩なり」(マタイ伝5章13節)と言ひ給うたのに対して、教会は地の塩たらずして、然り塩たり得ずして、その砂糖であつたのである。甘い甘い、老婆^{ろうば}の、宣教師の愛であつたのである。その結果として締^{しま}りのない軟弱なる体質となつて、今日の無能^{きた}を来したのである。イエスはまた教えて言ひ給うた、「汝ら自身に塩を有^もつべし、然して相互に睦^{むつ}み和^{やわ}らぐべし」と(マルコ伝9章50節)。信者は各自その心の中に鹹^{かん}い強い正義の念を抱いて、自己を浄め、また互いに相親^{あい}しむことができるのである。日本の基督教会がこの簡単明瞭なる真理を忘れて、浅い宣教師流の愛を受け納れ、怒らず、憤^{いきし}らず、不義をそのままに掩^{おほ}い隠すがキリストの愛なりと思惟するに至つた。その結果として今日の悲しむべき衰退を来したのである。言うまでもない、塩を加えざれば真の砂糖の甘味は現われぬ。厳格なる正義の行われざる所に真の愛は働かない。今日の基督教会の如く^{ごと}に正義はすべて残酷無慈悲と思はるる所に、真の愛の行われようはずがない。

然り塩である、鹹^{かん}い塩である、今日の必要物はこれである。鹹い正義の塩を欠いて、我ら無教会信者もまた忽^{たち}ちにして嘔^{おう}氣^きを催^{もよお}すほどに甘い、厭^{いや}に甘い教会信者に成り了^{おわ}るのである。

義の宗教

平和は貴むべくある、しかしながら義による平和のみ貴むべくある。愛は慕うべくある、しかしながら義による愛のみ慕うべくある。義によらざる平和は平和にあらず、義によらざる愛は愛でない。基督教は単に愛を教うる宗教ではない、義を満足させる愛の宗教である。それが故に特に貴いのである。神がイエスを立てて信ずる者の宥めの祭物とし給えるは、その(神の)義を彰わさん為、すなわちイエスを信ずる者を義とし、なお自ら義たらんが為なりと言う(ローマ書3章26節)。これによつて知る、福音の原因が義であつて、その方法が義、その結果が義である事を。義を以て始まり義を以て終わる、それがキリストの福音である。これを十字架の福音と称するは、それが為である。十字架は神の義の表彰である。これによらずして神の愛は臨まない。近代人は義を避けて愛を解さんとするが故に真の愛を解し得ない。すべて深い愛の人は強い義の人であつた。基督教の神は焼き尽くす火である、故にその愛は広遠無量である。怒らざる罰せざる愛は、偽りの愛である。

犠牲の生涯

基督信者の生涯は犠牲の生涯である。

汝らの身を献げよ、神を喜ばせる聖き活ける犠牲として。これこそ理に適った汝らの奉仕

とある(ローマ書12章1節)。然して犠牲とはこれを「イケニエ」と訓んで、生けながらに獣を贄として神に献ぐるの意である。「活ける犠牲」とはこの事である。即ち犠牲の生涯とは人に対する生涯でなくして神に対する生涯である。人を眼中に措かずして、我は全然神の所有であれば、我が身と我が所有とを尽く神に献ぐるはこれ当然の祭なりと信じて喜んでこの事を決行するのが、それが即ち真正の意味においての犠牲の生涯である。神を眼中に措かずしてただ他人のためにのみ尽くす生涯は、これを称して犠牲の生涯と言うことはできない。然してまづ自身を神の前に献げざる者が他人に対して美わしき犠牲の生涯を送れようはずがない。犠牲は字義の通りに生贄を以て始まるべきものである。まづ神を祭り、自身を聖き活ける祭物として彼の祭壇の上に献げて、然る後に容易くこれを同胞のために捧げ得るに至るのである。

かくの如くにして神事は先であり人事は後である。即ち信仰は先であり道徳は後である。まづ神と和らがずして深く清く人を愛し得ようはずはない。宗教の必要はここに在る。真の宗教は神と人との関係を明らかにし、人を神の前に義しき者となして、その結果として人をして人と相和らぐを得さしむ。誠心を以て神を祭らざる生涯に真の犠牲など有りようはずがない。



1917年(大正六年) 東山荘集會の日

近郊を独り歩きたる

木村錦三先生

(五十七歳)

Photo: ICU Library's collection

二 月 中 旬

風はまだ寒くある、

土はまだ堅く凍る、

青きは未だ野を飾らない、

清きは未だ空に響かない、

冬は未だ我らを去らない、

彼の威力は今なお我らを圧する。

然れど日は少々長くなった、

温かき風は時には来る、

芹は泉のほとりに生えて、

魚は時々巢を出て遊ぶ、

冬の威力はすでに挫けた、

春の到来は遠くはない。

THE HUMOURLESS PEOPLE

There are people who are entirely humourless. To them every word has but one meaning. They call spade, spade, and attach no other meaning to it. When we tell them that spade sometimes means honest labour, or independence, or peace as plowshare does in famous prophecy of Isaiah, they laugh us to scorn, call us mystics and dreamers, and even dangerous men.

They are proud of their literal interpretation of the Bible; and when they read in it that “they shall beat their swords into plowshares and their spears into pruninghooks,” or that “the lion shall eat straw like the ox,” they believe that these words shall be literally fulfilled.

Poetry to them is no fact. Indeed, they have no poetry. All is prose to them; literature to them means statute books, book-keepings, and statistics, and nothing more. Verses and rhymes, beautiful dreamings, and speaking by contrasts and covert words are foolishness to them.

They judge men and women by words and actions, and cannot look behind the veil and read kindness in wrath, love in fierce words, piety in seeming blasphemy, brotherliness in contentious deeds, and tears in iron-fists. They *are* prosaic; they call spade, spade, heretic, heretic, orthodox, orthodox. So it is very easy to deceive them. We wear the robes of orthodoxy, and they take us for good orthodox. We join the Methodist Church, and they take us for good Methodists. We become Episcopalians and we are trusted by bishops and deacons. We allow ourselves to be baptized or “dipped” into water, and we are considered to be good Baptists. And so forth.

But truth is, Truth refuse to show itself so plainly. Truth like a modest maiden likes to hide herself; she may ward off the touch of rudeness. Truth hates nothing so much as vulgarity; she tries every means in her power to frighten, scare, and drive away the sacrilegious touch of familiarity and the worse profanity of patronage.

And Truth *is* poetical. Indeed, Poetry is Truth in the highest form,
and so is meaningless to the prosaic and humourless.



1928年(昭和三年)六月二日

十一時、東京在住の同時の受洗者、新渡戸編造、渡井勇、自分と三人、之に加うるに秋葉の兄分、伊藤一隆、大島正健の両君を加えて五人、雨を浴びて青山霊園に参り(次記の通り)

伊藤一隆
大島正健
新渡戸編造
渡井勇
自分
渡井三

Photo: ICU Library's collection

伊藤一隆を葬るの辞

(一月七日 東京青山会館において)

詩篇第二十二篇

我らの愛する伊藤一隆は永き眠りに就きました。彼は何れの方面より見るも著しい人物でありました。もちろん何人にもあるように彼にも短所がありました。彼はいわゆる学究の人ではありませんでした。神学や哲学の回り遠い道は彼の堪え得ざる所でありました。彼はまた繁文縟礼の役人風に堪えませんでした。しかしながら世にもし常識の人がありますならば、彼はその典型でありました。彼は一見して事物の理非、善悪を識別するの驚くべき能力を有しました。私共彼の友人は多くの難しき場合を彼の判断に委ねました。そして彼の判断は大抵誤りませんでした。そして判断の事項は人生日常の實際問題に限りませんでした。ある場合においては教理の難しい問題について伊藤の判断を求むるが解決の捷徑でありました。彼は真理を直観する非凡の才能を有しました。彼の賛成を博するは自己の信念を確保するの有力なる途でありました。

この能力を以てして彼は事に当たって成功は確実でありました。北海道における水産事業、越後における石油事業、すべてが成功でありました。伊藤一隆を知る者が常に不思議に思う事は、彼が何故にこの世のいわゆる「成功者」としてその一生を終わらなかつたか、その事にあります。彼は成功の秘訣をよく知りました。そして彼はその驚くべき才能を以て多くの人を富ました。然るに彼れ自身は貧しき人として終わりました。

明治大正の世に在^あつて、その点において彼は一つの大なるエニグマ(謎)であります。彼は富を作るの途^{みち}に精通して自身は富を作り得ず、また作らんと欲^{ほつ}しなかつたのであります。彼にもし富者たらんと欲^{ほつ}がありました。主の一人でありましたでしょう。然^{しか}るに彼には富を作るの技術があつて、その慾がなかつたのであります。

彼の従事した社会事業について私はここにそれを宣^のぶる必要はありません。伝道の事、禁酒運動の事において、彼は權威ある指導者、有力なる戦士でありました。彼はこれを五十年前に始めて死に至るまで少しも変わ^わりませんでした。私自身がこの事において早き頃の彼の仲間でありました。私共は開拓官吏^{かいたくかんり}の地位を利用して盛んに基督教の伝播に従事し、禁酒の宣伝^{せん}を行いました。その頃の私共には善事を為^なすに当たつて公私の別はありませんでした。伊藤も私も開拓使又は札幌県から日当旅費を受けながら水産調査をする間に、盛んに基督教の伝道に従事しました。そしてその精神を私に吹き込んだ者が彼れ伊藤一隆でありました。嘗^{かつ}て或る日曜日の晩でありました、伊藤が我らの小会堂の講壇に立ち、私共数人は彼の説教の聞き役になりました。その時、計らずも会堂の窓口に立たれし一人の紳士がありました。私共は一見してその誰なるかを知りました。彼は當時の札幌県知事、今日で言う北海道長官調所^{ずしよひろ}広丈氏でありました。彼は散歩がてらに我らの説教会を覗^{のぞ}かれたのであります。その時、壇上の伊藤は声を張り揚げて言いました、

狗児^{けんご}を追ひ払え

と。紳士は辟易^{へきえき}して去りました。伊藤は何知らず顔に彼の説教を続けました。それが五十年前の伊藤でありました、そして大体に最後まで彼の彼でありました。

人は伊藤一隆と言えば活動の人であると言います。まことに彼は活動の人でありました。彼に在りては實際に活動せざる真理は真理でなかつたのであります。彼は純真理又は純信仰と称して實際に人と社会とを益せざる理想空論の価値を認めませんでした。しかしながら、もし人が伊藤一隆を単なる實際家と思いますならば、その人は大いに間違ひます。彼はいわゆる社会運動家ではありませんでした。禁酒事業は彼の生涯の事業でありましたが、彼には禁酒事業よりも大切なものがありました。彼に宗教がありました。そして彼の宗教は、今日の多くの宗教家のその如くに社会事業ではありませんでした。伊藤一隆は社会事業家である以上に敬虔ある基督信者でありました。人ありて、もし彼に社会事業とキリストの福音と二者何れを択ぶべきかを問ひましたならば、言うまでもなく彼は答えました、「キリストをお信じなさい」と。伊藤一隆の熱心は禁酒を説く時に燃えましたが、しかし彼の全身全霊の精力は彼がキリストの十字架の福音を説く時に注がれました。彼は度々今の時代に社会事業の挙がらざる理由を述べました。それは眞の基督教、即ち十字架の福音が信ぜられないからだと言いました。彼自身が彼の社会事業の熱心の源の那邊に在るかをよく辨えました。彼は聖書と祈禱となくして人は活動的に蟬の脱殻である事を知りました。故に彼に会つて別れる際に彼が言うことは定つていました。曰く、

君、祈つてくれ給え

と。そして彼自身の祈禱に異常の能力がありました。それは実に天地を動かす力でありました。私共の集会において、私共は彼の説教を聞くよりも彼の祈禱を要求しました。彼の祈禱は実に祈禱らしき祈禱でありました。彼の生涯の終りににおいて彼は祈禱を以て大なる伝道を遂げました。

そして彼の信仰と言つて決して新しい、いわゆる合理的の信仰ではありませんでした。常に新しい、故に旧い古い信仰でありました。使徒パウロより今日に至るまで変わりしことなき基督教会通有の信仰でありました。

Jesus lover of my soul

Let me to thy bosom fly.

とか、又は、

Just as I am without one plea

But that Thy blood was shed for me

とか言う古い讃美歌に表われた信仰でありました。伊藤と信仰談を交えて事がここに至りますれば、彼の態度は急に嚴肅になり、何か大問題の彼の中心に触れしを覚えました。忘れもしません、昨年十月初旬、私が北海道旅行より帰つて後、間もない時でありました。彼の病のやや重き由を聞きました故に、私は彼を彼の病床に訪れました。土産話は沢山ありましたが、彼の最も喜ぶものは聖書でありました。その日私はその朝私が読んだ大いに感じた所の詩篇第二十二篇を齎して彼を訪れました。そして私共の青年時代からの習慣として神聖なる場合には英語を用いるを常としました故に、私は英語を以て全篇を読みました。そしてそれに私の簡短なる註解を加えました。そしてその要点は次の如くであったのであります。第二節の「我が神、我が神、何ぞ我を棄て給いしや」以下の第二十二節までがキリストの受難の苦しみを預言したる言葉である。実に悲歎極まりなものであつて、読むに堪えない者が多い。然れども第二十二節の後半部に至つて調子は一変する。「汝、我に応え給えり」を前置きとして後は終末まで感謝、歡喜、希望の連続である。絶望の声を以て始まりしこの歌は、

希望満々の言葉を以て終わる。

民の子孫の中にヤハウエに仕うる者あらん

主の事は代々に語り伝えらるべし

彼ら来りて「これはヤハウエの御行為なり」とて

その義を後に生まるる民に宣べ伝えん

と。真暗黒より真光明へ、最大のコントラストに伴う最大の歓喜である。そしてこの事は何を示すか。キリストの苦難が信者の歓喜の基であることを示す。彼が「我が神、我が神、何故に我を棄て給うか」の声を発し給いしその苦しみが、我らの平安獲得の因を成したのであると思うと私の感想ありのままを述べました。その時の伊藤の喜びは譬えようなく、彼はその病体を床の上に起こし、私の手を取って感謝を繰り返し、如何にも私に彼の古い信仰を新たに喚起したかの如くに見えました。即ち伊藤一隆の信仰は、パウロ、アウグスティヌス、ルター、カルバン等の信仰でありまして、人の救われるは彼が為す事業に由るにあらず、神の子が彼のために流せし血、人の罪のゆえに甘んじて受け給いし死の苦しみに由るとの、深い、古い、強い信仰でありました。伊藤一隆は彼が従事した水産事業や石油事業や禁酒事業によつて救われんとは毛頭思いませんでした。彼が救われるの希望の磐石は、彼の救主が彼の罪のために流した贖いの血にありました。もし彼のこの信仰のゆえに迷信又は独断を以て彼を嘲る者がありますれば、彼は彼れ独特の常識と直感を以て嘲る者の無知浅薄を嘲りました。キリストの十字架拔きの基督教は我が伊藤一隆にとつては一顧の価値なきキメラ(妄想)でありました。

前にも述べました通り、見ようによつては伊藤一隆は人生の一つのエニグマ(謎)であります。東京は

芝神明前の土木請負業者の家に生まれ、純江戸つ児の性を受け、しかも野卑ならず軽薄ならず、悪しき事には悉く反対し、善き事には悉く賛成し、富を作るの技量を有しながら、これを己がために使わざりしと言うのであります。彼は如何なる地位に置いてても有用の人物でありました。死に至るまで人のために尽くしました。彼は日本人として最も有益にその一生を使つた者の一人でありました。何が彼をして斯かる人たらしめたのでしょうか。彼の遺伝性でしょうか、彼の受けた教育でしょうか、彼が交わりし友人でしょうか。否な否なと彼自身が答えます。否な否なと私共彼の旧い友人が答えます。神の恩恵が彼をしてかくあらしめたのであります。彼は事業家、活動家であつた以上に基督信者でありました。基督信者たる以上にキリストの囚徒でありました。キリストは明治の九年、北海道札幌において、英人デニング、米人クラークを以て青年の彼を捕らえ給いました。そして終生彼を手放し給わず、彼を以てその御榮を顕わし給いました。私は伊藤自身が度々言うのを聞きました、

僕はなぜ神が僕の如き者をこんなに恵み給うか、その事が解らないと。そしてこれは彼が既に病に罹り、万事がすべて不如意の時でありました。生氣澆漓たる江戸つ児がキリストの捕らうる所となる時に伊藤一隆の如き人物が起ころのであります。

私はここに私の旧友を葬る役目に当たりまして実に感慨無量であります。彼と共に共同の友人広井勇の葬儀を行つてから未だ半年になりません。今またここに大島、新渡戸の旧友と共に彼れ伊藤を葬らねばならぬ場合に立ち至りました。何れも五十年來の信仰の友であります。歩みし途は異なりましたが、目指す目的は違ひませんでした。そして私共は人生の終りにおいて人生最大の獲物は富でもなく名誉でもなく、事業でもなく成功

でもなく、神を知るの知識である事を知ります。そしてもし私共の生涯に少しなりともこの世の進歩幸福に貢献する所があつたとすれば、それはこの貴き知識の結果であつたことを認めます。広井勇の工学の独特なりしも、伊藤一隆の社会事業の一頭地を抜ぎん出しも、この知識の賜物であります。私共は信じて疑いません、伊藤一隆をその青年時代に捕らえし者、即ち昇天せるナザレのイエスが、日本人多数の霊を捕らえ給うまでは、日本に目覚ましき根本的の改革の起こらざることを。日本の基督教会そのものが伊藤一隆の信仰に立ち帰る必要があります。彼は死して私共をして彼に代わつてこの事を叫ばしめます。諸君、彼の声を聴いてやつて下さい。そして彼の生涯を更に一層意味あるものと成してやつて下さい。彼は死ぬるまで日本国の為を思いました。彼を弔う唯一の途は、彼のこの無私無慾の志を立てて行ふことであります。私は彼に代わつて偏に諸君に願います。

付記

伊藤は明治九年、即ち私より二年前に札幌において、英国聖公会宣教師デニングよりバプテスマを受けたのであつて、いわゆる札幌バンドの内で最初の基督信者であつた。後にメソジスト、長老（日基）、聖公会の三派が合同して札幌独立教会を作つた時に、彼は聖公会を代表して新教会の柱石の一人となり、死に至るまでその忠実なる会員また維持者として渝らなかつた。また旧札幌基督信者の内で直接に聖書研究社の事業に対して實際的同情を表してくれた極めて少数者の一人であつた。彼はしばしば柏木聖書講堂の講壇に立ち、単純なる

十字架の福音を説き、彼れ独特の家長的祈禱を捧げてくれた。彼は東京基督教青年会の理事であつたが、大正八年に同会が私に対してその講堂使用を断りし時に、私に同情して理事の職を辞した。彼は多くの事において私の善き相談相手であつた。昨年六月二日、私共の受洗^{じゅせん}五十年記念日に青山墓地においてM・C・ハリスの墓前で旧友五人に代わり祈つてくれたのは彼であつた。今やこの人逝^ゆいて大なる寂寥^{せきりよう}を感じざるを得ない。



一の十一年(明治四十四年)十二月

戸山原 和礼壽の森 大樹の下に立ち

大木金三(四+歳)

Photo: ICU Library's collection

単独の勢力

イザヤ書六十三章一―六節

今や何人も事を為さんとするに当たつて多数に依つて為さんとする。多数の賛同を得るのが成功の第一歩であつて、この賛同なくして何事も為し得ないと今の人は信ずる。ここにおいてか宣伝の必要が起こるのである。宣伝の目的は多数の賛成喚起にある。社会の輿論を喚起し、自分の説に賛成してもらつて、然して後にその実行を期待するのが、今の人が事を為す唯一の途である。政治界において政党の必要が唱えられ、宗教界において教会の必要が主張されるのも、これが為である。人が単独の力を信ぜず、多数に依らざれば何事も為すあたわずと思うからである。今の人にとっては多数これ勢力である。議会に多数を制するまでは、大真理といえどもこれに実力は伴わないのである。

然るに不思議なる事には、聖書は多数の勢力を認めないのである。聖書はまづ第一に神の勢力を認め、然る後に神に頼る個人の勢力を認む。多数とは弱き人の多数であつて、偉大なる事が彼らによつて為し得られようとは信じない。「人は既に草の如く、その栄えはすべて草の花の如し」(ペテロ前書一章24節)と言うは単に王侯貴族をのみ指して言つたのではない、すべての人を指して言つたのである。政党も教会も、団体も組合も、人という人は、その数は如何に多くとも、すべて草の花の如しと言うのである。聖書は君主政治をも代議政体をも信じない。聖書は多数に依るにあらざれば事を為すあたわずとは決して教えない。

そして聖書によれば、神は大事を為すに当たつて多数の勢力を以てせずして、単独の力を以てし給うた。イスラエルの人々をエジプトより救い出すに当たつて、民族的運動を起こさしめずして、モーセ一人を選び、彼を遣わして、彼一人を以て奴隷の民に自由を与え給うた。更に遡りて聖き民を造らんとするに当たつて、ある民族を選んでこれを聖め給わずして、カルデヤのウルにアブラハムを選び、彼一人を以て聖民四千年の歴史を始め給うた。イスラエルの王アハブの世に預言者エリヤはただ一人、王とバアルの預言者四百人とを相手に信仰革正の実を挙げた。その他イザヤも一人、エレミヤも一人、エゼキエルも一人、アモスも一人であつた。一人が改革の勢力であつた。王に頼らず、祭司に頼らず、また民衆にも頼らず、ただ一人で大墮落と大腐敗に対して闘い、根本的の革正を遂げた。まことにイスラエルの歴史は国民の歴史ではなくして英雄の伝記である。民衆の奮起を待たずして、神に依り頼む信仰の勇者が独り立つて救拯を施した、その事蹟の記録である。かくの如くにしてイスラエルを救ひし神は、同じ方法を以て世界を救ひ給うた。

我は単独で圧搾槽を踏み

我が民の内に我と共にある者なし

とは世の救主が発せる声であつた(イザヤ書63章3節)。イエスはただ一人、世の罪を身に担い、十字架の上にこれを除き給うた。イスラエルの民族的運動ではなかつた、イエス一人の贖罪の生涯と死であつた。人類はこれによつて救われたのである。そしてイエスに倣つてステパノは独り殉教の死を遂げ、彼に励まされてパウロは独り世界教化の途に就いた。ダンテも独り、サボナローラも独り、ルターも初めは独りであつた。大運動はすべて民衆の集会において始まらずして、信者個々の密室において始まつた。世界改造の実力は一人の靈魂

が神の靈に接する所において在る。集会集會と稱して、多数の勢力を待つて事を為さんとするは聖書的でない、また基督教教的でない。

會議また會議、大会また大会である。この日本においても既に世界青年会大会を見、また世界日曜学校大会を見た。そしてその結果として教勢は少しも揚がらず、信仰は少しも進まない。聞くものは依然として教勢不振の声である。そして今やまた、エルサレムにおいて全世界の基督教信徒の大会が催されんとしておる。その信仰的に何の永久的結果の見るべきものなきは今日までの例に照らしてみても明らかである。多数に勢力を認むるは米国人の癖である。民衆は彼らの偶像である。民衆に受け納れらるるを稱して彼らは成功と言う。彼らは明らかに聖書の教えに逆らつて、聖書の教えを世に布かんとしている。深く聖書を究めずして、ただ広く聖書を頒布して世界教化を図りつつある。我らは彼らに倣つてはならない。一人のエリヤ、一人のエレミヤの起ころん事を祈るべきである。神の聖旨ならば自分がその一人となる事を辞せずとの決心を抱くべきである。遙々エルサレムまでその會議に列なるために行く必要は少しもない。この日本に在りて、この富士山を眺めながら、この多摩川の水を飲みつつ、万軍のヤハウェの声を聞き、その聖靈を授かつて力ある者と成ることが出来る。我れ神と共に在りて我れ一人は全世界よりも強くある。かく言うは決して誇大妄想でない、真面目なる事実である。多数に依るは馬と戦車に頼ると同じだけの背信である。我らは集会好きの米国宗教家に倣うことなく、アブラハム、モーセ、エリヤに倣い、まづ独り神の友と成り、彼に力付けられて大衆を救い得る能力の源と成るべきである。

RELIGION PERSONAL

RELIGION is personal, not general. It is not “we”, but “I”, not plural, but singular,— first person, singular. It is not mankind or humanity, but I myself. “*My* God, *My* God, why have you forsaken *Me*?” (Mark 15:34) was Jesus’ own religion. “Wretched man that *I* am! Who will deliver *me* from this body of death?” (Romans 7:24) was Paul’s religion. Theologians seeking after general truth of religion, never find it. God is found only in one’s inmost soul; and a man who cannot make himself an object-lesson in religion, can never be its preacher. Modern Christianity is tasteless and powerless, chiefly because it is general and social, and not personal and individual. Is there anything more useless under heaven than the “expert” in religion?

宗教は個人的である

宗教は個人的である、全般的でない。宗教は「我ら」でない、「我れ」である。複数でない、単数である。第一人称の単数である。人類又は人道の事でない、我れ自身の事である。「我が神、我が神、何故に我を棄て給いしや」とはイエス御自身の宗教であつた（マルコ伝 15 章 34 節）。「なんと我は惨めな人間か！ この死の体より我を救わん者は誰ぞや」とはパウロの宗教であつた（ローマ書 7 章 24 節）。神学者らは宗教の全般的真理を探るがゆえに何時までも宗教を見出ださないのである。神は人の奥底の靈においてのみ発見せらる。自己を宗教の実験物として提供するあたわざる者は、その説教者たる事は決してできない。

近代的基督教が無味にして無能なるは主としてそれが全般的であつてまた社交的であり、個人的でなくまた一身的でないからである。天が下に無用なる者にして世にいわゆる「宗教専門家」の如き者があろうか。彼らは宗教を知らずして宗教を語る者である。

BE UNPOPULAR

Oh be unpopular, be purposely unpopular. It is a shame to be popular, these days. To be popular means to be superficial, democratic, American; it is to be of earth, earthy, clinging to the dust. Oh be entirely unpopular, out of the reach of the mass, unearthly, ethereal, speaking in “dark parables,” so that only the elect few can understand. In an age like this, pride in one form is a virtue, to keep oneself intact from the stain of vulgarity. To be the most popular man, whether to be a president of a republic or of cabinet, is to be a near relative of the Adversary of mankind usually called Satan. Oh be unpopular like God Himself, for He is the most unpopular person in this generation, because He makes so little of business and prosperity, and so much of holiness and eternal life.

〔不人気なれ〕

〔ああ不人気なれ、^{えら} 忤んで不人気なれ。今の時代にあつて人気者たるは恥である。人気ありとは皮相的たり、民衆的たり、アメリカ的たることである。これ悉く地^{ことごと}に属^つけるもの、世俗的なるもの、塵^{ちり}に帰するものである。故に全く不人気なれ。衆人の手の届かざる、この世^{もの}の属^もならざる、天に属^つける者となれ。“暗^{くら}き寓^{ぐう}話^わ”にて語り、選ばれたる少数者^ごにのみ解^げさるる者となれ。今の如^{ごと}き時代にあつては或る種のプライドを持つことは美德である。これによつて俗悪の汚^{けが}れより我が身を守ることができ。大統領であれ総理大臣であれ衆人の人気を最も博する者となるは人類の大敵（いわゆる悪魔^{サタン}）になるのと同然である。ああ不人気なれ、神御自身^ごの如く不人気なれ。そは彼こそ、この時代にあつて最も不人気なる者なのだから。なぜならビジネスや経済的繁栄をほとんど為^なさずして、絶大^{せいせい}の聖性と永生^{えいせい}とを供しているのだから。〕

〔上記の和訳は編者による〕

A GREAT CONFUCIANIST

Jinsai Itō was a Japanese Confucianist of two hundred years ago. He lived in Kyōto, and never moved from his place, but students flocked to him from all parts of Japan at that time of difficult travelling. He called no man his master; rejected all offers of rich daimyōs to be made their tutor, so was poor all through his life. Withal he was genial, mingled with the common people; and himself a layman and commoner, was at the same time the nation's teacher. Great Jinsai! I would rather imitate him than hundreds and thousands of modern Christian teachers who are constantly moving to make converts of heathens, and that by the expense of churches and societies patronized by worthless millionaires!

大儒 伊藤仁斎

伊藤仁斎^{いとうじんさい}は余^よの会心^{かいしん}の儒者^{じゆしや}である。彼は今より二百年前の人、京都堀川^{きょうとみづがわ}に住し、自ら出ることなくして天下の学徒^{しゅうと}を自己^{じこ}の膝下^{しつか}に引き付けた。曰^{いわ}く「国として門人^{もんじん}あらざるなく、ただ飛驒^{ひだ}、佐渡^{さど}、壱岐^{いぎ}の人來学^{らいがく}せざるのみ」と。仁斎はまた独立^{どくりつ}の人であつた。官に仕えず、諸侯^{しよこう}の招聘^{しょうへい}に応ぜず、その故^とをもつて歳五十八^{とし}の頃まで家道^{けなは}甚だ薄^{はく}かりしと言う。彼はまた自身が商家^{かみや}の子なりしが如^{ごと}く終生^{しうせい}平民^{へいみん}の友であつた。

代々^{よよ}を経て眺^{なが}めし人の数^{かず}にまた

我^{われ}をもゆるせ秋^{あき}の夜^よの月^{つき}

この歌^{うた}を詠^{よめ}ぜし彼は学位^{がくい}尊称^{そんしょう}に身^みを飾^{かざ}りて喜^{よろこ}ぶが如^{ごと}き人ではなかつた。しかも彼は国民^{こくみん}の大教師^{だいかうし}であつた。彼以後^{き以後}の儒者^{じゆしや}にして直接間接^{じきけん}に彼の感化^{かんか}を蒙^{こうむ}らざる者はなかつた。日本国^{にっぽんこく}が彼に負^おう所^{ところ}は多大^{おほい}である。偉大^{ゐだい}なるかな仁斎^{じんさい}。余^よは彼に学^{まな}んで、卑^{いや}しき富豪^{ひふほ}の庇保^{ひほ}の下^{した}に存立^{ぞんたつ}する教会^{きやうかい}伝道^{でんどう}会社^{かいし}の補助^{ほつそ}を受けて信徒^{ひんとう}の製造^{せいぞう}に奔走^{ほんそう}する現代^{こんだい}多数^{たうすう}の基督教^{きりしきやうきう}の教師^{かうし}らに倣^{なら}わざらんと欲^{ほつ}す。

異端

異端、異端と言う。しかし実は世に異端ほど貴いものはないのである。世に異端があればこそ進歩があるのである。預言者は異端であつた、イエスも異端であつた、パウロも異端であつた、ルターも異端であつた、ウエスレーも異端であつた。異端であつたからこそ彼らは今日なお世に勢力があるのである。

異端は不道徳ではない。不道徳は正教の中にもある。然り、私の見る所を以てすれば不道徳は異端の中においてよりも正教の中においてより多く行われる。異端は独創の思想である、真理を探究するに当たつて人のオーソリテイーに頼らない事である。異端は真理の直参である、その陪臣でない。人には構わず一直線に真理と真理の神とに向かつて進むことである。

故に異端は常に新鮮である。陳腐なるは異端ではない。異端は多くの誤謬に陥る、しかしながら常に進む。異端を恐れる者は沈静の危険を冒す者である。身をいわゆる正教に委ねて、その命これ従うに優るの安全はあるまい。しかしそれでは奇峰に攀じ登りて高原を望むの快樂はない、深溪に下りて冽水を掬うの愉快はない。老人は悉く正教に帰依すべきである。しかし青年と壮士とは異端を試むべきである。我は山川を跋涉するの心を以て好んで異端に入る者である。

「危険」とよ。この神の造り給ひし宇宙に在つて何の危険かこれあらん。父は我らが何処の谷底、何処の噴火口に至るも我らを護り給うなり。彼れ時には我らの突進、輕躁を誡め給わん。然れども彼は永久に我らを棄

て給わざるなり。彼は怒り易き老翁ろうやにあらず、世の監督、神学博士ごつとの如き者にあらず。我らはただ彼を忘れざれば足る。縦横じゅうおうに宇宙しゅうりようを涉猟し、真理しんりを採とつて誤謬ごみうを棄すつ。何ぞなん教会の放逐ほうちくを恐れん、何ぞなん正教の破門おもんに怖おぢん。父の庭園ちようひを跳飛ちようひするにあたつて、何ぞなん人の制裁さいさに堪たえん。異端は神の子たるを自認するより出いづ。これその貴ゆえんき所以。

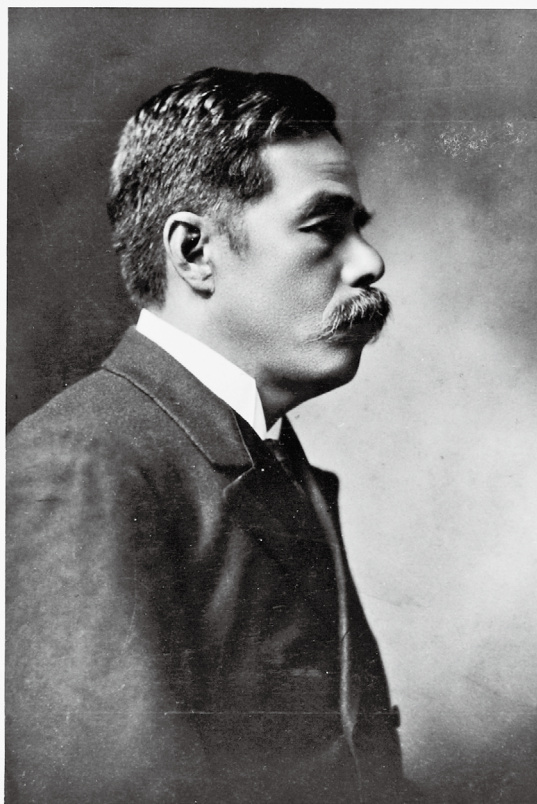
INDEPENDENCE

More than gold,
More than honour,
More than knowledge,
More than life,
O Independence!

O ye kings,
O ye princes,
O ye bishops,
O ye doctors,
Ye are tyrants!

Alone with Truth,
Alone with Conscience,
Alone with God,
Alone with Christ,
I am free!

K. U.



1922年(大正元年)十月
第三回 札幌傳道
同前

2-7月 内地 諸地方代表の
教友多数随行す。

Photo: ICU Library's collection

事実の信仰

事実の子たれよ、理論の奴隷たるなかれ。事實は悉くこれを信ぜよ。その時には相衝突するが如くに観ゆることあるとも、敢えて心を痛ましむるなかれ。事實は終に相調和すべし。その宗教的になると科学的になると、哲學的になると實際的になるとに関わらず、すべての事實は終に一大事實となりて現わるべし。我ら理論の奴隷たるが故に、しばしば懷疑の魔鬼の犯す所となるなり。神の言なる事實にのみ頼りて、我らの信仰は盤石の上に立つて動かざるべし。

文学者の信仰

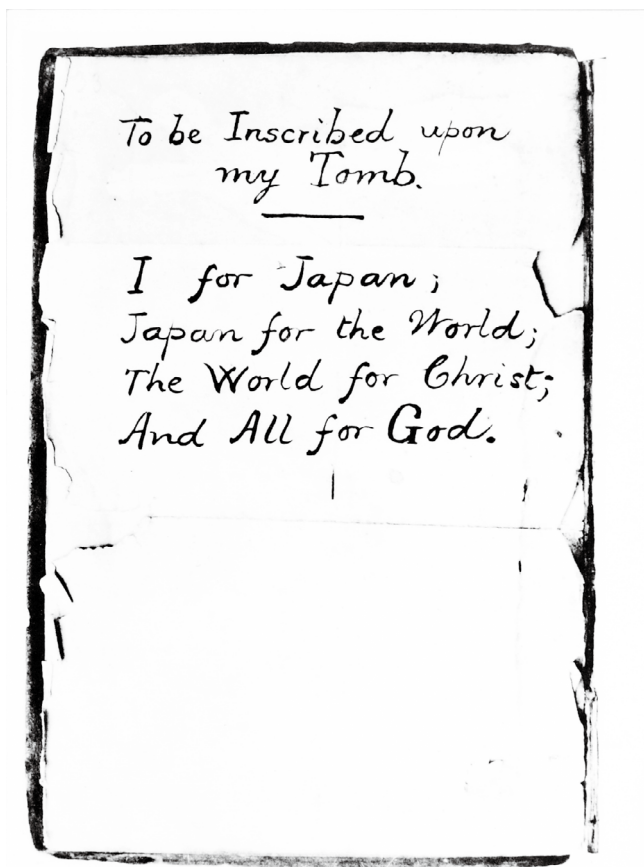
当てにならぬ者として文学者の基督教の信仰の如きはない。彼らは基督教に接してこれを歓迎する、これに憧憬る、その美的一面を見てこれに引き付けられる。然れども一朝その厳格なる道德的要求に会うや、これに耐え得ずして忽ちこれを棄て去るを常とする。文学者にして忠実なるキリストの僕としてその一生を終える者は甚だ稀である。彼らは自由を愛すると称して如何なる律法にも耐ゆるあたわず、正直を貴ぶと称して如何なる信仰をも懐くことができない。彼らは放縦の人たらんと欲し、思想においても行為においても何らの拘束をも受けざらんと欲す。然してかかる人らに基督教が解らないのは勿論である。基督教は愛の宗教である、義に基づく愛の宗教である。故に厳格なる義の要求に應ぜずして基督教の愛を覺ることはできない。罪を罪として認め、罪の咎は死なりと信じ、自身罪の子たる以上、死の刑罰に価する者なるを承認してのみ初めて基督教の有難さが解るのである。然れども、これ大抵の文学者の為すあたわざる所である。彼らはそれがために基督教を去つて、他に彼らに都合好き人生哲学に走るのである。文学者は律法なき福音、条件なき愛を要求して止まないものである。故に十字架を中心とする基督教に耐え得ないのである。畢竟するに文学者は思想の人であつて実行の人でない、好楽の人であつて奮闘の人でない、筆執る人であつて槌や鶴嘴や鋤を手にする人でない。故に大工の子なるナザレのイエスの教えは解さんと欲して解し得ないのである。文学は基督教を解さんとする者が扱ふべき最悪の途である。医学も工学も理学の農学も、然りまた法学も、人をキリストの福音に導く途と

して優^{はるか}に文学以上である。宗教は実験である、人生の深き事実である。宗教は行^{おこな}つて、闘^{たたか}つて、苦^{くるし}んで信ずることができ。考えて、夢みて、楽しみながら解することはできない。文学者は批評家、劇作家、小説家、然^{しか}り、特別の場合においては詩人と成ることができ。然^{しか}れども十字架を負^おうてキリストに従わん為には、彼らは余りに纖弱^{せんじやく}である、纖美^{デリアート}である、勇気が足りない。

PHILOSOPHY AND CHRISTIANITY

Philosophy says: know thyself; Christianity says: Look unto Me, and be ye saved. Philosophy is subjective, Christianity is objective. Practically, no good comes from introspection. Paul was right when he said: “I know that nothing good dwells in me, that is, in my flesh.” (Romans 7:18). So-called self-improvement always ends in failure. I look away from myself, unto Him who was crucified for my sins on the tree, and I find myself accepted and saved *there*, i.e. on the cross, and not in myself. It is a strange psychology, this salvation through looking at the Other; strange, but entirely true.

“And there is salvation in no one else, for there is no other name under heaven given among men, by which we must be saved.” (Acts 4:12). Modernism is another attempt to perfect one’s self by the discovery of its supposed innate powers. There *are* no such powers; the “innate powers” are powers of darkness; self in its more mysterious forms. I look at Him on the cross; God looketh on me in Him; God and I meet in Him, and there is reconciliation, which is the salvation of the sinful man. The simple, common-sense way of perfection; perfection accomplished by faith, outside of self; objective, and *not* subjective.



内木寸鑑三先生が生前風に書き遺した
墓碑銘

Photo: ICU Library's collection

信仰の冒険

信仰は冒険である、悪く言えばアテズツポウである、必ず成るといふ計算が付いての事でない、その点において科学と異なる。科学は実験と数学の上に立つて確実である。二と二を合すれば四である、酸素と水素とを化合すれば水と成る。その内に冒険性は少しもない。信仰に科学のこの確実性がない。信仰は非計算的であつて不確実である、しかも信じて疑わないのである。

信仰によつて、呼ばれし時にアブラハムは聞き従つた、承継しょうけいに受くべき所へと出て行けと。そして何処どこへ行くか知らずして出て行つた。信仰によつて、彼は約束の地に寓やどつた、余所よその地として、幕屋まくやに住んだ、同じ約束の共同承継者しやうけしやなるイサク、ヤコブと共に。なぜなら彼は基もとある都みやこを待ち望んだからである、その技術者、建造者が神である都を（ヘブライ書11章8〜10節）

とある。これが信仰の模範である。冒険である、しかし科学以上に成功したのである。

冒険の無き人生に興味なく、信仰の無き生涯に意義が無い。万事が科学化されて、何事も計算的に予知されるに至つて、人生は機械化されて生きるの甲斐なきに至る。しかし生命が生命である間は、その科学化は永久に行われぬ。信仰は生命の必然的付随物である。生命そのものが大なる冒険である。死せる物質界あに在つて存在を維持せんとするのである。この宇宙に生まれ出いでし以上、冒険は免まぬるべからず、信仰は廃はすべからず。

人生に科学も必要なれば信仰も必要である。然れども二者孰いづれがより、必要なかと問われるならば、私は

「信仰なり」と答えざるを得ない。カーライルが嘗て言ったことがある、「人類の歴史において信仰によらずして大事業の成った例なし」と。実に然りであると思ふ。大国民とは信仰の民であり、大人物とは信仰の人であつた。エジプトとバビロンはその文化(科学の応用)によつて滅び、小なるユダヤはその信仰によつて第二十世紀の今日もその民族を以て世界的勢力である。科学に亡国性があり、信仰に興国性がある。その最近の例がドイツである。一時は信仰の民たりしドイツ人が信仰を棄て科学信頼の民と成りし時に、世界大戦に禍いされて今日の惨めなる状態に陥つた。彼らの科学的計算は悉く外れて、彼らは敗残の民と成り終つた。そして彼らが賤視して止まざりしフランス人は物力よりも精神によつて勝つた。「神は偏らざる者なり」である。神に頼りし時にドイツ人は勝つてフランス人は負けた。同じドイツ人が科学の民となつて信仰を棄てし時に、弱きフランス人の敗る所となつた。世界大戦もまた信仰対科学の戦争であつた。そして科学を代表せるドイツが敗れて、信仰を代表せるフランスが勝つたのである。

今や科学万能時代である。信仰は迷信と同視され、過去と共に葬り去られんとしている。そして信仰の本城たるべき基督教会までが信仰的たらんよりも科学的たらんとして努めている。世界の危険は今やここに在る。科学的の教会の基督教は基督教たらざらんとしている。文明国はより、大なる自由を要求して、より賤しき物慾の奴隸となりつつある。科学を以て天然を征服して、その精神を天然に征服されつつある。

信仰は冒険である、富や名誉を得るための冒険でない、理想を行うための冒険である、良心に響く神の声に従わんとする冒険である。計算的でない点において迷信に似ている、しかし道義的、倫理的なるが故に迷信に墮落しない。信仰は宇宙を道理の宇宙と見、人生を義を行う存在と見る見方である。詩的である、科学的証明

を待たない、利害を顧みない、止むに止まれぬ靈魂の欲求である。損失と窮乏と死を冒して進む。まことに科学そのものが信仰によつて始まり、また維持されるのである。

冒険性を失いたる近代の教会を見よ、何んと詰まらない所でないか。教師の生活の安全は保証され、信仰は知識の証明する以上に信ずるに及ばず、社会奉仕をその第一の事業として社会に迫害されるの恐れ少しもなく、まことに散文的な、平凡な、勇気を要せざる詰まらない所でないか。米国の青年ですら冒険の無い教会に入るを好まずとの事である。有為の士が教会を嫌う理由の一つは、ここにあると思ふ。

余の耐えられぬ事

余に一つ耐えられない事がある。それは人が他の人を己の宗教に引き入れんとする事である。余は大抵の事には耐えられると思うが（神の恩恵によつて）、しかしながらこの事には耐えられない。余はその人の奉ずる宗教が何であろうが、その事を問わない。しかしながら何れの宗教にしても、人を己の宗教に引き入れんとする事は余の耐えられない所である。余はこの事を為す人に向かつて余の救主イエスキリストの言葉そのままを發せざるを得ない。即ち、

禍いあれ汝らに、律法学者とパリサイ人、この偽善者たち！ 汝らは一人の改宗者を作る為に海と陸とを歴巡り、そして成ればいつも、これを汝らよりも倍したる地獄の子となす（マタイ伝 23 章 15 節）

信仰自由は人の有する最も貴重なる権利である。この権利に較べてみて財産所有の権利など実に軽いものである。もしある人が余の所有する物を奪つたとしても、余は彼を赦すことができる。あるいは余の名譽を傷つける者があつたとしても余は然程にその事を心に留めない。しかしながら余の信仰自由を少しなりとも侵す者があれば、余はその者に向かつて余の大なる聖憤を發せざるを得ない。彼なる者は朽ちるこの世の物を奪わんとするに過ぎない、然るに此れなる者は朽ちざる靈魂を奪わんとする。宗教勸誘は詐欺窃盜に勝る罪である。然しかるかかる罪人が世に少ないかと言うに、決してそうではない。余輩の見る所によれば宗教家という宗教家は大抵はこの種の罪人である。彼らは人を己の宗教に引き入れる事が悪い事であると知らないのみならず、

反つてこの事を善き事であると思うておる。善き事であると思うに止まらない、彼らの信ずる神や仏の最も喜び給う事であると思うておる。彼らが神を見る事、昔の武士がその殿様を見しが如く、他の殿様の領分を侵し、その家来を誘い来りて己が殿様の家来とする事がこの上もなき忠信であると思うておる。伝道とは彼らにとつて信者の取り合いである。多くの信者を作る事、その事が伝道の成功である。教会に最も忠実なる者とは最も多く他の教会の信者を奪い来りて、これをその会員となしたる者である。彼らの信仰なるものは、この世の愛国心と少しも異ならない。彼らは帝国主義を彼らの伝道に應用し、全世界の人を駆つて己が教会の会員と為さんとする。

しかしながら、これ真理を愛する者の決して為すべからざる事である。悪しき事とは決して仏教を信ずる事ではない、天理教又は黒住教、カトリック教又はギリシア正教に帰依する事ではない。悪しき事とは嫉む事である、盗む事である、殺す事である、争う事である、誇る事である、他人の悪事を思う事である。然るに人をしてその悪を棄てしめんとせずして、その宗旨を変えしめんとする。これ大なる誤謬であつて、また大なる悪事である。人の宗旨はこれを変えるに及ばない、彼を善人となせばそれで良いのである。何も彼を誘つて我が宗旨に引き入れる必要はない。今日彼があるその地位において彼を恵むべきである。彼れまづ我が党の人となるにあらざれば彼を恵むあたわずと言うが如きは決して神の嘉し給う所でない。

然れば我は我が宗教を人に対して語つてはならぬかと言うに、そうではない。我が宗教を語るべき時と場合とがある。その時には我は何の憚る所なく大胆にこれを語るべきである。

(一) 人が我に我が信仰の理由を糾す時に我は臆憚なくこれを語るべきである。我は人を恐れて密かに信ず

る者ではない。我にもまた我が信仰の理由がある。我はこれを人に語るを憚らない。我に就いてこれを知らんと欲する者の前に我はこれを覆い隠さんとはしない。

(二) 我と信仰を同じうする人の前に、これを語るべきである。こうしたからとて我は少しも彼の自由を妨げない。彼は喜んで我に聞かんとし、我もまた彼に告ぐるを喜ぶ。我は兄弟に語るの心を以て語り、親友に書き送るの心を以て書く。我と信仰を異にし、主義を異にし、教会を異にする者は我に聴くべからずである。

(三) 我は、また時には、我が信仰を、公けにする。これ我の有する言論の自由によるのである。他人を我が信仰に引き入れんが為ではない、我が信仰の何たるかを世に知らしめ、その是非を公論に訴え、いささかなりとも真理の発展に貢献せんが為である。然して真理は自証するものであると言え、我は強いてその採用を人に迫るべきではない。我は静かに我が所信を唱え、これを神と時とに委ね置けば、それで事は足りるのである。

そして以上の場合において我が信仰を人に語つた結果、ある者が自ら進んで我と信仰を共にするに至らば、我は敢えてこれを拒まず、喜んで彼を我に迎えるであらう。然れども我はその時まで少したりとも彼に圧迫を加えてはならない。権力を以てせざるは勿論、利益を以てしても、議論を以てしても、はたまた無益の能辯と思辨を以てしても彼を我に誘うてはならない。我の勉むべきことは、彼の我が如く成らんことにあらずして、むしろ我の如く成らんことである。世に嫌うべきものにして画一の如きはない。樹がもし悉く桜となつたらば如何、鳥が悉く孔雀となつたらば如何。もし人が悉く我が如く成り、我が宗教を信じ我が主義を奉じたらば如何。その時は我はこの世に厭き果てて一日も早くこれを去らんと願うであらう。

仏教徒は仏教徒として発達せしめよ、旧教徒は旧教徒として発達せしめよ、新教徒は新教徒として発達せし

めよ。然^{しか}して我は我として発達せしめよ。我ら神の子は相互の発達を助くべきである。いわゆる法幢^{ほうどう}を掲^かげて他宗を説伏^{せつぷく}するが如^{ごと}きは愚の極、不法の極、悪事の極と称せざるを得ない。

我が信仰の祖先

日本にも大なる信仰家が在った。法然ほうねんの如き親鸞しんらんの如き正まさにその人であつた。彼らが仏教徒であつたのは、彼らの時代に仏教を除いて他に宗教がなかつたからである。我らは彼らが仏教徒であつたとの故を以て彼らを軽視すべきでない。

信仰の何たるかを知つたことにおいて彼らは現今いまの欧米キリストの基督信者よりも遙かに深くあつた。彼らが弥陀みだに頼りし心は、以て基督者がキリストに頼るべき心の模範となすことができる。彼らは絶対的他力を信じた、則すなわち恩恵の無限の能力を信じた。彼らは全く自己の義(self-righteousness)を排はして弥陀の無限の慈悲に頼つた。本願ほんがんを信ぜんには他の善も要ようにあらず。念仏(信頼)にまさるべき善なきゆえに悪をも恐るべからず。弥陀の本願を妨ぐるほどの悪なきがゆえに。

親鸞のこの信仰に勝る信仰はあるべからずである。ルターはこれを聞いて喜んだであろう、「アーメン、実に然り」と彼は言うたであろう。然して今の欧米の基督信者は、かくまで大胆に言い断るの勇氣を持たないのである。彼らは神を余りに恩恵ある者と見るの結果として人が憚らずして悪を為すに至らん事を恐れるのである。しかしながら、これ無益の心配であることは人類の信仰史の証明する所である。神の恩恵が人の罪惡に勝つてのみ眞の救済はあるのである。親鸞はこの大胆の言を放つて信仰の奥義を語つたのである。

日本国に既にこの信仰が在った。我らは信仰の事に關しては必ずしも欧米人に学ぶ必要はない。我らは法然

『せんちやくしゅう選択集』において、親鸞の『たんにしやう歎異抄』において、又はかくによ覚如の著として伝えられる『あんじんけつじようしやう安心決定鈔』において、深き貴き信仰の原理を見るのである。

かく言つて我らは寺院化せる、化石せる、「死者を葬る死者」と化せる我が国今日の仏教に帰依せんと欲するのではない。我らは今やこの国において仏教を見ずして仏教の死骸を見るのである。しかしながら死骸の残存するは、その内に嘗て一度は澆漓たる生命の働いていた何よりも良き証拠である。歴史はそれ自身を繰り返すと言う。同じ生命を供して同じ活動を起こし得ない理由はない。法然親鸞の信仰に蹴起せし日本国民は今といえども同一の信仰に覚醒しない理由はない。しかも更に剛健なる、更に刺激的なる、更に合理的なる、然して明らかに歴史的なる信仰を以てして彼らが奮起勃躍しない理由はない。

然^{しか}、信仰なるかな。然^{しか}して日本人は七百年前の往昔^{むかし}より既にこの貴き信仰を有^もつたのである。

迷信と信仰の区別

道德に関係なきもの、又は道德に違反するもの、これ迷信なり。道德と相離れざるもの、又は道德を助くるもの、これ信仰なり。福利を祈ること、これ迷信なり。正義を懇求すること、これ信仰なり。迷信、信仰の別は知識的ならずして道德的なり。

CHRISTIANITY OF THE UNCONVERTED

What is Modernism in all its forms but the Christianity of the Unconverted? It is an attempt of the modern men to understand Christianity without the terrible experience of conversion. But it is still true in this Twentieth century as it was in the First, that “Unless one is born anew, he cannot see the kingdom of God.” (John 3:3). No amount of Critical knowledge, of Philology, Archaeology, Comparative Religion, and others, can take the place of the spiritual insight given by the experience of conversion, in the right understanding of Christianity. To understand Christianity without conversion is as futile as to “milk the bull,” to use a well-known Johnsonian expression. But strange to find so many modern scholars zealously engaged in this work of milking the bull! The bull languishes, the milkman famishes, and everybody is a loser in the vain attempt.

神に帰るの経験なき者の基督教

現代人の基督教は神に帰るの経験なき者の基督教である。すなわち神に帰る（^{コンバージョン}CONVERSION）という恐ろしき霊の実験を経ずして基督教を解さんとする努力に外ならない。しかしながら第二十世紀においても第一世紀におけると同じく「人は新たに生まるるにあらざれば神の国を見るあたわず」である（ヨハネ伝3章3節）。人は言語学、考古学、比較宗教学、その他の聖書学的知識に如何に精通するも、神に帰るの経験によって与えられたる眼識なくして基督教を正解する事はできない。神に帰るの経験なくして基督教を解さんとするは、博士ジョンソンの言えるが如くに、「^{ごと}牡牛より^{おうし}乳を^{しば}搾らん」とするが如くに^{ごと}徒勞である。然るに、不思議に堪えざるは、多くの現代の学者が熱心にこの徒勞の業に従事することである。その結果たる、牡牛は衰え、乳夫は飢え、これに関係する全ての人が得る所なくして失う所あるのみである。

FAITH AND THINKING

Faith is not thinking; what a man thinks is not his faith. Faith is rather being; what a man is is his faith. Thinking is only a part of being; rather a superficial part, a mode of the being's accommodation with the material universe. So, we can never get faith by thinking; no amount of thinking, however rigorous and accurate, can give us faith. Faith is the soul's right attitude to God; it is the spiritual being in action, firstly in relation to the Creator, and secondly, in relation to the creation. The soul's primal energy is in its will. It grows and comes to know the Creator by willing to do His will. (John 7:17). Willing and not thinking is the way to His teaching. Willing, of course, is not mere wishing; it is the will to do, —wishing and doing at the same time. The soul by willing to do God's will, knows God and His teaching.

And what is Modernism but identification of faith with thinking. The modern man thinks he can know God's truth by thinking. He thinks, if any man has sufficient critical apparatus in his hand, he can know God, Christ, the Bible, and all that are written in it. So they think they can teach Christianity to others, to heathens specially, by making them think as they themselves think. They teach them in Philology, History, Philosophy, and Theology, and think that poor benighted heathens can thereby come to the knowledge of the Christian truth. And what is Higher Criticism but application of human thinking to the understanding of the Divine truth? Its very dryness and unfruitfulness is due to its defective knowledge of the nature of faith. Faith is not thinking; it is will-to-do, and so is attained only by heroic deeds. Theological seminaries are the least fitted places to get faith. Like the old Buddhist priests whom the samurai despised as "rice-consumers," the seminary-made teachers of Christianity are the fruitless fig trees that cumber the ground. They are not fitted to till the ground; neither are they fitted to save souls.

Faith is the soul in passive activity. It is the soul letting itself to be acted upon by the mighty power of God. Passive though faith is, it is intensely active because of the power that works in it. This is the paradox of faith; and he who knows not the paradox, knows not faith. The classical passage on faith is the well-known word of St. Paul in his Epistle to the Ephesians:

For by grace you have been saved through faith: and this not from yourselves, it is the gift of God: not from works, that no one may boast. For we are his workmanship, created in Christ Jesus for good works, which God prepared beforehand, that we should walk in them. (Ephesians 2:8-10)

The Christian is God's "special workmanship created in Christ Jesus for good works." He is a newly created soul which engenders special activity called faith. Faith is thus a Christian activity of far higher order than thinking. It is the whole soul in beneficent action, God-caused and God-sustained. It is essentially "the gift of God." No philosopher or theologian can impart it to us; neither can we generate it by our effort. As the wind bloweth where it listeth, and we hear the voice thereof, but know not whence it cometh, and whither it goeth, so is faith wafted to the God-blessed soul and remains with it, and works in it. The modern man ridicules such an idea of faith, because he wishes to make it his own possession by his thinking; but rage though he may, he cannot get faith by his thinking; with all his thinking, he is as far removed from faith as any heathen in his blindness. Higher Criticism, New Theology, Ethical Evangelism, and other modern ways of seeking truth are nothing but "thinking mechanisms" which can no more think out faith, than the ballot-box can grind out true patriotism.

TRUE RELIGION

It is not to think; it is not to work; it is to believe, simply to believe.
Belief makes one to think rightly, and to work righteously.

“This is the work of God, that you believe in him whom he has sent.”
said the Lord and Saviour. (John 6:29)

Verily so, verily so!

No use of advertisement, no use of agitations; no use of “movements”
and “drives”;—

No use of enlisting men’s sympathies.

Belief, belief, as of a dutiful son in his father,—

That is the highest wisdom, and the power that moves the universe.

Nothing is so simple as true religion; no use of theology and religious
pedagogies for it.

No need of monastery and self-immolation,

No need of searching heaven and earth for it.

“The word is near you, in your mouth and in your heart, that is, the
word of faith,” said Brother Paul. (Romans 10:8)

The universe seems to be so constituted as to respond to the call of
faith.

Belief,—it is not mysticism, it is a sane deliberate act,—

Complete delivery of one’s whole self to the Father and Maker of the
Universe,—

An act to become entirely passive, and so be made wonderfully active.

三種の宗教

宗教に儀式的なると、倫理的なると、信仰的なるとの三種類がある。儀式的なものが最も低く、倫理的なものが最も高くある。そして儀式的が普通であるが故に、倫理的なものが最も高くあると思わゆるが常である。今日の基督教学者が「基督教は倫理的宗教なり」と唱えて、その優秀の宗教である事を主張するがその一例である。しかしながら倫理的なものが儀式的なより高きが如くに、信仰的なものは倫理的なるより高くある。基督教は最高道徳でない、贖罪教である。キリストに在りて神が人類の罪を滅ぼし給えるその事実を示せる宗教である。「汝ら我に倣え、然らば救われん」と言う宗教にあらず「汝ら我を仰ぎ瞻よ、然らば救われん」と教うる宗教である。信仰第一の宗教である、道徳はその次である。故に基督教に在つては倫理的なるは墮落である。基督教が盛んなる時は信仰的に盛んなる時である。そしてそれが倫理的に盛んなる時もまた信仰的に盛んなる時である。基督教が倫理を目的とする時に信仰は衰え、倫理もまた衰えるのである。現代人の好むものは二つある。その一つが芸術であつて、その他のものが倫理である。そして基督教に在つて、芸術を好む者はローマカトリック教に行き、倫理を愛する者はプロテスタント教に行く。カトリック教は芸術的崇拜であつて、プロテスタント教は倫理的願望である。然れども福音、即ち眞の基督教はキリストと彼が十字架に釘けられし事である。基督信者の全部はキリストと彼の十字架においてある。彼の礼拝も道徳も全てそこに完成されたのである。ただキリスト、ただ十字架である。そしてただこれを信ずる事である。現代人

はその単純なるに堪えない。倫理学者はこれを迷信と同視する。然れども信ずる者には「これ神の智慧また能力たるなり」である。

人が自ら神を求むる時に彼は芸術的に又は倫理的に神に近づくかんとする。然れども神が人を求め給う時に、人は信仰を以て神に到るより他に途がない。信仰とは神が備え給いし救拯の途に自己を信す事である。信仰に手段方法は何もない、**ただ信ず**である。信仰は美しき儀式でもなければ、麗わしき思想でもない。自己の罪に目覚め、神の恩恵に牽かれて「起つて我が父に行かん」と言つて彼の懐へと帰り行く事である。**神の恩恵に應ずる人の信仰**、それが真の基督教である。

病床中の主筆言う。今度私が死んだとして、私は私の絶筆としてこの短文を遺して恥としない。私が生存するならばこの信仰を繰り返すまでである。



1887年 (明治二十年)

アマスト大學
在学時代
(二十歳)

Photo: ICU Library's collection

近世婦人の要求

ある日曜日の朝、府下のある高等女学校で教育の任に当たられる貴婦人某が私の家に訪われ、宗教問題について私に問う所ありたれば、彼女と私との間に大略左の如き問答起こりたり。

問 先生、宗教はまことに結構でありまして、人には是非とも無くてはならないものであります。しかし宗教はこの世と衝突するものでありまして、この世を円滑に渡らんとするには信仰は守り難いものであります。故に私が殊に先生に伺いたいことは、世にこの世と衝突しない宗教がありますまいか、また基督教を信ずるとしてこの世と衝突せずしてこれを信ずる道はありますまいか、その事について伺いたく存じます。

答 それはまことに困った御質問であります。しかし今の世にはかかる質問を掛ける人が沢山おります。彼らは血を流すことなくしてこの世から天国に行きたく思います。しかしながら私の見る所によりますれば、甚だお気の毒ではあります、しかし、かかる便利なる宗教は一つもないと思います。あるいはもし他にあるとするも私の信ずる基督教は決してそんなものではありません。基督教をこの世と調和せんとするは火を水と調和せんとするように難しくあります。基督教はその根柢においてこの世の敵であります。故に誠実に基督教を信ぜんと欲すれば、この世との衝突は到底免れません。私はもし貴女がこの世との衝突なしに基督教を信ぜんとされるならば、始めからこれを信ぜられざらんことを御勧め申し上げます。貴女がもし新約聖書を善く読んで

御覽なさるならば、私がここに申し上げることが決して虚偽でないことを御認めになります。

問 それはそうであると致しまして、基督教と科学とは衝突致しませんか、その事について伺いたく存じます。

答 その事について御質問でありますか。その事ならば私が永々とここに貴女にお答え申す必要はありません。基督教と科学との關係を知らんと欲するならば基督教と科学の両方をその根本において深く研究するより他に善い方法はありません。世の両者の矛盾を説く者は大抵は両者を深く究めない者であります。あるいは一方を究めて他の一方を究めない者であります。基督教について聞き、科学について聞いた人のみが二者の衝突を唱えるのであります。もし貴女が二者の關係を知らんと欲されるならば一方においては直に聖書について、他の一方においては直に天然について誠実なる研究を続けられんことを望みます。貴女は二者の間に深き深き調和の存することを知られまして、私に再びかかる御質問を掛けらるること無きに至りましょう。失礼ながら貴女は聖書についてどれほど基督教を究めましたか、また天然についてどれほど科学を究めましたか、私は貴女に伺いたく存じます。(この問に対する婦人の答えは略す)。聖書を深く研究して御覽なさい、貴女は貴女の罪深きことについて恥ぢられるに至りましょう。天然を深く究めて御覽なさい、貴女は自己の無学の大なる事について恥づるに至りましょう。人類が董一本について知る所は至って僅少であります。董一本についてさえ世界の大学者が知らない事が沢山あります。聖書は自己の罪を示します、天然は我らの無学を教えます。罪と無学、他の調和はさて置いて、基督教と科学との間に既にこの調和のある事を発見されましょう。

問 あるいはそうでありましょう。私が先生に更に伺いたいことは、かの仏教徒の或る者が唱える無我の愛とということについてであります。その無我の愛と基督教で言う愛と何う違いますか。私もこの事については大分

考えてみましたが、絶対者に対する我々の見地からして二種の愛の間に何ういう差違ちがひがありますか、その事について伺いたく存じます。

答 至つて難しい御質問であります。私にかかる事については何んにも知らないと申し上げるより他に途みちはありませんまい。無我の愛は何であるか、絶対者は何であるか、それは形而上学メタフィジックスの問題であります。そうして私もそれについて多少の考えが無いではありませんが、しかしそれは実際の宗教問題ではありません。愛の何たるかは形而上学によつてこれを究めても判りません、実際にこれを行つてみて判るのであります。我らの所有物の中の最も好き物を他人に与えてみて判るのであります。絶対者云々の如ごときに至つては、これ宗教問題とは至つて縁の遠い問題であります。私共は堅かたき論城ろんじょうの上に私共の信仰を築くのではありません、幾度か繰り返されたる実験の上に立つのであります。私共は何故にキリストは神であるか、その理論はよくは知りません。彼と絶対者との関係、彼がこの世に臨みし間は三位さんみの一位が宇宙の他の方面において欠けて居りしや否や、これ私共のよく知る所ではありません。勿論もちろんこれらの事について私共に多少の意見が無いではありません。しかしながら私共はかかる問題に満足のゆく知的解釈を施しかして然る後にキリストを信ずるに至つたものではありません。私共は實際的にキリストの血によつて私共の罪を洗われましたから、それ故に彼を私共の救主として崇あがめ奉たてまつるのであります。ドーゾ宗教と形而上学とを混同なさないでください、二者は決して同一の者ではありません。その他二三のこれに類する質問ありし後、私は説教後の疲労の折なればとて、それ以上の応答を謝絶しやぜつしたれば、婦人は如何いかにも不満足らしく私の家を去られたり。

正義と人

正義は正義である。人を善くするための正義でない、正義のための正義である。正義は宇宙の道である。人がこれに服従すれば善くなる、反対すれば悪しくなる。正義が人を活かす場合がある、人を殺す場合がある。正義は必ずしも人を助けない。正義が人を滅ぼす場合が沢山ある。故に人を善く為さない助けがないとて正義を責むることはできない。正義は人に遠慮しない。正義は厳格にそれ自身を守る。人本位の正義は正義にあらず、正義本位の正義である。神すらも義によつて人を恵み給ふ、正義を離れて何事も為し給わない。然り神といえども正義を離れて何事をも為すあたわず、況して人においてをや。「なぜなら我らは真理に逆らつては何もできない。だが真理のためには(できる)」とパウロが言つた通りである(コリント後書13章8節)。この場合において「真理」は「正義」と読んで間違いない。我らは真理に順つて行ふより他に途がない。

そして近代人はこの点において全然間違つてゐる。彼らは正義をもまた人のために利用せんとする。彼らは人を幸福に為すものが正義であつて、人を助けず福いせざるものは正義でないと思ふ。彼らはただ人の為のみを思つて、神の為、また正義の為を思わない。そしてかくも「人情的」なる近代人がその正義を以て人を善くなし得るかと問うに、決して然らずである。彼らはただ「正義の残酷性」を責むるのみであつて、少しも正義を行い得ず、もちろん人を善くすることができない。実に然り、彼らに正義なるものは無いのである。彼らのいわゆる正義は婦人がその愛人のために注ぐ弱い涙たるに過ぎない。忽ちにして砕け、忽ちにして消ゆる名の

みの正義である。町人の正義である、武士の正義でない。正義は男性的である、女性的でない。人を犠牲に供してもそれ自身を完^まうせんとする正義が有るにあらざれば、人を救う事はできない、家をも国をも建つことができない。

徳川家光^{とくがわいえみつ}の乳母^{かすが}春日^{つばね}の局は基督信者ではなかったが正義の何^{なん}たるかをよく解する女であった。彼女は死に臨んで將軍に乞うて言った、「殿下^{でんか}よ、私の一子にして罪のために八丈島^{はちじょうしま}に流されている者を赦^{ゆる}すなかれ。もし彼を赦し給^{ゆる}わば天下は治まりません」と。まことに日本婦人らしき言である。天下の公法は我が子の生命^{いのち}よりも重しと言うのである。正義に悖^{もと}りて国家の幸福なしと言う。こは今日の英米流の基督信者には到底解し得ない正義の觀念である。そして春日^{かすが}の局^{つばね}の心は預言者らの心であつた。彼らは神の正義が立たんが為には、彼らの愛する国の滅亡を預言して憚^{はば}らなかつた。偉なるかな。

義の意義

浅薄なる基督信者は言う「義とは人の罪を免^{あは}れて彼を審判^{さば}く事である」と。決して然^{しか}らずである。義とは人の、神と人に対する義^{ただし}き関係である。この関係に在らずして善事^{よきこと}は何事も行われないのである。神は人の罪を赦^{ゆる}すに義によつて赦^{ゆる}し給ふ。人を恵むにもまた義によつて恵み給ふ。彼は義の神であつて、義によらずして何事も為^なし給^{たま}われない。神の僕もまたそうである。彼もまたその主^{しゅ}に似て義によらずして何事をも為^なさない。神も神の人も、唯^{ただ}は赦^{ゆる}さず、唯^{ただ}は恵まない。まことに唯^{ただ}赦^{ゆる}し唯^{ただ}恵むは最大の不義また最大の無慈悲である。義の要求する赦^{ゆる}しの条件は罪の悔改^{くわいあらた}めである。恵みの条件は信賴である。絶対的の愛と称して悔い改めざるに赦^{ゆる}し、信ぜざるに恵むは、愛にあらず、また恩恵^{めぐみ}にあらずである。キリストの愛と阿弥陀^{あみだ}の慈悲とはこの点において全く異なる。キリストに「羔^{こひつじ}の怒^{いかり}」がある、即ち罪に対する深き嫌惡^{けんお}がある。この怒りは罪人の悔改^{くわいあらた}めによつてのみ宥^{なだ}めらる。そしてその後^{あと}に完全なる赦^{ゆる}しと遠大なる恩恵が降るのである。

GOHO, A CONFUCIAN MISSIONARY

GOHO, a Confucian, was a missionary to the native of the Alisan district of Formosa. While he lived with them, by his teaching and influence, he made the practice of head-hunting, common to all Formosan natives, to cease from among his chosen tribe. One day, however, the inherited instinct reviving among them, the natives asked their teacher, permission to cut one head, and that the last. Goho remonstrated, but in vain. At last he said: "All right, you shall have it. Tomorrow about this time, a Chinaman is coming in scarlet robe, and his head you shall cut." They were glad, and eagerly waited for the morrow. At the stated hour, the Chinaman appeared, as predicted by the missionary. The native sprang upon him, cut his head, and carried it in triumph to their village. And lo! The head was no other than their beloved missionary's! The deed cut into the quick of their hearts. They now saw the evil of head-hunting. They really had their last head. Since then, alone among the Formosan natives, they of the Alisan district know no head-hunting. Goho, a Confucian missionary, by laying down his life, abolished head-hunting from among his native converts. So, and so only are all sins abolished from among mankind. Without shedding of blood, there is no remission. (Hebrews 9:22)

儒教宣教師 呉鳳

呉鳳^{ごほう}は支那^{じゆしゃ}の儒者^{ありさん}であつて台湾の阿里山土人の間に伝道した。彼がその地に在^あつた間に、その教訓と感化とによって、台湾土人共通の悪弊たる首狩^{くびかり}の習慣をして、彼が扱^あんで教えんとした蕃社^{ばんしゃ}の内に無きものたらしめた。然るに一日^{しか}彼ら^{いちじつ}の間に遺伝的^{くび}本能の復活するや、彼らは彼らの教師に迫りて一個の首^{くび}を獲る許可を得んとした。これ彼らが獲んと欲する最後の首であつて、爾後^{じご}は断じて再びこれを求めじとの事であつた。呉鳳は強く反対した、然れども聴^{しか}かれなかつた。彼は終^{つい}に言うた「可^よし、

明日の今頃、一人の支那人が朱の衣を纏うてこの地に来るであろう。汝らその首を斬るべし」と。土人は躍り飲んだ。然して今や遅しと明日が来るのを待った。その時刻に至ると教師の預言に違わず一人の支那人が現われた。土人は彼の上に飛び掛かり、その首を斬り、これを掲げてその村に凱旋した。然して見よ、彼らが斬った首は呉鳳先生の首そのものであった。悲歎悔改、彼らの骨髓に徹した。彼らは初めて首狩の悪事なるを覚った。彼らは最後に最後の首を獲た。その時以来今日に至るまで、台湾土人の内で、阿里山土人のみは首狩の悪風を知らない。儒教宣教師呉鳳はその生命を損て彼の土蕃の信者の内より首狩の罪を絶った。かくして、然り、かくしてのみすべての罪は人類の内より絶たれるのである。即ちヘブライ書九章二十二節に言えるが如し。曰く「血の濯ぎなくして救しは成らず」と。

注 もしイエスがこの実話を聞き給いしならば、さぞかし喜び給うたであろう。彼はこれを引いてパリサイの人や民の学者らを教えて言い給うたであろう「行って汝も同じようにしなさい」と（ルカ伝 10 章 37 節）。

〔編者注：呉鳳にまつわる話の史実性や正確性については疑義が在り、これまでに研究者による諸研究が存在する。〕

Now Here

いま
ここ
今此処



同日同所に於て
孫女を抱く内村先生

(森川氏苦心の作に於て後日速成)

Photo: ICU Library's collection

今日という今日

英語にウド・ハブ・ビンという詞がある。「あつたならば」との意である。こうあつたならばさぞ幸福であつたろうと言つて過去を顧み現在を歎つ心の態度である。あうあつて欲しかった、こうあつて欲しかったと言つて過去の瞑想に耽るを言う。しかしこれまた空の空であつて愚の極である。人生はあつたならばでない、あるである。WORLD HAVE BEENでない、ISである。そしてISは夢でない、瞑想でない、事実である。そして神は事実の神に在して、事実を以て我らを助け給ふ。今在るこの状態、これが自分にとり最善の状態である。この状態に善処して自分は神が自分のために備え給ひし最善に達する事ができるのである。祝福されたる現状、その辛きも苦しきも、悲しきも痛きも、すべてが天国に達する途である。ここを出発点として、現在という堅き岩の上に踏ん張りて、たとい残るは最後の一日なりといえども、神を信じて勇ましく行いて、我が前に天国の門の扉は開くのである。基督信者に不似合のものとて回顧の如きはない。「後にあるものを忘れ、前にあるものを望み」である(フィリピ書3章13節)。今日という今日が成功の生涯の首途である。

永生の解

永生は後に来るものにあらず、今既に有るものなり。永生は神の生命にして、時の関係なきものなり。即ち前に有りしものにして、今有るもの、然して未来永劫にまで有るものなり。今既に永生を有たざる者は未来に至るもこれを得るの理なし。余輩が来世の存在を唱うるは、キリストに顕われたる神の生命の不死無窮なるを信するが故なり。余輩は人に不定の来世を説いて彼に善行を勧めんとは為さず。余輩は彼に確定の永生を伝えて、彼をして今より不朽の人たらしめんと努む。永生の獲得はこれを現世において為すべし、来世においてこれを為さんとするも、蓋し為し得ざるべし。

THE MORNING COMETH

One is calling to me from Seir:

“Watchman, what of the night? Watchman, what of the night?”

The watchman said:

“The morning cometh, and also the night.” (Isaiah 21:11)

The night is here; it seems to stay; how long, we do not know; interminable, it seems.

But the morning cometh; surely it will come; as surely as heaven and earth stand, it will come.

But the morning cometh and also the night; the morning cometh only through the night. The night darker and more dismal and dreary than the one we are in now, will yet come, and *then* the morning will come. We are in the night; it will yet get darker and darker, and then the morning will come.

And we are in the night. This so-called civilization is darkness and not light; this democracy is an illusion, a will-o'-the-wisp which leads men astray into false freedom; this Christianity is a specter strolling in the garb of holiness; this social reform is social destruction, making bad worse; this increasing happiness is increasing wickedness, making the whole earth a veritable hell; this peace-movement is war-making, a hobby of idle saints and saintesses, who cry war in time of war, and peace only in time of peace.

How then will the morning come? Is the whole earth with mankind upon it going into the interminable abyss of darkness, eternal night, where “light is as darkness”? The morning will come as light came in the primal day, when God said: Let there be light (Genesis 1:3). The hoped-for morning will not come out of the night; the night will never *evolve* the morning. The morning like light will come by God’s decree and His might. It will be His creation; not man’s bringing-in.

Democracy, social reforms, peace-and mission-congresses, the League of Nations even, will never bring in the expected morning. The morning will break forth upon the night, to the utter astonishment of diplomats, politicians, social reformers, mission-managers, and all believers in human progress.

And it is the sun that calles forth the morning. No sun, no morning. The morning is no mere pervading light. It is the rising of the sun with healings in its wings.

“Which is as a bridegroom coming out of his chamber,
And rejoiceth as a strong man to run his course.
His going forth is from the end of the heaven,
And his circuit unto the ends of it;
And there is nothing hid from the heat thereof.”

The morning will come, because the sun will rise, the Sun of Righteousness. The same is no other than the Son of God, “the brightest and best of the sons of the morning,” or rather, of the East. When Jesus, the brightest and best of the Sons of the East, crucified, dead, buried, rose again on the third day, and now sitteth on the right hand of the Father Almighty, will come again, then the morning will come to this dark earth, and the night will be no more. It will be the veritable morning, birds singing, dew-crystals shining, all tears wiped away. “And there is nothing hid from the heat thereof.” The heat emanating from His face of the holy wrath will burn up all the stubbles out of the political, diplomatic, commercial, and ecclesiastical fields. Then will the whole earth be clean, and “the saints shall take the kingdom.”

Do you ridicule at the idea of this coming of the Son as Jewish and superstitious? Pray tell me then where else is the hope of the coming of the morning? When the best of the republics is the seat of the worst tyranny and the veritable den of robbers, the most unsafe country to live in; when churches are being turned to dancing halls, and sabbaths to regular picnic-days; when “Christian” women glory

in their nakedness, and men wish to have it so; when the law is openly broken, and the people rejoice in lawlessness,—do you think that out of all this terrible darkness light will somehow break forth? You who ridicule at the superstition of the believers of the Second Coming of Christ,—do you not ridicule at your own superstition in your belief in the coming of light out of darkness, of holiness out of sin, of peace out of war? And if your Evolution Theory teach you the possibility of such impossibilities, the theory is condemned by its very absurdness. Your theory ought convince you that the world as it is doomed to utter destruction; there is no hope for it; the eternal night is upon it, and the morning will never come. See with open eyes what are taking place around and within you, and tell me honestly what hope you entertain about your and world's salvation.

Do you stumble at the idea of the *sudden* appearance of the Sun of Righteousness? Then, I am afraid, you never have experienced the most sacred experience of life. Has not the Sun of Righteousness ever risen in your own soul? Are you now so sunken in the mud of the modern civilization that you are an entire stranger to the experience which was quite common with your ancestors? They would have told you, and I a heathen-born have no need of telling you; that they, your ancestors, had the experience of the sudden rising of the Sun of Righteousness in their souls, which entirely changed their aspect of life, made them new men and women,—not gradually but suddenly,—the sudden transformation of their very beings, the miracle enacted in their inmost selves. And because they had this experience, they had no difficulty about believing in the sudden appearance of the same Sun in the midst of the sin-stricken humanity, and transforming it into the kingdom of righteousness, in a moment, in the twinkling of the eye. They were not embarrassed by any theory, as you modern men are. Facts were too big for them, and too weighty; they were too earnest to stake their lives upon theories. You stumble at suddenness,

because you are easy-going theory-spinning scholar, and not fighters, grim fighters with the hard facts of life.

I for one believe in the sudden coming of the Son of Man; and in the breaking-forth of the glorious morning by His coming. The darkness of the so-called “Christian world” appalls me; but the prophets and the apostles teach me that the Sun who is also the Son is coming; and my soul, by its tiny but irrefragable experience, responds to their teaching and says Amen to its all-embracing truth. Yes, joy cometh in the morning. Darker and darker the night will grow; with the so-called progress of civilization will come the destruction of all we counted as dear and sacred. Already this civilization, the Western “Christian civilization,” made a havoc of our humble Oriental homes, stamped out our homely virtues, and made us very much like the ravagers themselves, who think it to be very philosophical to kill others that they themselves may live and prosper, to exclude other races by color-distinctions, and to claim the whole earth as their rightful possession. All this is very horrible, very horrible indeed. But what cause of fear and discouragement? *He is coming*. The morning is breaking. And joy cometh in the morning. Oh, Joy! Joy!

Christmas, 1926.



1912年(大正元年)十月
第三回札幌傳道
(三回 全巻 破形)
札幌中央 五番五十二

Photo: ICU Library's collection

罪とは何ぞや

聖書に言う所の罪とは何であるか、その事が解らずして聖書は解らない。

罪とは普通には盗むこと、殺すこと、姦淫すること、偽りの証拠を立つることと思われておる。そしてこれらが皆な罪であることは何人も疑わない。しかしながら、これらは諸々の罪(sins)であつて、罪そのもの(the sin)ではない。聖書は前者を称して違法と言ひ(ガラテヤ書三章十九節、ヘブライ書九章十五節等に「罪」と訳してあるは誤訳である)、後者を称して特に罪と言う。罪は多くではない、一つである。罪の罪があつて、その結果として多くの罪があるのである。

そしてこの罪とは何であるかと言うに、それは反逆なのである。即ち人が神に対して犯したる反逆の罪なのである。これが罪の罪であつて、すべての罪の本なのである。然して聖書が排議して止まざる罪は常にこの罪である。神がキリストに在りて除かんと欲し給うたのは人類のこの罪である。ここにすべての背徳、すべての苦痛の本源が存するのである。

アダムとエバが犯したと言う罪はこの罪である。禁制の果物を食つた事、その事は小なる罪である。神はそれがために彼らとその子孫を呪ひ給うたのではない。彼らが悪魔の教唆に従ひ、神より離れて独り立たんとし、神に対する彼らの反逆の意を表さんために、この禁を破りしが故に、彼らは神の樂園より逐われ、世の漂流人となつたのである。反逆が前であり破戒は後であつたのである。即ち罪は前であり違法は後であつたのである。

彼らは心に反逆を蓄え、これを発表せんとして、神に対して面当てにこの違法を敢えてしたのである。

かくして始祖の行為によつて神と人との親子的関係は絶えたのである。そしてこの悲しむべき絶縁を称して「人類の墮落」と言うのである。人類はこの時すべての善性を失つたと言うのではない。彼らの知能はそのまに存し、彼らの徳性もまた全く失われなかった。しかしながら彼らはこの時彼らの父なる神を失つた。神と彼らとの間に存していた最も親密なるべき関係がこの時に絶えた。彼らはこの時、使徒パウロの言う「希望なき、また世に在つて神なき者」(エフェソ書2章12節)と成つたのである。

罪、とは反逆である。そして預言者らが責めて止まざりしはこの罪である。

帰れ、背けるイスラエルよ

と(エレミヤ書3章12節)。また、

彼らの罪はいや増し、その背信(反逆)は甚だし

と(エレミヤ書5章6節)。また、

我が民は不信(反逆)に繋けられている

と(ホセア書11章7節)。また、

我れ彼らの反逆を医さん

と(ホセア書14章5節)。神と民との調和が預言者らの唯一の目的であつた。この事さえ就れば、民は救われたのである。民の「反逆を医さん」事が預言者の熱望であつたのである。

そして預言者のこの絶叫ありしに関わらず、イスラエルの民は罪の罪たるこの反逆を犯して止まなかつた。

イスラエルの子らはヤハウェの目に悪しき事をなし、バアル達に仕えた。彼らはヤハウェを、祖先の神を棄て、…他の神々に仕え

と（士師記2章11・12節）。また、

イスラエルの子らはヤハウェの目に悪しき事をなし、ヤハウェを、彼らの神を忘れ、そしてバアル達やアシュラ達に仕えた

と（士師記3章7節）。また、

エフドの死後、再びイスラエルの子らはヤハウェの目に悪しき事をなし……（即ちヤハウェに反き彼を忘れて神ならぬ己の想像に成りし偶像に仕え……）

と（士師記4章1節）。忘恩に次ぐ忘恩、反逆に次ぐ反逆、選民の歴史は神に対する反逆の歴史である。聖書が他の書と全く異なる点はここにある。即ち単に民の罪惡を責むるに止まらずして、特にその神に対する反逆を責むるにある。単に不義を矯めんとせずして、不義の根源なる反逆を医さんとするにある。預言者がしばしば言ったように、罪は実に姦淫である、人が神に対して貞操を破ることである。この罪さえ除かれんか、他のすべての罪は除かれるのである。

聖書の言う「罪」とは反逆である、故に聖書の言う「義」とは何であるかが解る。罪とは反逆であるがゆえに義とは帰順である。すべての罪は反逆より来たり、すべての徳は帰順より生ず。義とされるとは単に義と宣告されることではない、子とされることである。復たび子として神に受け容れらるることである。そしてこれに仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善等の諸徳の伴うは言うまでもない。人は神に反いてすべての不義に陥つ

たように、神に帰りてすべての徳に復するのである。聖書の示す所によれば罪も徳も神に對せずして在るものではない。神を離れて罪があり、神に帰りて徳がある。この意味において宗教は本であり道德は末である。人類は罪を犯したがゆえに神を離れたのではない、神を離れたがゆえに罪を犯すのである。同様に、徳を建てて神に帰るのではない、神に帰つて徳を建つことができるのである。パウロの言う「人は行為によつて救われるにあらず、信仰によつて救われる」とはこの事を意うのである。

罪とは神を離れることであり、義とは神に帰ることであるのが解つて、救済とは何であるかが解る。救済とは単に罪を去つて義人となることではない。かかる事はまた實際に人の為し得る事ではない。救済とは神の側より見て人を己に取り返す事である、人の側より見て返きし神に帰る事である。そして神と人との仲保者なるキリストの立場より見て、二者の調和を図る事である。然して神と人との場合においては譲るべきは神において在らずして人においてのみ存するが故に、救済とは人をして神に和らがしむる事である、人を神に對するその元始の關係に引き直す事である。預言者の言葉を以て言えば「民の反逆を医す」ことである。かくして救済とは単に苦痛を去ることではない、また単に不義を除くことではない、人を神に携還することである、神に對するその關係を正しくすることである。単に罪を去ると言い、心を清めると言い、義を慕うと言い、正を踐むと言つても救済の何たるかは解らない。起つて父に還ると言い、神と和らぐと言い、子とされると言つて、その何たるかが明白になるのである。反逆、帰順、救済、――聖書の示す所、語る所、説く所は、これである。聖書はいわゆる純道德を語らない、また抽象的真理を説かない、神と人との關係を説く。その唱うる所は道義ではない、福音である、神が人を己に携還らんとて設け給ひし救済の手段と方法である。その宣伝を伝道と稱す

るは大なる誤称である。伝道ではない、福音宣伝である、嘉信の伝達である。福音、一名これを「和らぎの言葉」と言う（コリント後書5章19節）。然してこれを宣べ伝えるのが、いわゆる伝道者の職分である。彼を伝道師と称して道徳の教師のように思うは大なる誤謬である。彼は神がキリストに在りて世を己と和らがしめ給いしその聖業を宣べ伝える者たるに過ぎない。

キリストのために切に求う、汝ら神と和らげよ

と（コリント後書5章20節）。我らが福音の宣伝者として人に告ぐる所はこれに過ぎない。人がキリストによつて神に対するその反逆（罪）を認め、悔いて彼に帰り（義とされ）、復たび元の如くに彼の子と成るに及んで（救済われて）、伝道即ち福音宣伝の目的は達せられるのである。

人類の墮落

宗教並びに哲学上の大問題なり。しかも聖書は大胆に直截ちよくせつにこの問題に断案を下す。人類の墮落は人類の不完全にあらず、また霊の理想に映えいずる肉の粗雑にあらず、また進化の途にある道德の程度にあらず。人情の存するあればとて人は罪人たるを失わず。嬰兒えいじもまた罪なき者にあらず。然しからば人類は如何いかにして墮落せしか。その墮落の原因如何いかに。これを論理的に説明するは難かたし。然れども基督教はその實際的解釈を供す。

問、旧派の基督教では人類の墮落ということ唱えるようですが、そうありますか。

答、旧派に限りません、基督教という基督教で人類をその良心の根底より救い得るものは必ずこれを唱えます。大胆に、直截ちよくせつに人類の墮落を唱え得ない基督教は常に微弱なる基督教であります。

問、人類の墮落とは短く言えば何どういう事でありますか。

答、これを聖書の言葉で言いますと、「義人なし、一人もなし」(ローマ書 3 章 10 節)、「善をなす者なし、一人だになし」(同 12 節)、「なぜなら皆な罪を犯したから、それ故に神の栄光に達せず」(同 23 節)、こういう事があります。

問、それはずいぶん過激なる言葉ではありませんか。且つまた深く考えてみますれば人類を痛く侮辱ぶじよくした言葉

ではありませんか。世に悪人は多くして善人は少なしと言うのではなくして、義人なし、善人なし、一人もあるなしと言うのでありますれば、これ厭世の極でありまして、歡喜の宗教を以て自ら任ずる基督教が人生をかくも悲観するとは私には如何しても受け取れません。

答、そうであります。もし人類の墮落が事実でありますならば、これは確かに過激の言であります。またかく唱える基督教は人類を侮辱する者であります。しかしながら墮落が事実である以上は、これは過言でも侮辱でもありません。疾病を知って疾病と告げざる医師は不親切なる医師であります。そうして基督教は人類の最も善き医師でありますから、彼は明らかにその墮落を唱えます。彼はまた、この墮落を癒すに足る充分の能力を持つておりますから、これを唱うるに係わらず、やはり歡喜の宗教であります。

問、人類の墮落が事実であるとならば止むを得ません。しかしながら、これ果して事実であるか、それが第一の問題であります。また、基督教は果してかかる事を教える宗教であるか、それが第二の問題であります。そうして世に楽家が多くのを見ましても、また基督教全体が希望歡喜の宗教であることから考えてみましても、人類の墮落と言うが如きは、これ基督教の何らかの誤解より来た教義ではありませんか。

答、ごもつともなる御推察であります。人は誰でも己れの墮落を聞いて喜びません。従つて人は容易に人類の墮落を信じません。しかしながら信じ難いこの教義を信ぜしむるのが聖書であります。偽りの宗教は偽りの預言者と同じく常に「浅く民の傷を癒し、平和でないのに『平和、平和』と言う」者であります（エレミヤ書6章14節）。人類墮落の教義は確かに神の黙示の一つであります。神に依るにあらざれば我らは我らの墮落をさええ充分に知ることのできない者であります。そうして我らの全然的墮落を示されて、我らは初めて救済

の途に就くのであります。

問、私にはドウもその事がよく判りません。聖書は実にかくも墮落したる者として人類を示しておりますか。

答、おります。人は脆い者、果無い者であるのみならず、また悪しき者であるとは聖書がその始めより終りに至るまで唱うる所であります。人類の根本的墮落について聖書が示している言葉を今、一々あなたの前に陳べることはできませんが、しかし聖書全体の精神から推してみまして、人性の墮落はその独特の教義の一つであることが判ると思います。

問、まづ聖書のどういう所に人類の墮落が最も明らかに示されていますか。

答、詩篇第五十一篇にダビデの言として、「見よ、我は邪惡の内に産まれ、罪の中に、我が母は我を孕んだ」と録されています（詩篇第51篇7節）。これ詩人の言葉であるとは言え、彼の深き実験を示したものであります。「どうして人が潔くあり得ようか、どうして女より生まれし者が義しくあり得ようか」とは古人の諺としてイスラエル人の間に伝えられた言葉であります（ヨブ記15章14節）。預言者イザヤは神の前に立つて、自己の汚穢に堪え得ずして叫んで言いました、「禍いだ、我は滅んだ。我は穢れたる唇の者なるに、穢れたる唇の民の中に住めるに、我が目は王を、万軍のヤハウェを、見てしまった」と（イザヤ書6章5節）。「心はあらゆるものより偽るものにして絶望的に病んでいる、誰がこれを知り得んや」とは預言者エレミヤの人生観であります（エレミヤ書17章9節）。主イエスの前に立てば聖ペテロでさえもイエスの足もとに伏し「我より離れたまえ、主よ。我は罪人なり」と言わざるを得ませんでした（ルカ伝5章8節）。イエスはその弟子らを教えるに当たつても「汝らは悪しき者でありながら」云々と言われまして、彼が選びし十二弟子すら

この「**悪しき者**」の階級の外に立つ者でない事を示されました（ルカ伝11章13節）。聖パウロは自己を指して「その罪人の最たる者が、この私だ」と言いました（テモテ前書1章15節）。彼はまた基督信者となる前の自身の生涯について弟子テトスに書き送って、「我らも以前は無知で、不従順で、道を外れ、もろもろの欲望と快楽の奴隷となり、敵意と妬みのうちに日を送り、忌み嫌われ、互いに憎み合っていたのである」と言いました（テトス書3章3節）。このように聖書人物の中で聖と呼ばれ、預言者として崇めらるる者が、皆な悉く罪人であり、穢れたる唇の者であつたとの事でありますれば、その他は推して知るべきであります。「聖書は全てのものを罪の下に閉じ込めた」（ガラテヤ書3章22節）とのパウロの言は聖書の充分に証明する所であります。「義人なし、一人もなし」（ローマ書3章10節）、「善をなす者なし、一人だになし」（同12節）、「なぜなら皆な罪を犯したから、それ故に神の栄光に達せず」（同23節）。聖書によりますれば、義人、善人と称し得る者は人類が出現して以来ただ一人だけ有つたとのことであります。その人は「義なるイエスキリスト」であります（ヨハネ第一書2章1節）。その他は皆な「**悪しき者**」であります（ルカ伝11章13節）、「**蝮の子ら**」であります（マタイ伝12章34節）、「滅亡へと備えられた怒の器」であります（ローマ書9章22節）。世の中に生れながらにして神の栄光を受くるに足る人ありとは聖書のどこにも示してありません。「人は新たに生まるるにあらざれば神の国を見るあたわず」（ヨハネ伝3章3節）とは総ての人について言われた言葉であります。

問、あるいは御説の通りであるかも知れません。しかしながら同じ聖書がまた、世に善人や義人があつたことを示しているではありませんか。「エノクは神と共に歩んだ」とありまして、洪水の前に既に生來の義人が

あつたことを録しているではありませんか（創世記5章24節）。また「ノアは義しき人で、その世代における完全なる人であつた」と書いてあるではありませんか（創世記6章9節）。殊にキリストが非常に小児を愛し給うた事に照らしてみましても、人類の全然墮落説を聖書によつて維持するのは非常に困難ではありませんか。

答、そうではないと思います。エノクのことは記事が余りに簡単でよく分かりません。しかしノアが完全の人でなかつたことは創世記の他の記事でよく分かります（創世記9章20節以下）。小児の罪惡の事については後でお話し致しましょう。その他、聖書にその名が録されている人物の中で、聖い、瑕なき人物としては一人もありません。「ヤハウェの聖旨に適いし王」と呼ばれしダビデは御承知の通りの大欠点の人でありました。「その人となりの溫柔なること世の中の諸々の人に優れり」と録されているモーセもまた、その憤怒のゆえに約束の地に入る名譽を剥がれた者であります。天より降り来りしイエスキリストを除くの外に一人の理想的人物をも認めない聖書は実に奇態なる書ではありませんか。しかしながらこれが聖書の聖書たる所以であります。もし聖書がそのどこかでソロモンなりイザヤなりを指して「これが完全無欠の理想的人物である」と録しておりますならば、それこそ聖書が聖書でない最もよき証拠となります。しかしながら神の聖書であります故に、かかる矛盾の記事はその中のどこにも発見することはできません。

問、聖書の言葉は御説明の通りであると致しまして、それにはそれ相応の説明がつくではありませんか。そうしてその一つは、これは神より見た人生の状態である、と言うことはできませんか。聖き神より人生を觀れば、あるいはかかる汚れたるものであるかも知れません。ちょうど私共人間の目から見た動物界の状態のような

ものでありまして、神の目より見た人類は実に憐れむべき愚かなる不完全なるものであるに相違いありません。現に先ほどあなたが引用なされたヨブ記の言葉の直ぐ後にも、

神は聖き者たちをすら信頼なさらず、諸々の天ですら神の目には潔からず。まして忌み嫌うべき穢れたる人間など、罪を水の如くに飲む人間など尚更だ。(ヨブ記15章15・16節)

と書いてありまして、神より見た人間が如何に卑しむべき者であるかが示されているではありませんか。

答、それは一理ある御説明であります。しかしながら、それで以て聖書の人生觀を説明し尽くすものではないと思います。神はもちろん我ら人間を神と同等の者とは見給いません。「父が子を憐れむ如くに、ヤハウェは己を畏るる者を憐れみ給ふ」(詩篇103篇13節)とは神が我らに対して取られる態度であります。神は我らが土塊であることを忘れ給いません。神の忿怒は我らが弱き人間であるがゆえに我らの上に宿るのではなく、神が我らについて怒り給うのは我らに何か道德的な大欠点があるからであります。我らは未だ嘗て馬や犬の罪惡について怒ったことはありません。しかし神は我らの罪惡について怒り給うのであります。墮落は品性の墮落であります、力量の不足ではありません。

問、もし神の人生觀として見ることができませんならば、これを靈なる人の人生觀と見ることはできませんか。御承知の通り人の靈には理想というものがありまして、この理想を以て見ますれば、彼自身が最も不完全なる者であります。肉は到底靈の理想に適うものではありません。下等動物より徐々に進化して来た人類が、自己を自己の理想に照らして見ましたならば、自己は実に聖書に示してあるような不完全極まる者であるに相違ありません。基督教の言う人類の墮落というのは、靈の目に映ずる肉の状態ではありませんか。

答、面白い御質問であります。多くの場合において、人類の罪惡なるものは、その肉情として理解されました。

パウロの言った「なぜなら肉の欲するところは靈に逆らい、靈は肉に逆らい、これらは互いに反抗するの
で」(ガラテヤ書5章17節)との言葉は、かかる意味において解釈されました。人間の罪惡という罪惡は、
その多くは肉慾によつて顕われるものであります故に、終には肉慾そのものが罪惡として認められるに至り
ました。しかしながら深く考えてみますれば、肉慾これ罪惡ではないことが分かります。食う事これ罪惡で
はありません。その飽食、貪食となるに及んで始めて罪惡となるのであります。飲む事これ罪惡ではありま
せん。その酔酒放蕩となるに及んで始めて罪惡となるのであります。淫慾また必ずしも罪惡ではありません。
その汚穢、姦通となるに及んで姦淫となり罪惡となるのであります。もし肉慾そのものが罪惡であるとなら
ば、人生そのものが罪惡であります。そうしてもし然りとすれば罪より免れるの途は自殺より他にありませ
ん。しかし聖書は決してかかる背理を唱えません。基督教は何であつても決して殺慾主義の宗教ではありま
せん。家庭の神聖を貴び、感謝の生涯を勧める基督教は、肉慾そのものを罪惡とは認めません。

問、肉慾そのものは罪惡でないと致しましても、人には下等動物より譲り受けた多くの情性があるではありませんか。即ち獅子の如き兇猛、狼の如き貪慾、狐の如き奸智が彼にも遺伝性として存つておるではありませんか。そうしてこれ皆な彼の靈性に逆らうものでありまして、彼の墮落なるものは実にこの動物的遺伝性の存在を言うに過ぎないではありませんか。

答、こうした情性が人にあることはよく分かつております。しかしながら、これあるが故に彼は墮落している
と言うものではありません。人の心は善と惡との競争場裡でありまして、墮落とは善が惡に負けたという事で

あります。獅子の如き兇猛はありますが、しかし人は羊の如く柔和なるべき者であります。狐の如き奸智はありますが、彼は詭計を弄さずして公明正大なるべき者であります。然るに彼は罪をして彼の主たらしめ、自ら好んで獅子の如くに、また狐の如くになりました。即ち彼は征服すべき情性に征服されました、捕虜となすべき者に生け捕られました。人類の墮落とはこういうことであります。

問、しかし人は未だ尚お悪しき情性を征服する途上にある者ではありませんか。そうして人の進化と同時に悪は段々とその勢力を減じ、彼は終にはその主人公となるべき者ではありませんか。然るに戦闘中の彼を目して既に敗北した者のように見做しますのは、彼に対して甚だ無慈悲なる措置ではありませんか。

答、實際そうでありますか。人類は神に依らずして、独り自然的に悪を征服しつつありますか。私はあなたに予め御承知おきを願います。悪とは無知のことではありません。悪とは言うまでもなく心の状態でありまして、これは知識の上達によつて除くことのできるものではありません。そうして人類に知識的の進化はあるかも知れませんが、しかし彼の靈性は、これは進化の法則の外に立つもののように思われます。その最も明白なる証拠はこれを文明と道德との関係において見ることができます。人類の歴史において芸術の最も旺かなりし時は必ずしも道念の最も盛んなる時ではありませんでした。否な、事實はそれとは正反対でありまして、罪惡が微妙精細を極めし時はイツでも文明がその高度に達した時でありました。文学復興時代と言えば大抵は道心廢頽時代であります。ギリシア、ローマの文学旺盛時代、欧州の文芸復興時代、日本国明治の文明輸入時代、これ孰れも著しき道德廢頽の時代ではありませんか。今の人はよく道德の進化を説きますが、しかし彼らは道德は實に進化すべきものであるか否かを深く究めません。道德は礼儀ではありません、また

習慣（ドイツ語の Sitten）でもありません。これらには進化はありません。しかし心の固有性なる道徳には進化はありません。これは改造さるべきものであります、進化するものではありません。この事について預言者エレミヤは言いました、

クシュ人（黑人）はその膚（はだえ）を変え得るか、豹（ひょう）はその斑紋（まだら）を変え得るか。もしこれを為し得ば悪に馴（な）れたる汝（なんぢ）も善を為し得べし

と（エレミヤ書13章23節）。基督教の言う善なるものは、これは悪が進化して終（つい）に善と成つたものではありません、また人類が努力の結果、終（つい）に到達した終局点でもありません。基督教で言う善とは神の性であります。これは人類が一度失つたものでありまして、神の特別の恩恵によって人類の中の或る者が再び得たものであります。今の人のいわゆる道徳の進化なるものは、これ人類の歴史と我々の実験とが全然否定するものであると思います。

問、しかしながら、ここで更に分らない事は人類が皆な総て悉く墮落したという事であります。もしこれが墮落でありますならば、人類の中には墮落しない者もいるはずではありませんか。然るに「義人なし、一人もなし」と言うのであれば、これは取りも直さず墮落なるものは天然性であると言うのと同じでありまして、あなたの言われる墮落なるものは、これ人類が自ら選んで受けた災いではない事を示すではありませんか。

答、これは強い御反駁（はんぱく）であります。もし全般的なことが天然なることを証明しますならば、御説の通り、人類の墮落はこれを天然性と見做すより外はありますまい。従つて墮落は墮落たらざるに至りまして、人類は墮落を以て責められざるに至るかも知れません。しかしながら全般的なこと必ずしも天然なるとは限

りません。完全に無病息災むびょうそくさいの人などは広き世界に一人もありませんが、しかし、完全なる健康は全然達し得られないものであると思う医者は、これまた広き世界に一人もありません。否いな天然たんでんそのものが決して完全なものであるありません。故に或る物が天然的であればとて、その物が完全であるとは言えません。人の靈性には事物の標準とも称すべきものがありまして、彼は万物を測るに総てこの尺度を以てします。完全の美人はありませんが、しかし彼は醜い人を美人とは呼びません。蛇へびは天然物ではありますが、彼は蛇は鳩ととの如くごとに愛すべきものであるとは信じません。全世界に義人は一人もなくとも、彼は悪人を義人とは称えません。たとまた詭辯ぎべんによつて善惡の差別を塗抹とまつせんとするも、彼の本性は欺あざむくべからずして、彼は知らず識らずのうちに善はこれを善と呼び、惡はこれを惡と呼ぶに至ります。如何どうして人類じんしよが悉く墮落したか、それは非常に難しい問題であります。しかしながら彼が墮落しておる事、その事實は誰も拒むことはできません。我々の本性がその事を示します。人類の歴史がその事を証明します。そうして聖書は神の權威を以てこの事を我々に告げ知らせるのであります。

問、人類の不完全はこれを認めると致しましても、これを墮落と称するのは酷こくではありませんか。殊ことにこれ全然の墮落と言いますのは過酷ではありませんか。人はその完全を去りましたが、しかし未だ全然墮落は致しませんと思います。彼に今なお善を追求するの心が存のこつております。彼はまた善を識別する能力ちからを失いません。またその親子間の愛情において、その朋友間の信義において、その夫妻間の深情において、その愛国心において、その公義心において、彼は多くの美德を備えております。人類の全然的墮落を唱える者は、その美的半面を看過する者でありまして、かかる者は万物の長たる人間を侮辱ぶじやくする者としか私にはどうしても

思われません。

答、あなたの人情のための御熱心 (Enthusiasm for Humanity) は感服のほかありません。人情は確かに天然の美性であります。アラビアの預言者マホメットはその弟子に告げて言いました、「汝らに相憐れむの心を与え給いし神に感謝せよ」と。「人情」「相憐れむの心」、これあればこそ、この憂き世も少しは凌ぎ易いのであります。人情絶えて後は、この世は真の地獄であります。

しかしながら少しく人情の何ものたるかを究めて御覧なさい。そのドレほど深いものであつて、ドレほど頼みになるものであるかを探つて御覧なさい。まづ第一に人情は人生の美事であるに相違ありませんが、しかし、これは人類に限つたものではありません。これを人情とは称しますものの、これ実は動物性であります。子を愛する情は馬にもあります、犬にもあります。雌雄慕い合うの情は禽にもあります、獣にもあります。同類が相群がり助け合う本能は鹿にもあります、猿にもあります。もちろん、これらの情性が禽獣にあるからとて、それが貴くないとは言いません。しかしながら人類に動物性が存つておればとて、それ故に彼は墮落していいとは言えません。最も奸悪なる強盜はその妻子に向かつては至つて優しくあるとのことでもあります。他人を欺くに最も巧みなる商人でその家族に向かつては最も懇ろな者は沢山あります。深き豊かなる人情は罪惡の毒勢を緩和するものであるに相違ありません。しかしながら人情はまた多くの場合において罪惡の被覆として用いられます。压制家が虐政を行うのも民の人情に訴えてであります。不平家が民を煽動するもの、その人情を刺激してであります。人情は貴いものであります、しかし甚だ危険なるものであります。人情は道德の所在ではありません。これは道德以外のものでありまして、道德の支配を受くべきもの

であります。人情の厚薄^{こうはく}によつて人の善惡を判ずると、その人は大いに誤ります。寧^{どう}人奸物^{かんぶつ}は人情の甚だ厚^{△△△△△△△△}い者^{△△△△△△△△}であります。そうして人情の厚薄^{こうはく}を以て善惡の差別を立てる間は、世は惡漢^{あつかん}の詐術^{さぎゆつ}より免れることはできません。

女子と小人とが讚美して止まざる人情なるものを深くその根底まで探つてみますれば、その何と頼みなき、何と薄弱なるものなるかが分かります。青年男女の戀愛の中には山をも溶かすの熱心があるように思われますが、しかし一朝その冷却するや、アルプス山頂の氷塊もこれに優つて冷たくはありません。死をも約せる戀愛が瑣細な誤解の結果よりして嫉妬^{しつと}の刃^{やいば}に終わつた例は数限りありません。戀愛は盲目であると言いますが、盲目なるのみならず、また片時的^{へんじ}であります。堇^{すみれ}の放つ香と等しく、有るかと思えば消ゆるものであります。戀愛がそうであります、愛国心もまた多くこれと異なりません。その燃え立つや、海をも煮、陸をも溶かすかと疑われます。詩歌はこれに伴い、美術はその後に従います。愛国心に励まされて懦夫^{だふ}も勇者の死を遂げます。しかし、かくも貴き愛国心もその根元^{もと}を究めてみますれば、党派心の一種たるに過ぎません。哲学者スペンサーは愛国心に定義を下して「私慾を国家大に爲したものだ」と言いました。愛国心は戀愛と等しく盲目^{めくら}であります。愛国心に駆^かられて人は自国の短所と敵国の長所とが見えなくなります。従つて自国の利益となることならば罪行も美德としてこれを迎え、敵国の利益となることならば美德も罪惡としてこれを斥^{しりぞ}けます。もし愛国心の標準^{もつ}を以て測りますならば、自国の滅亡を預言して止まざりしエレミヤは義人ではありませんでした。愛国者の目より見た使徒パウロは何の価値もない者でありました。世の多くの愛国家が光の主イエスキリストを嫌いますのも、彼れキリストにこの愛国の偏愛がないからであります。愛国心存在

の故を以て人類の墮落を否む者は愛国心をその真価以上に評価する者であります。

実に多くの場合においては人情そのものが罪惡であります。理によって歩まずして情によって動き、確信によつて決さずして感情によつて定む。人情はもちろん食欲や飲慾以上の情性であるに相違ありません。しかしながら人情は聖き靈性ではありません。人情は地より出でしものでありまして、地に属くものであります。人は墮落の底に在つて尚お彼の人情を維持することができます、少なくとも人情の幾分を保持することができます。

実にそうであります、神を知らざる者のこの世における唯一の頼みは人情であります。これが彼らをこの世に繋ぐ唯一の繩であります。彼らは先輩の人情に頼んでその弟子にならんと欲します。彼らは上官の人情に頼んで官職に就かんと致します。妻が夫において頼る所は唯その人情であります。そうして、かくも人情にのみ頼る彼らは甚だ嫉妬深き者であります。弟子たる者は師の唯一の弟子たらざれば満足しません。臣たる者は君の寵愛を己が一身にのみ収めんとて総ての手段を尽くします。姑が嫁を憎みますのは我が子の情愛を他の婦人に奪われんことを妬んであります。神を知らざるこの世は実に人情の奪い合いであります。これを取つたと言うて喜ぶ人、これを取られたと言うて泣く人、憤る人。これを得て膠質も啻ならざる情誼があるかと思えば、これを失つて怒髪冠を衝くの憤怒があります。彼らはこれを得んがために死し、これを失えば殺します。人情は疑いもなく世人唯一の宝であります。

然るにこの人情たるや、決して鉄の如き、磐の如き堅きものではありません。世人が人生の精華と見做すこの人情は砂漠の蜃気楼よりも失せ易きものであります。これは人生實在の外面を覆う薄紗に過ぎません。

触れば消ゆるとは実にこの人情であります。故に東洋の厭世詩人は歌うて言いました、「行路難し、水にあらず、山にあらず、ただ人情反覆の間にあり」と。人情にのみ頼つてこの世を渡らんとする者の憐れさは実にこの通りであります。あなたはこれでも人情あるがゆえに人類は墮落していないと言われますか。

問、そうすると、あなたは辜なき小児も罪人であると言われるのですか。

答、そうであります。赤児に罪の芽生えのあることは、その保育の任に当たる者の誰もが知る所であります。生まれたての赤児でも、望むがままに乳を与えられないとて怒ります、ある時は不満を表するために口に含まされた母の乳首を吐き出します。彼は威嚇します、強請ります。彼に罪がないではありません、彼は未だ罪を犯す能力を持たないのであります。彼のいわゆる無邪気さとは、彼の無知と無能とによるのであります。故に彼の知能が発達するに従い、彼は段々と罪を犯し始めます。狼の子は普通の子犬と少しも違いませんで、とても可愛いものであります。しかしその成長するや、直ぐに狼としての特性を顕わして血を好む獣となります。人の子も同じであります。その天使の如くに見ゆるのは、その幼稚の時だけであります。彼の本性は悪であるのであります。ただ、その発揚の機会が与えられないまでのことであります。

このように申して、私は小児を愛さないと言うのではありません。世に愛すべきものにして嬰兒の如きはありません。彼は力なき者であります、故に我らは彼を憐れみます。彼は既に悪の萌芽を備えた者であります。しかし萌芽であるが故に、それを摘み取るのは喬木を折るが如くに難くありません。彼には何やら罪に穢されざる前の原始の人に似た所があります。しかし、かかる愛らしき者なればとて罪なき者であるとは言えません。私はもちろん古代の或る神学者のように「地獄の市街は赤児の頭蓋骨で敷き詰められている」と

は言いません。しかしながら無辜の小児であればとて、聖浄無垢の者であるとは言えません。小児罪惡説は多くの老婆的慈善家を躓かせます。しかしながらこれを証明するものは基督教の聖書ばかりではありません、我々の実験も近世の心理学も、この事実を拒むことはできません。

問、然らば人は如何して墮落するに至りましたか。「彼の母は罪の中に彼を孕んだ」とのことでありますれば、彼の墮落は彼一人が招いたものではないように思われます。また、世に「義人なし、一人もなし」とありますれば、人という人にして誰れ一人として墮落に打ち勝つことのできる者はないようにも見えます。このことより見ますれば墮落とは彼が避けんとして避くることのできないものでありまして、たとい墮落の事実はあると致しまするも、それを理由に人を責めるのは無慈悲ではありませんか。

答、ごもつともな御質問であります。墮落の道筋を示さずして墮落を責めるのは無理を責めるように見えます。古代の神学はこの難問題を解釈するために始祖アダムとエバの墮落の事蹟を使いました。その説明によりますれば、人類は一致共同的の団体であるから一人の罪はこれを全体で負わなければならぬ、そしてアダムは人類の始祖であつてその代表者であるから、彼の罪は特別に人類の罪であつて人類全体が負うべきものであると。しかしながらこの説は一理あるように見えて、しかし倫理学上甚だ不完全なるものであることは聖書の言葉に照らしてみても明らかであります。ヤハウエの神は預言者エゼキエルを以て宣いました、

見よ、すべての靈魂は我がもの。父の靈魂も、子の靈魂も、我がもの。罪を犯せる靈魂は、それ自身が死ぬ。(エゼキエル書18章4節)

罪を犯せる靈魂は、それ自身が死ぬ。子は父の咎を負いはしない、父は子の咎を負いはしない。義人

の義はその本人に帰し、悪人の悪はその本人に帰す。（エゼキエル書18章20節）

明白にして欺くべからざるこの言葉に触れて、いわゆる「アダム的原罪説」なるものはその土台から崩れてしまうと思います。

それゆえ近世に到りましてドイツの有名なる神学者ユリウス・ミュラー氏は彼の名著『基督教的罪惡論』において「前世存在説」Pre-existential theory なるものを提出するに至りました。この説によりますと、人は各々この世に生を有つ前に、ある他の所に生を有つた者である、そうして彼は既にそこにおいて罪を犯した者であつて、彼がこの世に生まれたのは罪より救われる機会を与えられんが為であるとのことであります。そしてミュラー氏はこの説を維持するに当たつて多くの先哲の説を引用され、殊に英国詩人ワーズワースの前世的觀念を引照されて、前世存在が決して架空の思想でないことを辯明されました。（この事に関して最も明晰にワーズワースの思想を表わしたものは彼の作 Ode on Immortality であります）。しかしながらミュラー氏のこの説には多くの有力なる反対がありまして、氏の『罪惡論』が基督教界近世の最大著述の中に数えられるに關わらず、この説だけは未だ識者多数の中に快諾を發見するに至りません。

原罪説の説明は実に哲学上の最大問題であります。これを棄てることは至つて容易であります。しかしながら強健なる思想を以て世界第一と称される詩人ブラウニングをして、

I still, to suppose it true, for my part

See reasons and reasons; this, to begin;

"Tis the faith that launched point-blank her dart

At the head of a lie; taught Original Sin.

The Corruption of Man's Heart.

の一句を發せしめたこの教義は容易に棄てられるものではありません。実に詩人の言の如くに心の腐敗を指摘せる原罪説はすべての虚偽の首を壊つものであります。この説にしてもし倒れんか、人類の強健なる道義的觀念はその枢軸を失うに至りまして、人類の損失にしてこれに勝るものではありません。

人類に罪(guilt)の自覚があります。これは打ち消すべからざる事実であります。この自覚は何から来たか。これ彼が自身この世で犯した罪の結果であるか。しかしながら彼は何故に生れながらにして罪人なるか。ああ、これ深遠より深遠に響き渡る問題であります。私は白状致します、私にもこの事は解りません。ここに人生問題のスフィンクスがあります。これを解かなければなりません、しかしながら解き得ません。この問題に対しては、我らは堅き岩に向かつて我らの頭蓋骨を突き当てるの感が致します。

しかしながら多くの難解の問題は、その解答を与えられて、やや解釈の緒に就くものであります。罪惡問題の哲理的説明は未だ与えられません。あるいはこれは永久の未決問題として残るのかも知れません。しかしながらその實際的解釈は与えられました。これ罪を識らざる神の独り子の十字架上の受難であります。ここに人類の罪は打ち消されました。ここに贖罪の犠牲は献げられました。聖なる者の「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」の声と共に罪の赦免の途が人類のために開かれました(マタイ伝27章46節)。「この故に今やキリストイエスに在る者は罪せらるる事なし」(ローマ書8章1節)。これが罪惡問題の實際的解釈であります。そうしてこの解釈を得て後は我らは哲學的説明なきことを意に介せざるに至るのであります。あたかも疾病

を癒されて後に病人は薬剤の生理的作用の説明を問わざるに至るようなものであります。これは何もあなたの困難い御質問に対しての私の逃げ口上ではありません。無知の人類がこの難問に対して与え得る解釈としては、ただこの実際の解釈があるのみであります。この問題の場合においては私共は結果によつて原因を察するのであります。神の聖子の犠牲を要する人類の罪惡とは、皮相的にあらずして根本的なこと、局部的にあらずして全般的なることを知るのであります。

問、あなたの御精神はよく判りました。そうしてこれより後の事をあなたに御尋ね申しても無益であろうと思います。人生問題は物理問題とは違い、ある点まで達すればそこで「止まれ」の号令を受けなければならぬのかも知れません。

答、実にそうであります。人生問題の特徴はそれを解するに当たつて頭脳の明晰のみならず、また心の健全なる状態を要することにあります。罪のこと、贖罪のこと、救済のことは、これを解するための或る適当なる状態にまで心を持ち来たさるるにあらざれば解することのできるものではありません。罪に責めらるるにあらざれば罪のことは分かりません。罪の抽象的解釈ほど味の無いものはありません。罪の包圍攻撃を受け、苦悶のあまり天の一方に十字架の血路を見出し、思いがけぬその救済に与つて始めて罪のことが少し分かるのであります。

問、なお一つ伺つておきますが、何故この事を墮落と言つて腐敗と言わないのでありますか。

答、それには深い理由があります。腐敗は墮落の結果でありまして、二者は同一のものではありません。腐敗した為に墮落したわけではありません、墮落した為に腐敗したのであります。

問、そうして人類は何から墮落したのでありますか。

答、神から墮落したのであります。彼が「天の所」(エフェソ書1章3節)において神の側で神と共に持つべき地位から墮落したのであります。彼に臨みし総ての悲痛はこの墮落に原因しているのであります。罪の中の罪とは神を捨て去ることであり、盗むことも、欺くことも、殺すことも、姦淫すること、これに勝る罪ではありません。否、これらの罪は総て神を捨て去りし罪の結果として人の行為に顕われて来たものであります。従つて救済の何であるかが御分かりになりました。救済とはまづ第一に人を神に連れ還ることです。そしてキリストの十字架は神と人との間に立つて、この独特の用をなすものであります。キリストは道徳を説いて僅かに人心の改善を図り給いませんでした。彼は罪そのものを滅し給いました。即ちキリストによつて神と人との間に在った離隔は取り去られました。そうして人が再び神に還り得るに至つて罪はその根元より取り去られるに至りました。墮落は清潔を以て癒さるべきものではありません。墮落を癒すものは帰順であります。「父よ、我れ天と汝の前に罪を犯したれば汝の子と呼ばれるに足らず」との言を以て天の父の許に昇り還ることです。そうしてこの帰順を執行して後は、罪は我らの上に再び勢力無きに至ります。キリストの供し給う救済はこれより以下のものではありません、即ち罪の全滅より以下のものではありません。キリストは人を再び神の懷に連れ還つて我らの墮落を癒し給います。彼を「仲保者」又は「辯護者」(ヨハネ第一書2章1節)と称し奉るのは全くこれがためであります。

* * * * *

義人なし、一人もなし。

すべての者は罪を犯したのであり、神の栄光に欠けるのである。

聖書は全てのものを罪の下に閉じ込めた。

これは人類の実験であります。その説明は如何^{どう}あろうとも、私を始めとして私の周囲の全ての人にして、また私の知る全ての人にして、また私が聞きし又は読みし全ての人にして、この暗^{くら}き凄^{すこ}き記事に当たらない者としては一人もありません。しかしながら、この暗黒に対してこの光明があります。即ち、

神はその独^{ひと}り子を賜^{たま}うほどに世を愛し給うた。これは彼を信ずる者が皆な亡びることなく永遠の命を持つためである（ヨハネ伝3章16節）

なぜならキリストの愛が我らを強く捉えているから、我らはこう判ずる、一人が全てに代わって死んだ、故に全ては死んだのである。そして彼は全てに代わって死に給うた、それは生きている者たちがもはや自分のために生きず、彼のために、彼らに代わって死に^{よみがえ}て甦^{よみがえ}り給うた者のために、というのである（コリント後書5章14・15節）

これは基督信徒の実験であります。その説明は如何^{どう}であるとも、これパウロ、ペテロ、ヨハネを始めとして、アウグスティヌス、アンブロシウス、ベルナルを経て、ルター、ウェスレー、グラッドストンに至るまで、すべてキリストの十字架の血にその罪を洗われし者の堅き実験であります。私は今日のあなたの御質問に対して私の解答^{こた}の殊^{こと}に不完全なるを感じます。しかしながら基督教に關する多くの疑問は、これは地に在^あっては説明することのできるものではありません。これはパウロと共に「第三の天の高きにまで携^{たづ}え行かれ」て、そこに内心の目を開かれて、神に直に示されて^{えとく}会得^{えとく}し得るものであります。この黙示の大部分は

「口で言い表わせぬ言葉、人間が語つてはならぬ言葉」であります（コリント後書12章1〜4節）。私の答辯とうべんの少しく謎的なぞてきなるは全くこれがためであります。

問、 承知致しました。ナマジカの哲理的説明よりも、その正直なる御表白と御感話とが却つて私の眼を開くに足ります。

答、 そう御受け取り下されば誠に有り難く存じます。残りはまた他日に申し上げることに致しましょう。

サヨナラ

ABHORRENCE OF SELF

Job said: I abhor myself (Job 42:6). That is the sign of true repentance. Not abhorrence of the evil world; not abhorrence of the fallen humanity; not abhorrence of this and that person; but firstly and chiefly abhorrence of one's own self;— that is the only condition of acceptance in the sight of God. Self is the seat of sin, and sin is selfishness. God abhors self; and a man, in order to be one with God, must abhor himself more than all other things. May I then abhor myself and repent in dust and ashes in the beginning of the year and at all times; so may God's grace dwell in me, and I be found in the loveliness of Him who loved me and gave Himself for me.

自己の嫌悪

ヨブは言うた「我れ^{みづから}自己^{きら}を嫌ふ」と(ヨブ記 42 章 6 節)。これが^{ほんとう}真個の悔改^{くいあらため}の徴候である。罪悪の世界を嫌うことでない、墮落せる人類を嫌うことでない、此人^{この}彼人^{かの}を嫌うことでない、まづ第一に主として我れ自身を嫌うことである。これが神に^{うけいれ}受納らるるための唯一の条件である。罪の所在は自我である。罪とは他の事でない、自己中心である。故に神は何よりも自我を嫌い給ふ。そして人がもし神と合致せんと欲すれば、何よりもまづ自己を嫌わねばならぬ。願ふ、新年の初頭に当たりて私は自己を嫌い^{ちり}塵と^{はい}灰を^{かぶ}被りて悔いんことを、そして常にこの状態^あに在らんことを。かくして神の恩恵は常に私の内に宿り、嫌うべき私は、私を愛して私のために御自身を捨て給いし者の愛すべきによって^{おお}蔽われ、神が私を見給う時に私を見給わずして、私を蔽い給う私の救主を見給わんことを。

我が拯救すくいの希望

我が内を省かえりみて彼処かしこに何の善きものもない。其処そこにあるものは汚穢おわい、惡慾あくよく、邪情じゃじょう、貪婪たんらんのみである。もし我れ自らこれを取り払うにあらざれば我は神に近づくあたわずとならば、我は到底神に近づくことのできない者である。しかしながら神は我が罪がみよりも大である。彼は我の罪あるに關わらず我を救い給ふ。即ち彼は我がために我が罪を殺して、我を彼の属ものとなし給ふ。我の拯救すくいの希望は単に神の恩恵に存しておる。彼にして我を恵み給うにあらざれば我の救わるる希望は一つもない。



1923年(大正十二年)三月
(六十三歳)

Photo: ICU Library's collection

福音の活殺力

コリント後書二章十二〜十七節

大抵の人は思う「福音は人を救うためのものであつて、必ず人を活かすものである」と。まことにそうである。しかし人を活かすものであるが故に、場合によつては人を殺すものである。甚だ歎かわしき次第であるが、しかし止むを得ない次第である。蠟ろうを溶かす太陽の光線は粘土ねんどに当たるとこれを固くする。太陽が悪いのではない、これを受ける者が悪いのである。神の恩恵は名薬めいやくと同じである、その効験こうげんの著大ちやだいであるだけ、その害毒もまたそれだけ激甚げきじんである。故にパウロは言つたのである、

滅ほろぶる者たちには死より死への香においであり、救わるる者たちには生いのちより生への香においである

と（コリント後書二章16節）。同じ福音が生いのちの因いんともなり、また死の因ともなるこのことである。同じ事を老いたるシメオンは嬰兒おさなごイエスについてその母マリアに語つて言つた。

見よ、この嬰兒おさなごは横たわる、イスラエルの多くの人の顔ほろびと再起おこりのために、また言い逆らいを受ける徴しるしのために

と（ルカ伝二章34節）。イエスは多くの人の顔ほろびの基もととなつたのである。この意味において彼は人の救主ではない、その頽亡たいぼう者である。まことに悪鬼あくきは彼に面と向かつて言つた、

えああ！何だつてんだ俺らとお前が、ナザレのイエスよ、俺らを亡ぼすために来たか

と(ルカ伝4章34節)。そしてイエスは今なお多くの人を頼ほろぼしつつあるのである。

まことに福音は必ずしも人を救うためのものではない。これは神の証明である、神の何たるかを証あかしするものである。故にこれを提供されて人の運命は定まるのである。これを受けんか、その人は救われるのである。これを斥しりぞけんか、その人は頼ほろぼされるのである。まことに福音に接するのは何人にとつてもその人の危機である。頼ほろびるか興おこるか、これに対する彼の態度によつて定まるのである。

世に悪人は多い。しかし未だ福音に接したことのない人の中に極悪の人はいない。福音は写真術における現像剤の如きものであつて、人の心の念を露おもひわすものである。善人の善をも露わし、同時に悪人の悪をも露わすのである。然して福音によつて悪を露わされて、これを取り除かれずしてそのまま福音を棄すてる者は実に「禍わざわいなるかな」である。その人はこれによつて極悪の人と化するのである。非基督教国においては想像することだもできない悪人が基督教国において多く存するは全くこれがためである。恐るべき事であつて、同時にまた避くるあたわざる事である。

ここにおいて私は知るのである、私のような福音宣伝を職とする者は必ずしも人の救済を目的とする者にあらざることを。私が最も忠実に、欠くる所なく福音を宣伝するとしても、その結果として必ずしも私に聞いた者は悉ことごとく救われるとは限らないのである。否な、事実はその反対であるべきである。もし私の福音宣伝にして欠くる所なくば、その結果として多くの墮落信者を出すべきである。人の罪を露あらわし得ざるような福音は偽いつわりの福音である。もし活かすにあらざれば殺す底ていの福音でなければ、その福音はキリストの福音ではない。故に

パウロは言っているのである、

我らは神の言葉を売り物にする多くの者たちの如くにはない。そうではなく公明からの如くに、そうではなく神からの如くに、神の前で、キリストに在りて語っているのである

と（コリント後書2章17節）。「神の言葉を売り物にする」とは、そのままを説かずして、これを飾り又はこれを緩和して聴く者の望みに適するようにすることである。かく為して或いは全ての人を「救う」ことができるかもしれない。即ち彼らを教会の会員となし、「救われたり、救われたり、平安かれ、平安かれ」と称して彼らの心を宥むることができるかもしれない。しかしながら、これ神が我らに要め給う所ではない。愛の神は慈悲の神であると同時にまた正義の神である。神は我らが彼の道そのままを伝えんことを要め給ふ。ここに至つて我らは人を喜ばせんとせず、また必ずしも彼らを救わんとせず、

公明からの如くに、神からの如くに、神の前で、キリストに在りて

語らざるを得ないのである。まことに辛い職分である、しかし止むを得ないのである。神の忠実なる僕として我らは人に対してこの厳正の態度に出ざるを得ないのである。

我らはもちろん全ての人の救われんことを欲する、これまた神の心であることは聖書の明らかに示す所である（テモテ前書2章4節）。しかし神の僕としての我らは人の友としての我らと異なる。我らが聖書を手にして立つ時は人の私友でなくして神の公僕である。我らは人を飲ばせんために神の道を曲げることはできない。両刃の剣よりも鋭きこの道は人を活かしもし、また殺しもある。意志の自由を賦与されたる人はこの危機に際して殺されざるよう努むべきである。しかしこの時に際して彼が如何に振る舞うかは、我らはもちろん、神と

いえども干渉することのできない事である。人の最大の榮譽はその意志の自由においてある。彼が天国に昇り得るの特権に伴つて彼が地獄に墮ちるの危険がある。すべての善事にその反対の悪事が伴う。然して福音は恩恵と共にその中に呪詛を蔵すものである。

然れば人よ、心して福音を聴けよ。古談を聴くの心を以て濫りにこれに來るなかれ。輕率にこれを聴き、耐え得ずしてこれを棄て、深き墮落の淵に沈みし多くの人に鑑みよ。福音を聴いて活きよ。これを棄て、その殺す所となるなかれ。

聖潔と聖別と聖化

聖潔きよめはその根本の意味において聖別せいべつである、この世より別わかたれて神の聖きよき御用に供せらるる事である。この事を確然はつきりと心に留めずして聖書が教うる聖潔の意味が判わからない。「きよめ」はまづ潔きよめられて、即ち諸すなわの汚穢けがれを洗われ、完全まったき者となつて神の有ものとなる事ではない、まづ神の属ものと認められて、その必然の結果として神の聖意みこころのままに潔きよき者と成る事である。この順序たるや小事たるように見えて実は大事である。聖潔を聖別と見ずして実際に潔きよめらるる事もないのである。

神はまづ第一に我らを召し給ふ。然しかして我らは大胆に罪の身このままにて彼の御許みもとへと行くのである。我らはそのとき身の汚穢けがれのゆえに躊躇ちゆうちゆうしないのである。我らはただ言うのである、「貴神あなたが召まねき給うが故に、その御召みよきに應じて行きます」と。これが聖別の第一歩であつて、信仰しんぎやう的てきにも道德どくどく的てきにも革命かくめい的てきの第一歩である。この決心けんしんを敢行かんこうした時に我は既に潔きよめられたりと言つて差支さしかえないのである。もちろん自己おのれに顧かえりみて多くの汚穢けがれを見ぬわけではない、然しかれどもこの場合に神は我らに自己かえりを顧かえりみることを要求し給わないのである。神は繰返し繰返し高調こうてうして宣のへ給うのである、「我を見よ、我を見よ」と。然しかして我らは神を仰あおぎ瞻みるだけで、即ち神を見つめるだけで、彼の属ものとして受けられ神の子として取り扱われるのである。そのとき我らは自己かえりに顧かえりみて罪が存のこるや否いなやを知る必要は少しもないのである、神の奉仕ほうしに入つたのである（現代人のいわゆる社会奉仕ではない）。然しかしてそれだけで聖別せいべつされ、即ち潔きよめられたのである。

ただ仰瞻^{あおぞみ}る事によつて受けられると言う、それには深い理由があるのである。神は罪を見逃^{みのが}し給う神でない、彼は何物よりも罪を憎み給ふ。故に彼はその独子^{ひとりご}を罪の肉の状^{かたち}となして罪のために遣^{つか}わし、その肉において罪を罰し給うたのである（ローマ書8章3節）。然^{しか}して神は我らにこの聖子^{みこ}を仰瞻^{あおぞみ}るべく命じ給うのである。神は己が義を彼（聖子）において現わし給ひ、聖子^{みこ}を仰ぐ者を子として受け納れ給うのである。故に神の側^{がわ}として罪人を子として受け納れたからとて少しも不義はないのである。神は世の罪を既にその聖子の肉体において罰し給うたのである。然^{しか}して人は何人^{なんびと}も聖子^{みこ}キリストがその身に受け給ひし患苦^{なやみ}を自分が当然受くべき刑罰と信じ、その信仰を以て神に近づけば、神は喜んでその信仰だけで罪なき者として我らを受けて下さるのである。実はこれだけで聖潔^{きよめ}も救拯^{すくい}も完成^{まつちう}されたのである。信者はどれほど潔^{きよ}められてもキリスト以上に潔められることはできない。イエスは立てられて我らの義^ぎまた聖^{せい}また贖^{しよく}となり給えりである（コリント前書1章30節）。我らの最終^{おわり}の審判^{さばき}において神の前に立つとき、我らはイエスが我がために我に代わつて成就^{なまし}げ給ひし以上の聖潔を差し出すことができない。イエスの義^{よみ}即ち我が義である。今日そうである、明日そうである、永遠の将来においてそうである。その意味において信者の義と聖とに上下優劣の差別はない。今日信者に成つたばかりの人の聖も、使徒ヨハネやパウロの聖も、その間に何の差別もないのである。信者は總て^{すべし}尽くイエスの義と聖とを以て神の前に立つのである。この意味において信者はイエスを仰^{あお}ぎ瞻^{ぞみ}たその瞬間に完全の聖徒となつたのである。

しかしながら聖徒として認められる事と聖徒と成る事（聖徒となして戴く事）との間に確然たる区別がある。然^{しか}して聖徒として神に認められて、その必然的結果として聖徒と成らざるを得ないのである。第一に我らはイ

エスを仰ぎ瞻^{あおみ}て終^{つい}にその同じ像^{かたち}に化^{かわ}るのである（コリント後書3章18節）。第二に我々がイエスを仰ぎ瞻^{あおみ}る時に神はその聖霊を我らに遣^{おく}り給うて直ちに聖化を始め給うのである（ガラテヤ書3章2節参考）。かくて我らの代人となつて神に罰せられ給ひしイエスを仰ぎ瞻^{あおみ}て自づから彼の像^{かたち}に化せられるのである。即ちまづ聖別されて神の奉仕に入り、然る後^{しか}に聖徒に相応^{ふさわ}しき者と成るのである。

これ故に注意すべきは聖別と聖潔との前後の区別を辨^わえることである。聖別は原因であつて、聖潔は結果である。まづ信じて救われるのである、救われて信ずるのではない。信仰は信者の常^{つね}時的態度である。彼は不信者に倣^{なら}つて内省^{ないせい}に耽^{ふけ}つてはならない。我が聖潔^{きよめ}の程度如何^{いかん}と己^{かえり}に省^{かえり}みるその時に彼の聖化は止まるのである。仰ぐのである、上を仰ぎ瞻^{あおみ}るのである。潔^{きよ}められつつあるや否やについて苦慮することなく、ただひたすらに仰ぎ瞻^{あおみ}るのである。そうすれば自づと潔まるのである。

内省^{ないせい}、これは信仰の禁物である。内を看^みるのではない、上を瞻^みるのである。そうすれば知らず識^しらずの間に潔まるのである。信仰を離れて高き品性^{きんせい}の人と成らんと欲^{ほつ}するのが現代人の陥^おりし最大の誤謬^ごである。これ太陽に牽^ひかれずして回^{まわ}転せんとする地球と同じである。また信仰を等閑^{なつおろ}にして聖霊の恩賜^{おんし}に与^{あづか}らんとするのが多くのバイブル信者の陥^おる誤謬^ごである。聖霊は信仰の報賞^{むくい}として賜^{たま}はるものである。信仰が冷えた時に聖霊降臨は止まるのである。基督教は信仰本位の宗教である。

聖善の勝利

イエス対宗教家

夜明け頃イエスがまた聖殿^{みや}に入ったところ、民は皆な彼に來った。彼は座つて彼らを教えた。すると律法学者とパリサイの人が姦淫^{かんいん}で捕らえられた婦人を引き連れて來た。そして彼女を真中^{まんなか}に立たせて言つた、「師よ、この婦人は姦淫^{かんいん}をしている現場で捕らえられたのです。律法の中でモーセは我らに命じております、かかる者を石撃^{いしうち}ちにせよと。それであなたは何と言われますか」と。こう言つたのは、彼を試みて訴えることを得んためである。イエスは下に屈^{かが}んで指で地に画^{えが}きはじめた。しかし彼に問ひ続けたため、身を起こして彼らに言つた、「あなたの方の内^{うち}で罪なき者がまづ彼女に石を投げつけなさい」と。そしてまた下に屈^{かが}んで地に画^{えが}きはじめた。これを聞くと、彼らは年長者から始まつて一人また一人と去つて行き、イエス一人だけが残された。そして婦人は真中に居続けた。イエスは起ち上がつて彼女に言つた、「婦人よ、彼らはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかつたのか」と。彼女は言つた、「誰もいません、主よ」と。イエスは彼女に言つた、「私もあなたを罪に定めない。お行きなさい、今からはもう罪を犯さぬように」と(ヨハネ伝8章2〜11節)

これは如何^{どう}見ても一幅の画^がである。しかも画家の想像に成りたる画でない。事實を示さるるにあらざれば如何なる画家といえども、かくの如き名画^{めいが}を画^{えが}くことはできない。その趣向が全然超人的である。「未だかくの

如くに語りし人なし」である（ヨハネ伝7章46節）。ここにイエスの為人（ひととなり）が明らかに画き出されてある。イエスはかくの如き人であつたと言つて、これを読む誰もが驚き、且つ嘆賞せざるを得ない。新約聖書は多数の小福音書より成る福音書であるが、この一編の如き、これを全福音の縮写（しゆくわ）として見ることが出来る。もしこの編だけが存つていたとしても、イエスの感化は永久に消えない。これを基礎として我が信仰をその上に築くことができる。

注意を引かるるは学者とパリサイの人の態度である。彼らは宗教専門家であつたが、その心の冷淡残忍なるは驚くに堪えたりである。彼らは罪を犯せる婦人を見て彼女に対し何の同情をも起こさなかつた。然らば彼女の犯した罪を憎んだかと言ふに、そうでもなかつた。彼らの眼中（まなこ）に罪なし罪人なし、ただ教敵あるのみであつた。彼らは懺弱（かよわ）き罪の婦人を捕らえて彼らの教敵イエスを責むるの道具に供した。そのためには彼女を群衆の中に引き出して曝（さら）し者にするという残忍を敢えてした。無情無慈悲！しかし宗教専門家の宗教はしばしばこまで墮落するのである。彼らは聖書に明るい、その解釈は正統派（せいとうは）的である、然れども罪人に対して如何に無慈悲なるよ。彼らの宗教は聖書を引いて自己を義として教敵を斃（たお）すためのものである。あたかも我が国の教育家が教育勅語を引いて同僚を責め、その地位を奪つて快しとするの類いである。

かくの如き人（ごと）らにかくの如き問題（ごと）を提出されてイエスは答ふるに言葉がなかつた。現行犯の姦淫罪（さへんざい）を審判（さはん）けと言うのであつた。イエスの氣質に合わない問題であつた。もし犯人を救えと言うのであつたならばイエスは喜んでこれに応じたであらう。然れども厭（いと）な人（ひと）らによつて提出された厭な問題に対し、イエスは沈黙より他に取るべき途（みち）がなかつた。殊（こと）にまた、他人の事とは言へ、姦淫は恥づべき事、公（おおやけ）にすべき事でない。「およそ事

包み「すべてを忍び」と言うは殊に姦淫の罪について言う教えである（コリント前書13章7節）。イエスがこの罪を面前に曝け出されて、一種の羞恥を感じ給うたのは当然である。故に彼が身を屈めて地に画き給うたとは実に彼らしくある。多くの註解者はイエスは殊更に十誡の一つなる「汝姦淫するなかれ」を書き給うたのであると言うが、それは甚だ疑わしくある。恥づかしき問題を持ち出されて手持ち無沙汰に苦しむという状態である。故に何か手に委かして画き給うたと見るのが本当であると思われる。当惑の余り、事の成り行きを見給うたのである。

然るに宗教専門家らは更に質問を以てイエスに迫り、彼をして何か一言答えざるを得ざらしめた。ここにおいてか彼は止むを得ず身を起こして、ただ一言彼らに言い給うた、「あなた方の内で罪なき者がまづ彼女に石を投げつけなさい」と。イエスはここに学者とパリサイの人を辱めんためにこの言を発し給うたのでないと私は信ずる。彼は何人に対しても悪意を懷かなかった。彼の教敵に対しても好意のほか何も表すべきものがなかった。かくの如く言い給うたのは、この場合において彼が何人に対しても発し得る唯の一言であつた。無邪気なるイエスはこの場合にこれより他に言うべき言葉を持ち給わなかつた。

然るに無邪気なる人が発したこの無邪気なる一言が驚異をなしたのである。清潔は清潔を喚起す。イエスのこの言に接して、さすがのユダヤの宗教専門家もその本心に立ち帰つたのである。人は人を裁き得る者にあらざ、人という人は神の前にはすべて罪の人である、罪人能く罪人を裁き得べけんやと、こう思うのが正気である、本心である。故に宗教家らは一人去り二人去つて、終に群衆は一人残らずその影を隠した。残るはイエスと罪を訴えられし可憐の婦人。神の子の前に群衆全部が正気真剣の人となつて、ここに神聖なる場面は現出さ

れたのである。

注 日本訳聖書には旧訳、改正訳共に「良心に責められ」とあるが、これは米国改正訳と同様に取り除くを可とする。これなき方が却つて意味を深くする。必ずしも良心に責められてではない、自己の誤謬に氣付いてである。イエスはパリサイの人といえども彼らを辱めることを好み給わなかつた。この場合においても御自身の聖善性を以て彼らの心の内に眠りし善性を喚起し給うたのであると思ふ。かくあつてこそ彼はすべての人の救主であると思ふ。

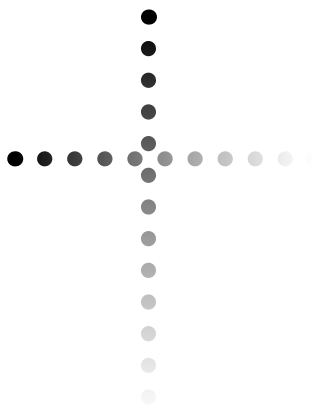
群衆は悉く散じて残りしはイエスと婦人とただ二人。ヤコブの井の傍らにおいて彼がサマリアの女と相對して在つたのと同じである。イエスは如何にこの汚れし婦人を扱い給うたであらうか、これ何人も知らんと欲する所である。彼は諄々として彼女の不心得を論したのであらうか、彼女に「清潔」を説き給うたであらうか。あるいはまた厳しく彼女を詰責し給うたであらうか。人なる教師はかくの如くに彼女を扱つたであらう。然れどもイエスにはイエスの途があつた。

イエスは彼女に言つた、「**私もあなたを罪に定めない。お行きなさい、今からはもう罪を犯さぬように**」

神なる教師にあらざれば発し得ざる言である。その意味は解するに余りに明白にして、余りに深遠である。ここに神と人類との新關係が表示された。ここに大改革が世界に臨んだ。宗教倫理が新らしき基礎の上に置かれた。学者とパリサイの人らはイエスを試みんとてこの婦人を引き來りて、彼より大真理を引き出したのである。即ち**神はもはや人を罪に定め給わない**。人類の罪は既に神の面前より取り除かれた。今より後、もし人が罪

の故に亡ぶるならば、それは自ら罪を忤んで亡ぶるのであつて、神が罰し給うからでない。神は既にその聖子^{みこ}を十字架に釘^つけて人類の罪は充分にこれを罰し給うた。罰は既に了^{おわ}つたのである。今より後はただ赦^{ゆる}しと恩恵とあるのみである。「私もあなたを罪に定めない」と。ああイエス様、私はその御言葉を聞いて安心します。貴神^{あなた}が私を罪に定め給わないと聞いて、何人^{なんびと}も私を罪に定め得ないのであります。貴神が私を罪に定め給わない以上、悪魔はもちろん、教会の法王も監督も執事も牧師も宣教師も私を罪に定むる事はできません。そして貴神^{あなた}が裁き給わない以上、私も人を裁いてはなりません。貴神は私の如^{ごと}き者に最も善く適合する救主であり給います。感謝であります。ローマ書8章33節以下。

聖句索引
編集後記



115,860-863,874-877,1061 1:21-24 なぜなら彼らは神を知っていながら神として
 崇めず、感謝もせず、却って己が理屈の中で空虚になり、その愚かな心は暗くなった
 からである… 180 2:3 人よ、汝は神の裁きから逃れられると考えているのか 140
 2:7 760 2:12 実に律法なくして罪を犯した者は皆な律法なくして亡び、律法に在
 って罪を犯した者は皆な律法によって裁かれる 30 3:1-2 879 3:3-5 断じて然
 らず、神を真実とし、全人類を虚偽人とせよ 880 3:6-8 881 3:9 既に告発した如
 くユダヤ人もギリシア人もすべて罪の下に在るからである 882 3:10-18 義人なし
 一人もなし…神への恐れその目の前になし 812,883 3:10 義人なし、一人もなし…
 553,789,792,883,885 3:11 886 3:12 皆曲がりて一斉に腐れたり。善を行う者なし、
 一人だになし 789,792,888 3:13 彼らの喉は開けたる墓… 890 3:14 彼らの口は呪
 いと苦きとにて満ち… 890 3:15 その足は血を流さんとして疾し 890 3:16 破壊と
 悲惨とがその道々に遺る 890 3:17 平和の道を彼らは知らざりき 890 3:18 神への
 恐れその目の前になし 892 3:19 894-903 3:20 なぜなら実に、律法の行為からは
 如何なる肉も彼の前に義とされないのである。なぜなら律法によつては罪の認識が(生
 ずるのみであるから) 894-903 3:21 然れども今、律法を離れて神の義は照明された
 (顕わされた) 876,904-911 3:22 この神の義はイエスキリストの信仰を通して、信ず
 る全ての者へと。なぜなら何の区別もないからである 876,911-918 3:23 なぜなら皆
 な罪を犯したから、それ故に神の栄光に達せず 789,792,919-926,1061,1065 3:24 常
 に義とされつつ、賛賜として 919-926,1061,1066 3:25-26 このキリストを神は有め
 の祭物として立て給うた…即ち自身義たらんため、且つイエスの信仰からの者を義と
 せんために 244,819,927-935,1066 3:27 935,1066 3:28 それ故に我らはこう考える、
 人の義とせらるるは信仰による、律法の行いによらず 577,1066 4:1-5 なぜなら聖書
 は何と言っているか「アブラハムは神を信じた、そしてそれが彼にとって義に数えられ
 た」 946-950 4:17 死人を生かし存在せぬものを存在するものとして呼び出す神 951
 4:18 望みに反して望みを信じ、多くの国人の父となった 951 4:21-22 951 4:24
 951 4:25 イエスは我らの義認のために甦らされた 133 5:1 952 5:2 953 5:3-
 5 のみならず患難にも欣喜んでいる。患難は忍耐を作り出すと知っているからであ
 る、そして忍耐は練達を、練達は希望を。そして希望は恥を来らせない 955-961 5:6-
 8 実にキリストはまだ我らが力無き時に、まだ当時不信心の者らのために…我らがま
 だ罪人でありし時にキリストは我らのために死んでくれたのである 480,817,962,1062
 5:9-11 963-964 6:14 汝らは律法の下に在るのではなく、恩恵の下に在るのだから
 965 6:23 罪の報酬は死 318,761,785 7:1-4 966-968 7:5 968 7:6 しかし今や我
 らは律法から無効にされた、我らが縛られていたものに死して。その結果、我らは霊の

15:5 汝らは我を離れては何も為し得ず 555 16:9-10 罪についてとは、彼らが我を信ぜざるが故に。義についてとは、父の許へ^{もと}と我が行くが故に 838 16:33 この世で汝らは患難^{なやみ}を持つ。だが勇気を出せ、我は既に世に勝てり 818 17:3 これこそが永生なり、即ち… 99,764 18:8 326 18:38 (ピラトは問うて言った、)「真理とは何か」 93 19:10-11 汝は我に対して何の権も持たぬ、もし上より汝に与えられたのでなければ 334,485 19:12 334 19:26-27 女よ、見よ汝の息子が…見よ汝の母が 339,490,685 19:30 遂げ^とられた 339,490 19:34-35 槍で脇^{わき}を刺した。すると直ぐに血と水とがでてきた 340,348 20:29 汝は我を見たので信じた。幸いである、見ずして信ずる者は 352 [20:31 567]

使徒行伝 Actes des Apôtres Πράξεις Αποστόλων

1:21-22 464 1:26 464 2:23 神の定めた御計画と予知^{かな}に適^はいて(彼を引き渡し)、汝らは無法者たちの手で彼を磔^{はりつけ}にし、殺してしまった 493,846 2:37 兄弟の方々、我らは何を為すべきか 493 2:44-45 信者に成りし者は皆一緒に集まってすべてを共有し、財産と持ち物を売っては必要に応じてそれを皆に分け合った 615 3:21 万物の復興 1022 4:12 このほか何人^{なんびと}におけるも救いなし And there is salvation in no one else, for there is no other name under heaven given among men, by which we must be saved 504,763 7:3 汝の土地から出でよ、また汝の親族からも、そして我れが汝に示さん土地へと行け 446 13:6-7 579 14:15 君たち、なぜこんな事をするのか。我らも汝らと同情の者、人間だ 112,468,501 16:25 (パウロとシラスは)祈りながら神の讃美を歌っていた 956 16:30 (ピリピの獄吏は問うて言った、)「我れ救われんために何を為すべきか」 93 16:31 主イエスを信ぜよ、然らば救われん、汝も汝の家族も 115 16:37-40 ところがパウロは彼ら(警官ら)に言った、「長官たちは、ローマ市民たる我らを裁判もせず公然と鞭打って獄に放り込んでおきながら… 851 17:27 1063 17:28 彼の内に我らは生き、動き、存在している 759 20:33-34 この手が、私の必要の為に、我と共に居る者の為に働いたのだ 849 23:6 853

パウロ書簡 Les Épîtres de saint Paul

ローマ書 Épître aux Romains Πρὸς Ῥωμαίους

1:1 Paul, a servant of Jesus Christ イエスキリストの僕^{しもべ}パウロ 234,461 1:2 910 1:7 1030 1:16 我は福音を恥とせず…こは神の力であるから 860-874 1:17 なぜなら神の義はそれにおいて顕^{あら}われているからである…「義人は信仰から生きん」

雅歌 Cantique des Cantiques שִׁיר הַשִּׁירִים : 引用無し

哀歌 Lamentations אִיכָה

3:22-28 ヤハウェの仁愛は絶えることなく、その憐憫は尽きることなし。……人若き時に軛を負うは善し。主がこれを負わせ給うなれば独り坐して黙すべし 449

伝道の手記 (コーヘレト) Ecclésiaste(Qohélet) קהלת

1:9 日の下には新しきものあらざるなり 17 9:10 すべて汝の手に堪うる事は力を尽くしてこれを為すべし 144,201 11:1 汝のパンを水の上に播け、多くの日の後に再びこれを見出すであろうから 532

エステル記 Esther אֶסְתֵּר : 引用無し

ダニエル書 Daniel דָּנִיֵּאל

2:31-36 王よ、汝は一つの大きいなる像を見ました。…これがその夢です 750

エズラ記 Esdras עֶזְרָא : 引用無し

ネヘミヤ記 Néhémie נְחֵמְיָה : 引用無し

歴代誌 (上巻下巻) I-II Chronicles דְּבָרֵי הַיָּמִים : 引用無し

新約聖書 NOUVEAU TESTAMENT Καινή Διαθήκη

福音書 Les Évangiles

マルコ伝福音書 Évangile selon Marc Κατὰ Μάρκον Εὐαγγέλιον

1:22 34 3:5 するとイエスは怒りを含んで人々を見回し 646 5:34 あなたの信仰があなたを救った 578 6:41 340 8:33 引込め、我が後ろに、悪魔。汝は神のことを思わず、人のことを思っている 646 8:34 もし誰か我が後ろに従わんと欲するなら、己れを否定し、己が十字架を負い、然して我と同行せよ 723,819 8:36 人もし全世界を儲けて己が生命を没収するれば何の益あらんや 687 8:38 862 9:19 おお、不信の族よ 646 9:43 もし汝の手が汝を躓かさば、それを断りて棄てよ 725 9:49 すべての人は火を以て塩つけらる 238-243 9:50 塩は善きものなり。然れど塩もしその味を失わば、何をもてこれに味を付けんや。汝ら自身に塩を有つべし、然して相互に睦み和らぐべし 237,238-243 10:26-30 それでは誰が救われ得るのですか 870 10:45 人の子は仕えられん為に来たのではない、そうではなく仕えん為に、そして多くの人の贖い金として己が生命を与えん為である 481 12:40 1029 14:5 この香

聖句索引

本書において明示的に引用されている聖句の索引。章節番号のみの引用の場合は除いている。聖句の訳文は諸言語訳に基づいて編者が重訳したものである。

旧約聖書 ANCIEN TESTAMENT תנ"ך

律法 Torah תורה

創世記 Genèse בראשית

1:3 Let there be light (光あれ) 775 1:11 神は言った『地は芽生えしめよ、緑を、種くさまく草を、果を結ぶ木を、その種類しゅるいに従いて』530 1:27 921 3:17-18 1020 3:24 429 5:24 612,793 6:9 793 6:17 496 7:19-20 177 13:8-9 アブラハムはロトに言った、『どうか争あらそいがないようにしよう、我と汝との間で、また我が牧者たちと汝の牧者たちの間で。我らは親族の人間なのだから… 511 13:10-11 512 13:12 512 15:6 アブラハムはヤハウェを信じた、(ヤハウェは)これを彼の義と数え給うた 946 18:19 515 19:9 520 19:23-27 507 35:23-26 196 37:2 197 37:11 198 37:31-32 彼らはヨセフころもの衣を拾い上げ、一頭おの牡山羊ぎを屠ほふつて、その衣を血ぬに濡らした。… 199 39:2 200 39:5 200 39:6 201 39:9 いったい、どうしてそのような大なる悪事を働いて、神に対して罪を犯し得ようか 200,202 39:23 200 40:8 (夢の)解き明かしは神に因よるではありませんか。どうぞ私に話してください 205 41:37 206 41:39-40 206 41:46 207 42:6 208 42:21 209 42:36-38 お前たちは私から子を奪った。ヨセフは居なくなり……お前たちの行く道中で、もし災わざわいが彼に及べば、お前たちは我が白髪はくはつを悲歎よのうちに冥府よみに下らせることになるのだ 210 43:28 208 43:30-31 209 44:14 208 45:1-15 私はヨセフ、あなた達の兄弟、あなた達がエジプトに売った者。だが今は私をここに売った事について自分を責めるな、また自分を苦しめるな。命いのちを救うために神が私をあなた達より先つかに遣わしたのだ……それゆえ私をここに遣わしたのはあなた達ではない、神である 211 45:28 212

出エジプト記 Exode שמות

3:5 聖きよき処ところ 759 3:6 196 3:13-15 我は有りて在る者 670 13:2 我に聖別せいべつせよ 262 13:21 406 15:2 ヤハこそ我が力、我が歌 450 16:18 多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足らぬことなく 615 20:3 我が面かおの前に汝なんじに他の神々あるべからず 657,661 20:4 汝自己おのれのために何の偶像をも造るべからず 657,665 20:7 汝の神ヤハウェの名を妄みだりに上おぼぐべからず 657,668 20:8-10 安息日を憶えるべし、

編集後記

- 1 出版の経緯
- 2 編集方針と詳細
- 3 底本
- 4 文献

1 出版の経緯

本書の企画は編者が二〇〇五年前後（二十代半ば頃）に内村の著作を読んだことが契機となっている。その後内村の文章の重要なものを選出し選集として出版することを思いつき、このたび一書にして刊行するに際して更に精選して纏め上げたものが本選集である。

2 編集方針と詳細

【基本方針】

原文を尊重し、改変を抑えつつ現代の人にとって読み易くなるよう文章を更新した。言葉遣いの更新以外の大きな更新点としては、聖書からの引用句の全面的な更新である。

【編集詳細】

- ▼漢文訓読体の文…意味が分かりづらいものは改めた。
- ▼人称辞…「我」「汝」は残した。文にに応じて「余」↓「私」、

「吾人」↓「我々」と変更。

▼漢字の字体…基本的には新字体を用いているが、語源も考慮して旧字体を残したものもある。聖、冬、教、器、辨わかまえる、巖いわお（岩も使用されている）等

▼仮名遣い…基本的には現代仮名遣いに直しているが、文脈や語勢も考慮して初出の仮名遣いも残している。「思ふ」「給ふ」「恥づ」「まづ」「救わるる」等

▼送り仮名…基本的には現代通用のものに直しているが、そのまま残しているものもある。「現いまわれる」「皆みなな」

▼ルビ…漢字には原文よりも多めにルビを付してある。

▼圈点と太字…内村の圈点の使い方として、良い意味の強調には○の圈点、悪い意味の強調には△の圈点という概ねの法則も読み取れるが、全体として使用法が一貫している訳ではない。編者としては本書全体において圈点の使い方をできるだけ統一した、特に同一文章内において。（例…

良い強調は丸丸、悪い強調は三角△、単なる強調はゴマ、

▼単位…現代通用のものに換算した所もある。「四十六哩」↓「七三キロメートル」

▼聖句訳…聖書からの引用句は後記の諸文献に学んで全面的に改めた（重訳した）。それに付随して内村の地の文に

対しても調整を施した。日本語訳文は原典に忠実なる訳を心がけた。手法としては、インターリニアの Bible Hub と先人による現代語諸訳（Osity 訳、Jerusalem 訳、RSV 訳、塚本訳、田川訳、新共同訳、口語訳、岩波訳）に基づいて訳文を定めた。聖書原典についての最終的な根拠は新約 Nestle-27 版、旧約 BHS を典拠とした。

▼聖句の章節番号…表記の統一を図り適宜追加もした。
（例…羅馬書三章一節→ローマ書三章一節）

▼編者による追記箇所…編者が明示的に追記をした箇所には〔 〕（亀甲括弧^{キッコウ}）を付した。

3 底本

①聖書之研究 1 号〜357 号 1900 年〜1930 年〔復刻版〕
（聖書之研究復刻版刊行会 1969-1973）

②THE JAPAN CHRISTIAN INTELLIGENCER（ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー社 1926-1928）

③無教会第五号（聖書研究社 1901）

④櫟林集^{りよくりんしゅう}第一輯（聖書研究社 1909）

⑤商賣成功の秘訣（大阪永廣堂本店 1926）

⑥後世への最大遺物（警醒社書店 1925）

⑦後世への最大遺物（京都便利堂書店 1897）1970 復刻

⑧後世への最大遺物（東京獨立雜誌社 1899）

⑨デンマルク國の話（聖書研究社 1913）

⑩羅馬書の研究（古我合名會社 1924）

▼本書の大半の文章は①を底本としている。

▼「ローマ書の研究」…『聖書之研究』誌所載の文章①を底文とし、単行本⑩に照らして校定し、句読点の追加や修正を施した。（単行本化の際に句読点の追加や若干の語句の修正が施されている）。講演録の後に載せられた「講演約説」（内村自筆の講演原稿）は割愛した。

▼「後世への最大遺物」…内村が手を加えた最終版⑥を底文とし、単行本としての初版本⑦や改版⑧の文を参照して部分的に改めた。編者が若干手を加えた箇所もある。
▼「デンマーク國の話」…⑨を底文とし、初出の文章①（聖書之研究 136 号）に照らして手を加えた。

▼「ボーイズ・ビー・アンビシャス」…底文は①であるが、口述筆記の原文において読みづらい所（一文が長すぎる等）がある為、他と比べて最も多く文章を改めている（文節を区切る、語順や表現を換える等）。

▼②、③、④、⑤、⑦は今井館所蔵（在東京都目黒区中根）

4 文献

【新約関連】(活用度の高い順に配列)

Bible Hub (<https://biblehub.com>); Interlinear, Parsing, Definition, Parallel etc.

La Bible Osty (Éditions du Seuil, 1973)

La Bible de Jérusalem (Éditions du Cerf, 2009)

The Holy Bible Revised Standard Version, 2nd edition (in Nestle-Aland Greek-English New Testament, 2008)

塚本虎二訳 新約聖書 第2版 (新教出版社 2012)

田川建三訳著 新約聖書 (作品社 2008-2017)

聖書 新共同訳 (日本聖書協会 2005)

聖書 口語訳 (日本聖書協会)

新約聖書 I〜V (岩波書店 1995-1999)

黒崎幸古著 註解新約聖書 (<http://stonepillow.dee.cc>) [文

語訳、口語訳、塚本訳、前田訳、新共同訳、NIV 併記]

Berean Literal Bible (Bible Hub, 2016)

Novum Testamentum Graece, 27th edition (in Nestle-Aland Greek-English New Testament, 2008)

Novum Testamentum Graece, 28th edition Griechisch-Deutsch (2013)

A Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature third edition (The University of Chicago Press, 2000)

新約釈義辞典 I〜III (教文館 1993-1995)

【旧約関連】(活用度の高い順に配列)

Bible Hub (<https://biblehub.com>); Interlinear, Parsing, Definition, Parallel etc.

La Bible Osty (Éditions du Seuil, 1973)

La Bible de Jérusalem (Éditions du Cerf, 2009)

The Holy Bible Revised Standard Version (Collins' Clear-Type Press, Printed 1965-72?)

旧約聖書 I〜XV (岩波書店 1997-2004)

聖書 新共同訳 (日本聖書協会 2005)

聖書 フランススコ会聖書研究所 (サンパウロ 2001)

イザヤ書 関根正雄訳 (岩波文庫 1961-1965)

ペブライ語聖書対訳シリーズ 1・3・20・22 (『創世記』出エシプト記、イザヤ書) (ミルトス 1990-2004)

Biblia Hebraica Stuttgartensia (Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1997)